ニトロプラス劇場
装甲悪鬼
村正
FullMetalDaemon
MURAMASA
暴走編
著・凪小石
絵・嶧。
なごみ文庫
© 2009-2010 Nitroplus

凪小石（なぎ・こいし）

何でも屋型のフリーライター。『装甲悪鬼村正』のヒロインの中では茶々丸派だが、それより気になるのが牧村さん。立ちグラないけど、ちょっと幼い感じのする外見の儚げな美女に違いない……。

◎原作

Nitroplus

「装甲悪鬼村正」より

◎イラスト

馨。（かおる）

セーラー服をこよなく愛するへっぽこ絵描き。
1冊丸ごと描かせて頂くのは初めましてでドキドキなう。
キャラは光と茶々丸がお気に入り。
あ、今ブログをリニューアル中です。なう。
http://www.kimuchi-raumen.com/

カバーイラスト：馨。

ニトロプラス劇場

装甲悪鬼村正　暴走編

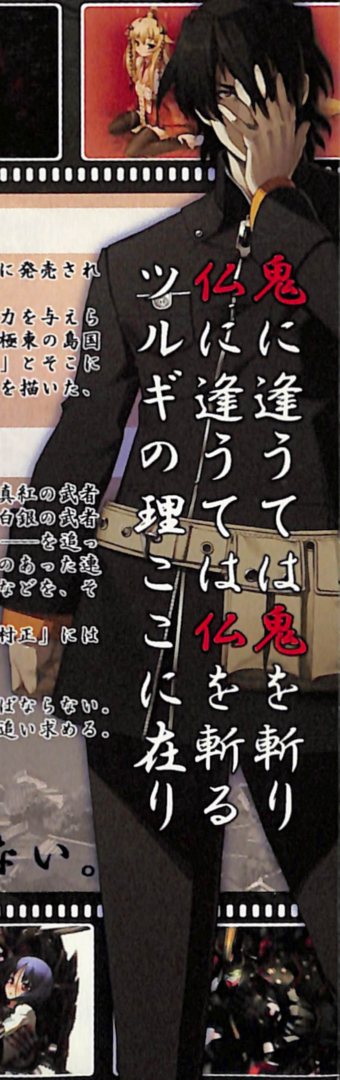
凪小石
原作：Nitroplus

ハーヴェスト出版

ニトロプラス劇場
装甲悪鬼
村正
FullMetalDaemon
MURAMASA
暴走編

「充填率
五十……
七十……
九十……」

香奈枝――マジカルアベンジャーへ
集まっていく、六波羅武者の……
いや、普陀楽山塞にいる全ての人間
の嘆きの感情。
彼女の中で荒れ狂う力の本流へと
変わったそれを、そのままステッキに
蓄積させていく。



鬼に逢うては鬼を斬り
仏に逢うては仏を斬る
ツルギの理ここに在り

✝装甲悪鬼村正✝

「装甲悪鬼村正」とは、2009年10月に発売されたニトロプラスのwindows用ADV.
「劔冑」という特異な鎧から強大な力を与えられた戦士「武者」が登場する世界。極東の島国大和国を舞台に、真紅の武者「村正」とそこに生きる人々の姿、そして激しい闘争を描いた、暗黒大河ドラマ。

✝あらすじ✝

非正規の警察官「湊斗景明」。彼は真紅の武者「村正」を纏い、関東一円を騒がす白銀の武者による大量殺戮事件――銀星号事件――を追っていた。その最中、銀星号と関わりのあった連続殺人犯や快楽殺人鬼、軍部の暴走などを、その劔冑を持って打破していく。
だが彼には、いや、彼の纏う劔冑「村正」には「呪い」があった。
「善悪相殺」「愛憎相殺」
敵を一人斬れば、味方も一人斬らねばならない。
故に彼は正義を語らずただ銀星号を追い求める。

これは英雄の
物語ではない。

これはマトモな物語ではない。
本編を欲するものは不要である。

装甲悪鬼
村正
MURAMASA
暴走編

人物紹介

湊斗景明（みなと・かげあき）

本編主人公にして稀代の朴念仁。鎌倉警察署の非正規職員という、不安定な職に気を揉んでいる。生真面目で常識的だが、それゆえに女性陣に振り回される。

三世村正（さんせい・むらまさ）

景明の纏う真打劔冑。普段は蜘蛛の姿をしているが、蝦夷の姿に戻れる術を持つ。景明の周りの女性たちを疎ましく思っている。鍛冶の技術はあるが、家事は壊滅的に苦手。

綾弥一条（あやね・いちじょう）
鎌倉市内に住む正義感の強い女学生。正義を体言する真打劔冑〝正宗〟を駆る。景明に惹かれアプローチをするも成功の気配は無い。こう見えて家事が得意。
大鳥香奈枝（おおとり・かなえ）
名家・大鳥家の長女。女性としては背が高いのがコンプレックス。侍従のさよとは漫才コンビのような間柄だが、よくおちょくられている。
湊斗光（みなと・ひかる）
湊斗家の長女で景明の義妹。その正体は巷で噂の〝銀星号〟。卓抜した戦闘能力を持つブラコン。纏う白銀の劔冑は、三世村正の母だが母のほうが何故か若く見える。
足利茶々丸（あしかが・ちゃちゃまる）
六波羅幕府最高幹部の一人、堀越公方。景明を取り込もうと様々画策する。目的と面白さのためなら手段を選ばない困った人。ある意味では、元凶。

永倉さよ（ながくら・さよ）
大鳥家に長年仕える永倉家の従者。主人の香奈枝のあしらい方に関しては右に出るものはいない。
岡部桜子（おかべ・さくらこ）
六波羅に居候する少女。やんごとない人物に惚れられているが、まったく気づいていない。
ふき
弥源太の孫でふなの姉。何の変哲もない一般市民のため、トラブルへの対応能力は低い。
ふな
弥源太の孫でふきの妹。やんちゃ盛りで蜘蛛形態の村正に乗るなど、景明たちに懐いている。
弥源太（やげんた）
孫と暮らす蝦夷の民。長坂とは浅からぬ因縁を持つロマンチスト。
鈴川令法（すずかわ・りょうぶ）
鎌倉で教師をしている。綺麗なものをそのまま保存しようと考えている変態。真打"井上真改"を持つ。
長坂右京（ながさか・うきょう）
六波羅軍大尉。昔弥源太と、一条の祖母一嬢をめぐり争うも手ひどく振られる。たが諦めていない。
野木山組の武藤（のきやまぐみのむとう）
鎌倉の暴力団・野木山組組員。顔と名前のあるモブ。下の名前は謎。

義清（よしきよ）
童心の稚児。童心様ラブ。童心以外は別にどうでもいい。そこに例外はない。
足利邦氏（あしかが・くにうじ）
六波羅の跡取り息子にして変人揃いの四公方に弄られるかわいそうな少年。現在片思い中。
遊佐童心（ゆさ・どうしん）
四公方の一人。全てを『面白い』で片付ける豪の者。実は今回主人公の景明より出番が多いのでは？
今川雷蝶（いまがわ・らいちょう）
四公方の一人で弄られ役。美的感覚のおかしい人。これでも六波羅最強との噂。でも出番は少ない。
大鳥獅子吼（おおとり・ししく）
四公方の一人で比較的常識人＝苦労人。言葉遣いは辛辣だがデレる様子はない。今回出番も少ない。
ウォルフラム・フォン・ジーバス（ウォルフ教授）
変態。パンツ着脱論第一人者。主な元凶その二。
クライブ・キャノン
GHQの中佐。冴えない風貌とは裏腹にかなりの策謀家。香奈枝の上司だが心中はいかに。
チャールズ・ウィロー
参謀第二部の部長を務めるGHQ少将。軽妙な言葉回しだがはらわたが煮えていることは明白。

●前書

ようこそおいでくださいました。私、大鳥香奈枝様にお仕えしております、侍従の永倉さよと申します。お見知りおきを。

さて、本日お目にかかっております皆さまにはすでにご存じでございましょうが、本書は『装甲悪鬼村正』の世界を舞台にしております。

しかしながら、物語はフィクションであり、ゲーム本編と直接の関わりはございません。所謂パラレルワールドというやつですな。

あちらで悲惨な末路を辿った方々も、こちらでは概ねゆるゆると暮らしていらっしゃるご様子。立場や人間関係、はては世界情勢に至るまで、食い違う部分がありましょうが、そこはそれ。大人の事情というものでございます。ご容赦のほどを。

まあ中には、より酷い目に会っているような方もいらっしゃるようですが……おっと失礼を致しました。後は読み進めてご確認くださいますようお願い致します。

それでは、どうぞごゆっくりお楽しみくださいませ。

目次

第一話　斯くも険しき使用人道……〇〇九
幕間一　魔法聖女マジカルアベンジャー　第一話
第二話　装甲悪鬼恋愛講座……五五
幕間二　魔法聖女マジカルアベンジャー　第二話
第三話　ダンス　イン　ザ　ウォーゲーム……一〇一
幕間三　魔法聖女マジカルアベンジャー　第三話
第四話　雷帝戦記……一五三
幕間四　魔法聖女マジカルアベンジャー　第四話
第五話　四公方編集会議……一九九
幕間五　魔法聖女マジカルアベンジャー　最終話

本書はニトロプラス製作のＡＤＶ
『装甲悪鬼村正』をベースに独自の
発想・解釈を加えたパロディ作品です
『装甲悪鬼村正』の作品内容に関する
公式見解を提示するものでは
ありません

斯くも険しき使用人道

大和国が参戦した二度目の世界大戦が、六波羅軍の降伏で幕を閉じ――大和の六波羅支配が始まって六年が経過した。
その終戦に前後する経緯により、各所から様々な反発を被った六波羅幕府だったが、混乱期は概ね収束しつつある。
機あれば大和国の占領を狙っていたと思われる、連盟の設置した進駐軍司令部（通称GHQ）。六波羅と並ぶこの一大勢力も、六波羅との友好な関係を促進する方向へと動いているようだ。少なくとも表面上は。
一時は国民の関心をさらっていた銀星号、紅の武者、地方反乱、各種怪奇事件といった諸々の出来事も、当事者たちの間で収まるべきところに収まった、そんな世界。
様々な問題、変事、珍事、奇人、変人を内に抱えながらも、今この時、大和国は平和であった。
そんな平和を満喫する男がここに一人。名を湊斗景明という。稀代の妖甲『勢洲千子右衛門尉村正』を纏う武者であり、悪を断つ正義の武者として、人々に英雄視されたこともある男だった。
普段は内務省警察局鎌倉市警察署属員という肩書きを持つ彼だったが、本日は一日休暇となっている。

『……そんじゃ、あたしはあっちをやってるから。洗い物は任せるからな』

『……はいはい、任せておきなさい』

時刻は正午過ぎ。開け放たれたガラス戸から、穏やかな空気が居間に流れ込んで来る。天気も快晴で気持ちが良い。

――パリーンッ。

『……あ……こういうこともあるわよね』

昼食はすでに終えており、ちゃぶ台の上は片付けられた後。景明はというと、新聞を広げ、記事に目を通している。泰然自若（たいぜんじじゃく）としたその様子は、正に自然体を体現している姿と言えた。

傍（かたわ）らでは、妹の光（ひかる）がテレビへ熱心な視線を注いでいる。普段は別々に暮らしている彼女だが、今日は兄が休暇ということで遊びに来ていた。

六波羅幕府　大和国を実質的に支配する組織。世界大戦での売国行為によって地位を確立した経緯を持つ。

ＧＨＱ　ゼネラルヘッドクォーター。国際連盟進駐軍総司令部。進駐軍そのものの別名としても使われる。

銀製号　関東一帯を騒がせている殺戮者。白銀の武者であると噂され、そのことから銀星号の名がつけられている。

警察局　政府の治安維持組織。しかし六波羅幕府成立後は骨抜きにされており、ほとんど機能していない。

――パリパリーンッ。
『……おい、さっきからすごい音がしてるんだが……。あーあー、こりゃひどいな。皿もタダじゃねぇんだぞ』
『……ちょっと失敗しただけでしょ！　貴女(あなた)はあっちに行ってなさい！』
『……まったく、自分の失敗で他人に当たってんじゃねぇよ。ほら、また手元がお留守になってるぞ』
――ガシャンッ。
『……くっ、他人の失敗をあげつらってる暇があったら、自分の仕事をやんなさいよ！』
『……てめぇ、人が親切で言ってやってんのに、何だその言いぐさは！』
ブラウン管の中では、少女と言うには些(いささ)か年齢を過ごした女性が、ヒラヒラと華美な装飾の服を着て、手にしたステッキで悪人たちを殴り倒している。その映像はなかなかに刺激的で、番組を見た青少年への影響を考えさせられそうな内容だ。
そんな映像を新聞越しに見ていた景明は、ふと新聞に掲載されていた一つの記事を思い出す。
「そういえば最近、怪しげな装いの女が市街で乱闘騒ぎを起こしているらしい。光も気を付けるんだぞ」
「ああ、わかった」

妹から気のない返事が戻ってくる。まあ、この娘に荒事の心配は無用だろうと景明は思い直した。
母親の影響からか武術を嗜む妹は、すでに達人と言えるほどの実力を持っている。戦って勝てる者など、大和国はおろか世界中に範囲を広げてもそうはいないだろう。兄弟子に当たる景明も、戦って勝てるとは思えないほどである。
そんな益体もないことを考えていた景明だったが、今は優先すべき問題があったことを思い出す。
（そろそろ様子を見に行かねばなるまい）
席から立ち上がる景明。家の奥からは、今も騒々しい物音やら怒声やらが聞こえてきていた。その音源に向かって歩きながら、彼はなぜこのような厄介な状況が起こったのかと、数時間前の出来事を思い返していた。

◆◆◆

「ありがとうございます」
お茶の注がれた湯飲みが自分の前に置かれ、その少女は礼を言った。
彼女の名前は綾弥一条。正義を尊び、警察署員として働く景明に、普段から個人的に協

力してくれている人物である。

一条に礼を言われた割烹着（かっぽうぎ）の女性は彼女に微笑みを返し、人数分のお茶を配り終えると奥へ静かに下がっていった。

「それで貴女、今日は何の用があって来たのよ？」

褐色の肌を持つ蝦夷（えみし）の女性が、一条へ微妙に険（けん）のこもった言葉を投げかける。

彼女の名は村正。景明を主とする劔冑（つるぎ）であり、妖甲として歴史に悪名を残す真打（しんうち）の一領である。通常、劔冑は仕手（して）が装着していない時、別の形態になる。しかし、所詮（しょせん）は鋼の塊。数打（かずうち）に勝る性能を持つ真打劔冑とはいえ、柔肌を持つ妙齢の女性に変化するなど、あり得ないことだ。

だが村正は自身の持つ特別な術により、それを可能にしている。ちなみに、通常の非装着時の形態は、深紅の巨大な蜘蛛（くも）だった。

「おまえに説明する義理はないんだけどな。まあいっか。湊斗さんが休みだっていうから、なんか話でもと思って……あ、それともどっか遊びにいきましょうか、湊斗さん」

村正への機嫌が悪そうな態度とは一転、景明に愛想（あいそ）良く問う一条。思春期の女子としては、非常にわかりやすい態度と言える。

一方の村正も、一条に対する態度は角のあるものだった。

「日頃の疲れを癒（いや）すための休暇でしょう？　それを貴女は、わざわざ連れ回そうっていう

の？　ダメダメ、御堂は今日一日、家でゆっくりするんだから」
「気晴らしってのは必要だろっ。それにおまえには聞いてない。ね、湊斗さん」
勢い込んで聞いてくる一条。しかし、景明は静かに首を振った。
「せっかくの申し出だが、今日のところは遠慮しておこう」
「そうそう、今日は私とゆっくり過ごすんだから。どっかの誰かさんは、普段から御堂に付きまとって迷惑かけてるんだから、休みの日くらい解放してあげてちょうだい」
「なんだと！」
今日の村正はいつも以上に一条に絡んでいるな、などと思いながら、景明は静かに茶を啜った。
「そんなことありませんよね？　湊斗さん」

蝦夷　高度な鍛冶技術を持つ種族。褐色の肌と長い耳が特徴。短命で一定の年齢に達すると老化が止まる。
劔冑　魂を宿し、装着者に超常の力を与える甲冑。この世界における最強の兵器。真打と数打に別れる。
真打　古代の技法を以て作られた劔冑。鍛冶氏の魂が宿り、中には自律意識を持つものもいる。
仕手　帯刀の儀をもって劔冑と契約を果たした者。これにより、遠距離でも劔冑との交信が可能になる。
数打　複製人体を使用して作られた量産型の劔冑。性能は「真打」に劣るが生産性に優れ、真打劔冑から戦場の主流を奪いつつある。

「ん？　ああ、一条にはいろいろ助けてもらっている。村正も変に煽るな」
「ほら見ろ」
「ふん」
勝ち誇る一条。それに対し、窘められた村正は不満そうだ。
（まるで子供の喧嘩だな）
景明は、心の中で溜息をつく。
今は人間と変わらない姿をしているものの、村正は劔冑である。劔冑というものは、基本的に理性的、合理的な考え方をするもので、普段の彼女もその例に漏れない。
一方、一条についても、年齢より成熟した精神を持っていると感じられることがしばしば。それが、なぜ二人そろうとこのようなことになるのか。
姦しい言葉のぶつけ合いを眺めながら、景明はお茶を啜った。ほどよい渋味が口の中に広がる。
「うむ、うまい」
景明の呟きに釣られたのか、一条も自分の前に置かれたお茶に手を伸ばす。
「あ、ほんとだ。へえ」
一口飲むと、感嘆の言葉をもらす。
「これ、さっきの人が淹れたんですよね？　葉はそこそこだけど、これは淹れ方がいいん

だな……」
「ほう、わかるのか？」
「ええ、お茶も婆さんに仕込まれたんで。美味い物が美味いと感じられる程度には、ですけどね。先ほどの人は家政婦の方ですか？」
「ああ、牧村さんといってな。家事一切をお願いしている」
この家は、義父から借り受けて住まわせてもらっている。景明がここに移り住んでからは、ずっと牧村に家事の面倒を見てもらっていた。
心苦しく思い、手伝いを申し出たこともあるのだが、主が使用人の仕事を奪ってはいけないと、いつもやんわりと断られてしまっている。
そういえば以前、景明と同じことを考えていたのか、村正が手伝いを申し出たことがあった。しかし……。
「なによ？」
視線に気付いた村正が、憮然とした表情を返す。そのやりとりに、なにかを察した一条がにやりと笑う。
「ああ、劔冑には家事なんてできないと」
痛いところを突かれたのか、顔を紅潮させる村正。たしかに以前手伝いを申し出た時は、助けるどころか明らかに仕事を増やしていた。

それでも牧村は、いつもと変わらぬ柔らかな微笑を浮かべていたが、心中には思うところがあったのでは、と思わなくもない。
「わ、私は勢洲千子右衛門尉村正よ？　家事ぐらい軽くこなせるわよ」
「へえ」
動揺する村正を見て確信を深めたのか、一条の笑みが大きくなる。
「偉そうにしているけど、そういう貴女はどうなのよっ」
「あたしは、これでも一人暮らしをしてるんだ。家事なら一通りこなせるさ」
「貴女みたいな無骨な人間が、本当に？　信じられない……」
余裕たっぷりな態度の一条に、村正は明らかにショックを受けていた。
「てめえがあたしのことをどう思ってるか、よぉくわかった。が、まあそれは置いといて、疑うんなら腕前を見せてやってもいいぜ？」
「え？」
「それじゃ、どっちが湊斗さんの役に立てるか、勝負な」
「な……ちょっと何でそういう話になるのよ？」
話の展開に戸惑う村正。一条は容赦なく追撃の一手を打つ。
「はは～ん、やっぱ所詮は劔冑。戦闘以外じゃ湊斗さんの役には立てないか」
「な……わ、わかったわよ。やってやろうじゃない！」

「よし！　そんじゃ湊斗さん、あたしは牧村さんに挨拶がてら、話を通しに行ってきますんで。覚悟しとけよ、村正」

そう言って居間を出て行く一条。村正はといえば、不安げな視線を景明の顔に投げかけている。

「自業自得だ」

「う……何よ！　公家（くげ）の箱入り娘じゃあるまいし、家事ぐらい本気になれば楽勝よ！」

明らかな強がりを聞きながら、景明は溜息をつく。

しばらくして戻ってきた一条は、予備の割烹着を抱え、親指を立てた拳を笑顔で突き出したのだった。

◆◆◆

牧村が用事で出かけるということもあり、一条の申し出は至極あっさりと受け入れられた。汚れてはまずいと二人に貸し出された割烹着を身につけ、準備が整う。

こうして二人の家事勝負が実現する運びとなったのだが、やはり村正にとって家事は鬼門だったようだ。

挑発に乗って相手の得意（自分の不得意）な戦場へと誘い出された今、彼女はすでに必敗

の形になっていると言える。
もちろんこれが、相手の挑発にあえて乗ったと言うのなら話は別なのだが……。
――カシャーンッ。
「あ……」
「おまえはもう触るなっ」
この光景を見れば、そんなことはあり得ないだろう。
床には陶器(とうき)の破片が無残に散らばっている。その中心付近では、村正がおろおろしているのが見て取れた。
一方、一条はというと、すでに事態の収拾に移っており、皿だったものの残骸(ざんがい)のうち大きい破片から拾い集めている。
「邪魔だから隅(すみ)に寄っとけ。ああ、破片を踏まないように気を付けろよ」
「……わかってるわよ」
指示に従って渋々といった様子で移動する村正。一応、責任は感じているようだ。
「ああ、湊斗さん。今、危ないですからこっちにこないでくださいね」
「諒解(りょうかい)した」
一条の言葉に頷きを返しておく。それにしても、なんだかんだ言って後始末をするのだから、彼女も面倒見がよい。

「苦労をかけているようだな」
「いえ、まあ……たいしたことじゃないです」
苦笑いを浮かべながら、そばにあった箒で細かい破片を集めていく一条。
「それにしても、これくらいのことができないなんて、よっぽど親のすねをかじってたんですかね。あいつは」
「さて、どうだろうな」
劔冑とは、鍛冶師がその魂を込めて完成するものである。これは比喩ではなく、鍛冶師は文字通り命を賭して、その身を劔冑に変じるのだ。だからこそ、鋼の塊が知能を持ち、超常の力を有し、戦場で圧倒的な戦闘力を奮う兵器となり得る。
現在は劔冑となっている村正も、かつては人としての生活を送っていたはずである。
「まあ家事経験の有無はともかく、職業柄、不器用と言うこともないと思うのだが。単に相性が悪いのかもしれんな。人には向き不向きがあるものだ」
「あはは、そうかもしれませんね」
一条が手際よく片付けを済ましていく様を見ていて、ふと違和感を覚えた景明は、何が原因かと考えてみる。
そんな気配を察したのか、彼女はこちらに顔を向けてきた。
「どうかしましたか？」

「いや、迷惑を被っている割に、存外楽しそうだと思ってな」
そう、彼女からは苛立ちや怒りといったものを、あまり感じないのだ。困ったような顔で、文句も口をつくが、その身体から負の感情が発散されている様子はない。
彼女の直情一途な性格では、感情を心の内に溜め込むといったことも考えにくい。
「へ？」
予想外の言葉だったのか、不意をつかれたような表情を見せる一条。しかし、それもすぐに照れたような笑みに変わる。
「まあ、婆さんが死んでからずっと一人でしたから。たまにはこういう騒がしいのもいいな……なんて、思ってるのかもしれません」
そう言いながら、一条は箒とちりとりを脇に置く。皿の残骸はすでに纏められていた。
「自分で言うのもなんですけど、気の長い方じゃないし、たまにでいいですけどね」
「そうだな。しょっちゅうあっては、家計的にも優しくない」
「あはは、そうですね。……あれ？　そういえば、静かだと思ったらあいつどこに行きました？」
『ひゃあっ』
どこからか聞こえてきた破壊的な音色を聞いて、二人で溜息をつく。
「さて、いくか」

「はい、今度は何をやらかしたのやら」
一条の浮かべた苦笑いは、優しげなものだった。

◆◆◆

居間に戻ってみると、そこには散々な光景が広がっていた。
「いたんなら、止めてくれればいいものを……」
テレビを見続けている光に声をかけるが、反応なし。凄まじい集中力だった。
その後、村正を脇にどかして片付けを行った二人は、彼女に単独行動を行わせるのは無謀ということで、結論が一致。勝負というお題目はいつのまにかなかったことになり、一条は村正の動向を監視しながら、一緒に作業を行うこととなった。しかし……。
「なんで貴女と一緒に……」
「胸に手を当てて、今までの自分の行動を思い返してみろ」
「ちょっと失敗したってだけじゃない」
「いやいや、自分が割った皿の枚数を思い出せ。ちょっとなんて控え目な表現、臆面(おくめん)もなく使うんじゃねえよ」
「そ、そう、星の巡りが悪かったのよ。不運なんてそんな続かない。運の総量は決まって

いるって聞くし、ここからは大丈夫なはずよ」
「それじゃ、もうすでに一生分の運を使い果たしちまったんだな。事故とか気を付けた方がいいぞ。家の中でも油断するな」
「御堂を残して私が死ぬなんてことはありえないわ。まあ、油断するなっていうのはもっともな話よね。すでに敵が入り込んでいるかもしれないし」
「お望みなら相手になってやってもいいぜ。ああ、湊斗さんのことは心配しなくていい。物壊すしか能のない鉄塊の代わりに、あたしが誠心誠意、お世話するから」
「あら、そんなことを言われると、心配事しか残らないのだけど。一人よがりな正義馬鹿にいつ御堂が襲われるかって考えたら、死んでも死にきれないわ」
「この、疫病神が何言ってやがる。おまえがいなくなれば、湊斗さんも平和に暮らせるんだよ！　な、なんならあたしと一緒に住んでもいいし……」
「何どさくさまぎれに言ってるの。この色ボケ娘！」
「な、なんだと！」
「……二人とも、掃除をするのではなかったのか？」
万事（ばんじ）こんな調子である。正直、不安で仕方がない。
「あーあー、誰かさんのせいで、ガラスにヒビが入っちまってるよ」
「くっ、悪かったわね」

「そこ、埃が残ってるぞ。ちゃんと拭き取らないと」

「わかってるわよっ。まったく小姑みたいに細かいことをネチネチと……」

「はいはい、小姑でいいからしっかりやってくれよ。汚れが残ってちゃ、掃除してる意味がないだろ?」

「うるさいっ、わかってるわよ！　……きゃっ」

振り向いた村正は、その拍子に置いてあったバケツを足に引っかけ、倒してしまった。黒くにごった水が廊下に広がっていく。

「ごめんなさ……」

「うわ……はあ、しようがねえなぁ。気を付けてくれよ」

「うっ、こんなところに置くのが悪いんでしょ！」

反射的に言った謝罪を飲み込んで出てきたのは、いいがかりの言葉であった。

「だいたい、一人でできることを二人でやろうっていうのがいけないのよ！　横からごちゃごちゃ言われて気が散るし、知らない間に邪魔なものを置かれるし！」

「人がせっかく手伝ってやろうってのに、あたしが悪いってのかよ！」

「押し付けがましく言って、余計なお世話よ！」

そう言って村正が投げたぞうきんは、一条の顔面に見事命中する。

「このやろう……上等だっ！」

当然、一条は怒り爆発。臨戦態勢に入る。

「まあ二人とも落ち着け」

ここまで黙って見守っていた景明も、たまらず声をかけた。しかし二人は聞く耳を持ってくれない。

「ちょっと待っててくださいね、湊斗さん。この役立たずな置物を、物置に片付けてしまいますから」

「ほう……やれるものならやってみなさい。相手になってあげるわ」

二人の間の空気が張り詰めていく。しばしの静寂、そして、動いたのは同時だった。

しかし、互いの攻撃が交錯する寸前、二人の間に影が割り込む。次の瞬間には、二人とも攻撃の勢いそのままに、進行方向へと投げ飛ばされていた。

「あまりに騒がしいので来てみれば、二人とも何をやっている。景明が困っているではないか」

倒れる両者のちょうど中間に立った光が、二人を冷ややかに見下ろした。

「この娘が掃除の邪魔をするから……」

「わからず屋が掃除の邪魔をするから……」

光の視線に気圧されたのか、二人の口からは言い訳じみた言葉が出てくる。

「掃除……？　この有様で、か。まったく、二人がかりでこの程度のこともこなせないと

は情けない」
「くっ……正論だけど、おまえが言うなって言いたくなるのはなぜなんだ……」
「この小娘……自分は手伝いもせずにゴロゴロしてるだけのくせに……」
「何を言っている。やらないのではない、やる必要がないのだ。なにせ家事など母上や景明が全部やってくれるからな」
「いや、それもどうなんだ、我が妹よ」
恥じる様子もなく堂々と言い放つ光に、思わず突っ込む景明。しかし、村正たちはというと、なぜか打ちのめされたような表情である。
「ようは親の脛をかじってるんだろ。情けないことを臆面もなく言い切りやがって……」
「でも、御堂にお世話してもらえるとか……。なんなの、この言い知れぬ敗北感は……」

◆　◆　◆

一度頭を冷やせと、光に家から追い出された村正と一条は、商店に向かう道を並んで歩いていた。
口には出さないが、考えていることは同じだっただろう。光の言葉は道理であったし、それを怒られるのは当然のこと。反論のしようもない。

もっとも、仮に二人が逆ギレでもして光に抵抗しようと考えたとしても、技量の差は明白。返り討ちに遭うのは二人ともわかっている。たとえ村正と一条が協力して戦ったとしても、結果は同じだろう。
「「はぁ」」
同時に溜息をついて顔を見合わせる村正と一条。
「「ふんっ」」
しかし、それすら面白くなかったのか、視線が交わったのは一瞬。すぐにあらぬ方へと互いに顔を背けた。
「まったく、とんだとばっちりだぜ」
「何よ。私だけが悪いっての？」
「明らかにおまえが悪いだろ、さっきのは」
「う……」
「掃除もろくにできないなんて、どんな教育を受けたんだか」
「今日は調子が悪かっただけよっ。それを勝ち誇って、みっともない。器が知れるわよ、お嬢さん」
「……」
「……」

またもや膨れあがる緊張感。不穏な気配を察したのか、道行く人々は二人を避けるように道を空けている。当然、彼女たちがそれに気付いた様子はない。

だが、空気を読めない人間というのは、どこにでもいるものである。

「ちょっとそこのねーちゃんたち！」

声をかけたのは、軽薄そうな三人組の男だった。

「あん？」

突如かけられた言葉に、一条は胡乱げな視線を返す。しかし、男たちは微塵も気にした様子はない。いや、気付かなかったのだろうか。

「ねーちゃんねーちゃん、どっか遊びにいこうぜぇ」

「あんたたちに付き合っていられるほど暇じゃないの。他を当たりなさい」

「つれないなぁ、いいじゃねえかよ。な、な」

断られて、なおも食い下がる勇気ある男たち。だがそれは蛮勇であり、状況認識の欠如を表すものであった。

肩へ手を回そうと伸びてくる男の手を掴んだ村正は、そのまま背負って男を投げ飛ばす。地面に叩きつけられた男は、空気を全て吐き出すかのような呻きを最後に、動きを止めた。

「鬱陶しい。絡むんなら相手を選びなさい。怪我するわよ」

「あーあ、先に言ってやれよ。もう聞こえてねーぞ」
そんなことを言う一条も、投げられた男を心配する様子はなく、一瞥(いちべつ)した後は見向きもしていない。
「てめぇ、何しやがんだ！」
怒りに燃えた別の男が、一条に掴みかかろうとしたが、それは叶わなかった。男の手を反射的にかいくぐった一条が、相手の顎(あご)にそのまま掌底(しょうてい)を叩き込んでいたのだ。
「お、悪い悪い。思わず手が出ちまった」
「手癖の悪い娘ね」
膝から崩れ落ち、白目を剥(む)いている男を一瞥して村正は言った。
「このクソアマっ」
「「ああん？」」
二人に睨(にら)まれて、怯む三人目の男。
「突っ張る度胸がないんだったら絡んでくるなよな」
「気を付けなさい。この娘、凶暴だから」
「おい、先に手を出したのはおまえだったよな」
「無抵抗主義ってガラじゃないのよ」
立ち竦(すく)む男を無視して、二人は言い争いながら歩き去っていった。

◆　◆　◆

「ただいま、御堂」
「ただいま帰りました、湊斗さん！」
「ああ、二人とも帰ったか」
両手いっぱいに買い物袋を下げた二人を、景明は出迎えた。
光に家から追い出されてから、どこに行ったかと思っていたのだが、どうやら買い出しに行っていたらしい。
「それじゃ今から夕飯の準備、始めますから」
「ああ、そうなのか。すまないな一条」
牧村はまだ帰っておらず、夕飯は店屋物(てんやもの)か自分で作るか、などと考えていた景明だったが、どうやら一条が面倒を見てくれるらしい。
景明も一通り料理はできるが、所詮は男料理。標準を超える評価が得られる物を用意できる自信はない。しかし、景明の表情は、続く村正の一言で凍り付いた。
「期待して待っていなさい」
「……村正、おまえもやるのか？」

「ええ、もちろん。今までの汚名を払拭してみせるから期待して待っていてね、御堂」
「いやちょっと待て」
「何？　ああ、台所への立ち入りは禁止、つまみ食いは駄目よ。すぐに用意するから、お腹をすかせて待っていなさい」
そう言って機嫌良さそうに歩き去る村正を、景明は呆然と見送った。
「それじゃ、あたしも行きます」
一条に声をかけられて我に返った景明は、彼女の両肩に手を乗せて言った。
「一条……村正のこと、くれぐれもよろしく頼むぞ」
一条を見つめる彼の瞳には、縋るような不安げな色があった。しかし、その原因がわからない一条は、首を捻るばかり。
「はあ？　は、はい、わかりました」
頭に疑問符を浮かべながらも一条は頷く。景明は神に祈るのにも似た気持ちで、彼女を見送ったのだった。

◆　◆　◆

もちろん、抱えている不安は大きい。しかし、事ここに至ればできることなど祈ること

ぐらいだろう。そんなことを考える景明は今、ある種の悟り(さと)を開いたような心境だった。一応、一条には含みを持たせている。あれで彼女は機転が利き、面倒見も良い。何とかしてくれると信じ、あとは天命に任せよう。景明の心持ちはそんな感じである。

手持ち無沙汰(ぶさた)に思った景明は、傍らに置いてあった新聞を開く。先ほどすでに目を通してしまっていたが、他にやることもないのでしようがない。何もせずにぼうっとしているよりは、気も紛れるだろう。

（静かだ）

時刻はすでに夕刻。現在、居間にいるのは景明一人。先ほどまでテレビを見ていた光は、すでに家路についている。武の体現者――愛すべき妹は、すでに去ったのだ。

（いざとなったら、身体を張るしかあるまい）

そんな悲壮な決意を抱いていると、台所からはだんだんと賑やかな声が聞こえるようになってくる。

『あぶなっかしいなぁ。おまえ、包丁使ったことあるんだろうな？』

『当たり前じゃない。それより、気が散るから話しかけないでくれるかしら』

『へいへい』

『もう……苛々(いらいら)する。使いにくいったら……』

『おい、その大太刀(おおだち)、どっからだした。てか、それでどうするつもりだ？』

『大丈夫、これは謂わば私の一部。こっちの方が使い慣れてるんだから』
——ガンッ。
『ああああっ！　何やってんだ、てめえ！』
『食材の下拵えでしょ。見てわからない？』
『まな板どころか、台まで切れてるじゃねえか！』
『細かいことよ』
『……さっき湊斗さんが謂わんとしてたこと、だんだんわかってきたぞ』
『それじゃ、次はっと』
——ドコンッ。
『わああ！　おまえ、鍋の使い方、間違ってる！　いや、もうやんないでいいから！　何も触るな！』
『うるさいわね、邪魔するんじゃないわ……よっ』
『あああああああ！』
台所からは、何だか不穏な気配が漂いまくっているが、それでも景明は新聞に視線を落とす。はたして天は、自分にどのような運命を用意しているのか、などと達観しながら。
しかし、再び聞こえてきた破砕音に、腰を上げる景明。
それは運命論者じみた心持ちが変化したからではなく、破壊的な騒音が、厨房とは別の

方角から聞こえてきたからだった。

◆　◆　◆

「おらぁ！　さっさと出てこいやっ！」
暴力的な雰囲気を纏わり付かせた男が、壁にバットを叩きつけながら叫ぶ。
玄関には、見知らぬ男たちが並び、思い思いに破壊活動を楽しんでいた。彼らのような者を拒絶するためにこそあった扉は、すでに原形を留めていない。
「お待たせしました。どういったご用件でしょうか」
対応に出た景明に、すぐさま威圧的な言葉がいくつもぶつけられる。
男たちの人数は、見えているだけでも十を越えている。家の外までは把握できないが、気配を察するにゼロということはないだろう。
しかし、この程度のことで怯んではいられない。自分が預かっている敷地内で、いつまでも悪漢の破壊活動を自由にさせておく訳にはいかないのだ。
「この家に女が二人いるだろっ。そいつらにうちの仲間が世話になったらしくってよぉ。やられっぱなしってのも悪いから、お礼に来たんよ」
リーダー格の男が前に出て言葉を返す。主張する内容は理解しやすかったが、その内容

は、はいそうですかどうぞご勝手に、などと頷けるようなものではない。
「それはどうも、恐れ入ります」
あくまで丁寧に返答する景明。その態度は、怒りに燃える男たちからすると、人を食ったようにしか見えなかった。
「この野郎、バカにしてんのかっ、ああん⁉ わかったら、さっさとそいつら出せやっ！」
「当人たちを連れてきた場合、どういった対応をされるのでしょうか」
「そんなこたぁ、てめえには関係ねえだろ！ 黙って連れてこいっ！」
怒りを顕わにして地面にバットを叩きつける男。
景明は、相手に悟られないように小さく溜息をついた。最初に相手を見た時から思っていたことだが、やはり話合いにはなりそうになかった。
《御堂、大丈夫？ 太刀を送りましょうか？》
村正からの声なき声が、頭の中に直接伝わってくる。
（無用だ。あと、混乱を助長するのでおまえたちは出てくるな）
心の中で返答を返す景明。劔冑と仕手は、言葉を発しなくても会話ができる。村正にはこれで問題なく伝わったはずだ。
あとは目の前の招かれざる客をどうするかだが、彼の取り得る手段は一つだった。
「あなた方の仰る二人は、確かに当家に縁ある者。とりあえずこちらで経緯を確認し、も

し仰るとおりの非があれば、後日改めてお詫びに伺います。ですので、今日のところはお引き取り願いたい」

平和的に、会話で解決する。これは彼の信条だった。

「ざけんな！　こっちは被害者だぞ！　とっとと女を連れてこい！」

「お断りします。あなた方の行動は礼を失しており、当家の客と認め、迎える訳には参りません。重ねて言います。事情の確認が済みましたらお伺いしますので、今日のところはお引き取りを」

「なめてんのか！　このやろう！」

景明の言葉に逆上した男が、バットを振り下ろす。景明はそれを避けようともせず、肩口で受け止めた。

「気が済まれましたか？」

「て、てめえ！」

態度を変えない景明を見て、男はさらにバットを振りかぶる。しかし、それが振り下ろされることはなかった。

景明の後方から飛び出した村正と一条の蹴りが、男を屋外にまで弾き飛ばしたのだ。

「下郎ども。私の御堂に手を出したのだから、覚悟はできているのでしょうね」

「好き勝手やってくれたな……まとめて相手になってやるから、かかってこい！」

景明を庇うように立つ二人は、見るからに怒りに燃えていた。
「おい村正。湊斗さんに迷惑かかるから、加減間違えるなよ」
「言われるまでもないわ。たとえ殺してくれと懇願されても、息の根をとめてなんてあげないんだから。ふふふふふ……」
二人は、止める間もあらばこそ敵の集団へと躍り込む。そして手当たり次第に蹴りで、拳で、男たちを打ち倒していく。防衛本能を刺激された男たちも反撃に移るが、勝負にすらなっていない。
目の前で繰り広げられる一方的な殲滅戦を眺めながら、景明は暗く沈んでいた。
このような展開は、間違っても彼の本意ではない。しかし、もはや彼女たちに届く言葉はなく、闘争を力で抑えつけるだけの武力を持った妹も、すでに去った後。
「二人ともほどほどに、な……」
景明は、無駄とは思いながらも二人に声をかけずにはいられなかった。

◆　◆　◆

それからしばらくして。
散々に叩きのめされた暴漢たちを警察に引き渡した景明は、普段から不景気な表情をさ

らに陰鬱にしていた。
乱戦が始まってから、男たちはすぐに抵抗を諦めていた。しかし、それで相手の追撃が止むことはなく、彼らが村正や一条から逃げ回ったことで戦場は拡大。村正たちの掃討戦は、屋内を含む家敷地全体へと広がったのである。
その結果、家の中は、どこも暴風が吹き荒れたかのような有様になってしまっていた。無事なガラスは見つける方が難しく、壁には人が出入りできるほどの穴が空いている場所もある。
元気に責任のなすり付け合いを始めた二人を前に、説教が先か、片付けが先か、そもそも自分たちだけで片付けられるのか、などと景明が考えていると、玄関口に女性が立っているのに気付く。それは、いつの間にか帰宅していた牧村だった。
そろってひたすら頭を下げる三人に対し、牧村の対応はいつもと変わらず、微笑みを浮かべるのみ。その様は、安堵を通り越して恐怖を感じるほどであった。
結局、片付けは翌日からということで、一条は帰宅。景明たちも牧村がどこからか用意した料理で食事を済ませた後、就寝となった。
明けて翌日。目を覚ました景明たちは、大きな衝撃を受けることとなる。
あれだけ荒れ果てていた屋内が、全て元通りになっているのだ。乱闘の前に村正が破壊した台所各所、食器を含めて全てである。

夢でも見ていたのかと思いながら迎えた朝食。いつものように食事の世話をしてくれている牧村をぼんやり眺めていた村正が、ついに疑問を口にする。

「えっと……牧村さん。これは……？」

彼女は何も応えず笑顔を浮かべ、奥へと下がっていった。違いといえば、若干いつもより笑みが深かったように見えたくらいだろうか。

しかし、それだけで事実を悟るには充分であった。

「な、何者なの、あの人……」

「俺に聞くな……」

牧村の底知れなさに、二人は戦場とはまた違った戦慄(せんりつ)を覚えるのだった。

（第一話・了）

魔法聖女マジカルアベンジャー
第一話 爆誕！ 復讐の聖女

人の絶えない鎌倉市街の路上で、その音は静かに奏でられていた。
染み入るような重厚な奏。聴者の心を揺さぶる美しい音色。しかし通行人たちはその演奏に気付くことなく、忙しげに通り過ぎていく。
だから当然、演奏が終わっても奏者である彼女——大鳥香奈枝に対する喝采は起こらなかった。
「お疲れ様でございます、お嬢さま」
そう言って、そっと紅茶が注がれたカップを差し出したのは、傍らに控えていた老婦だった。
彼女の名は永倉さよ。長年、香奈枝の世話をする従者である。
「ええ、ありがとうばあや。ああ、今日もいいお天気。バロウズも機嫌良く声を聞か

せてくれたわ」

香奈枝は通り過ぎる人々を眺めながら、抱きかかえた大きな弦楽器を撫(な)でる。それは母が愛し子を慈しむようだった。

「世は太平、全て事もなし、でございます。楽器とは弾き手の心を映す鏡。バロウズも平和なる世を楽しんでいるのでしょう」

主人に倣(なら)い、視線を人の流れへと向けるさよ。彼女の言葉を聞いて、香奈枝は口元を綻(ほころ)ばせる。

「ふふ、そうかもしれないわね。それにしてもこんな日は、何か素敵な出来事が待っていそうでワクワクするわ。ね、そうでしょう、ばあや」

「はい、全くでございます。お嬢さまがどんな騒動を巻き起こすかと思うと、このさよ、期待に胸を膨らませずにはいられません」

「あらあら、ばあやったら酷(ひど)いことを言うのね」

「おっとこれは失言。お嬢さまは騒動を起こすのではなく、騒動がお嬢さまの周りに寄ってくるのでしたな。まこと世紀末向きのスペックでございます」

「もう、ばあやったらお世辞がすぎるわ」

そんな会話を二人がしていると、雑踏が作り出すざわめきを悲鳴が切り裂いた。

「きゃ、ちょっとやめてください！」

囲んでいる。
声のする方向へ視線を向ければ数人の男たちが、姉妹だろうか二人の蝦夷の少女を取り
「ねーや、怖いよぉ」
「へいへいへいへい、こっちだ嬢ちゃん。それ、もう少し」
「おっと惜しかったな。へいパス」
「返して！　返してください！　それにはお土産代が入ってるんです！」
年長の少女は、手提げ袋を男に奪われており、必死にそれを取り返そうとしている。
しかし、手提げ袋は少女が近づくと別の男の手へと渡り、そちらへ向かえばまた別の男
へ。いつまでたっても取り返せる気配はない。
「どこにでもゴミっているのはいるものね、ばあや」
「はい、全くでございますな」
顔をしかめながら同意を求める香奈枝に、さよは絶妙の間で合いの手を返す。それは、
まるで役者同士が行っている即興劇のようであった。
「やっぱり、ゴミを見たら片付けるのも善良な市民の義務よね」
不敵な笑みを浮かべ、やる気満々といった風の香奈枝だったが、その勢いは彼女の忠実
な従者によって減じられることとなった。
「あいやお待ちを。あれなるは、野木山組の構成員と見受けます。関わりを持てば、少々

厄介なことになるやもしれませぬぞ」

いつになく弱気な発言をするさよに対し、香奈枝は彼女の正気を疑うかのように、大袈裟に驚いてみせる。

「らしくないですわね。たかがヤクザが何だというの？　そんなもの、ちょっかいかけてくるようなら根本から潰してやればいいじゃありませんの」

「まこと勇ましいお言葉、さよは感服致しました。が、問題は野木山組が六波羅御雇というところにございまして。少々話が大きくなる可能性がございますな」

六波羅御雇という看板は、幕府との繋がりがあることを示している。ＧＨＱに所属する香奈枝にとっては、少々厄介な火種になりそうな相手だった。

「それでは、あなたはわたくしに、この光景を見て見ぬ振りをせよ、とおっしゃるの？」

「遺憾なことながら」

あくまで冷静な態度を崩さないさよに、香奈枝は不満を隠そうともしない。

「庶人の平穏を守るのは貴人の務め。わたくしには耐えられません」

「お嬢さまは堪え性が足りませんな、恐れながら老い先短い身のさよは、将来が心配で心配で……」

「あなたの心配は、自分の居ないところで騒動が起こらないか、ということでしょう？」

「いえいえ、お迎えが来た後に、不幸に遭遇して野犬のように打ちのめされるお嬢さまを

拝見できないかと思うと、ということでございます」
「ひどっ、ひどいことを言ってますわ、この従者！」
付き合いが長く気軽な関係とはいえ、あんまりな言われようだった。
「それで、どうなさるので？」
「もう、わかっているのでしょう？　もちろん、介入します」
香奈枝の言葉に、さよは満足げに頷いた。
「それでこそ、さよが敬愛するお嬢さまでございます。そのご覚悟、見事と言うほかございません。実はこんなこともあろうかと、用意しておいた物がございます。これをお使いくださいませ」
そう言って、どこに隠してあったのか、持ち運び可能な簡易衣装ケースを取り出すさよ。その中を確認して、香奈枝の表情が凍り付く。
「……何ですの、これ？」
「お嬢さまのためにさる筋より調達した、特殊装備でございます。十全な能力を引き出すには若干の作法が必要となりますが、御身がこれを身につければ、百騎の劔冑にも勝る剛力を得られましょう」
得意満面といった様子で語るさよ。しかし、香奈枝の表情は優れない。
「さすがにこれは……ないんじゃないかしら……」

「この状況を打破するには必要なのです！　それともお嬢さまは、無辜の民を見捨てると仰るのか！」
なおも気乗りしませんといった態度を見せる主人を、従者は叱り付ける。
「くっ」
痛いところを突かれたのか、悔しそうに唇を噛む香奈枝。
「納得していただけたようで何より。ささ、ご準備を。手遅れにならないうちにお早く」
「わかりましたわよっ！」
香奈枝は、さよの手からひったくるように衣装ケースを受け取った。

「まあまあお嬢ちゃんたち。こんなところじゃなんだから、事務所来て遊ぼっか。な」
「そ、そんな。いや！　誰か助けて！」
男に腕を取られ、悲鳴を上げる姉。しかし、悲痛な声に応える者はいなかった。
「へっへっへっ、無駄だ無駄だ。俺たち野木山組に逆らおうなんて馬鹿は、この街にゃいねーんだよ」
「うわーん、誰か……誰か助けてよぉ！」
往来に妹の泣き声が響いたその時、少女の嘆きに応える者が現れる。
それは凛とした女性の声だった。

「その汚らわしい手をお離しなさい！」

「何？　誰だ、俺様たちにそんな口を利きやがったのは！　出てこいやっ！」

声の主を捜す男たち。往来に人垣を作った野次馬たちは、関わりになるまいと慌てて視線をそらす。

「あ、あそこに誰かおられますぞっ！」

いつまで経っても相手を見つけられない男たちに、見かねたさよが屋根の上を指さしながら叫ぶ。

そこにいたのは、一人の女だった。彼女は、手に持った先端にハートがついている二尺半ほどのステッキを、男たちに突きつける。

「罪なき女子供に対する乱暴狼藉（ろうぜき）、目に余るものが……」

浪々（ろうろう）と歌い上げるように喋る女。しかし、男たちは、彼女の口上を無視してヒソヒソと話し始める。

「お、おい、何だあの格好……ゴスロリ？」

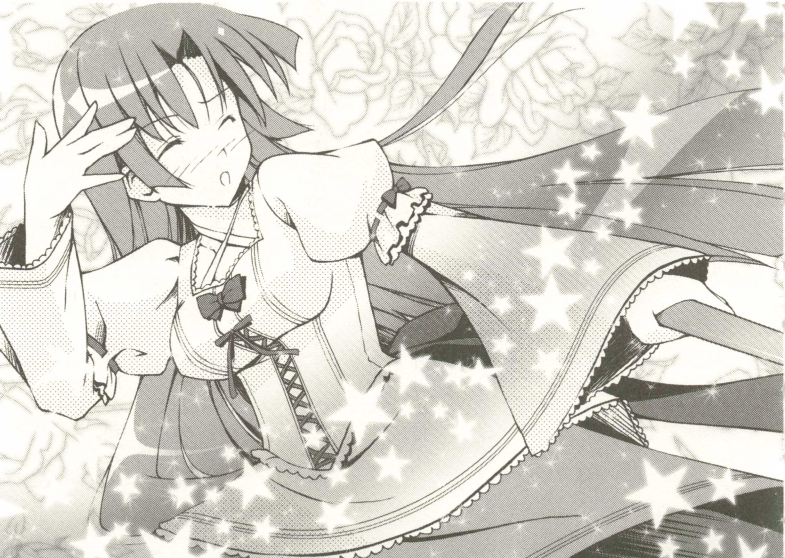
「あの手に持ってるの、玩具（おもちゃ）屋で見たことあるわ。変身ステッキとか言うんだろ？　おいおい、対象年齢間違えてるぜ」

「……平和を乱す者は、このわたくしが……」

男たちの声が聞こえているのか、女の頬がヒクヒクと動く。

「うわっ、あれは絶対方向性を間違えてるよな。なんだか見ているだけで……痛たたた」
「私って可愛い系だしぃ、やっぱソレ系の服の方がぁ、似合うみたいなぁ、とか？　てめえの家に鏡はねえのかってな。うはは」
「わたくしだって、好きでこんな恥ずかしい格好してるんじゃありませんわっ！」
ついに耐えきれなくなったのか、女は涙目で抗議の声を上げた。
「あらら、逆ギレかよ。最悪～」
「はあ、年甲斐もなくそんな格好して、娘さんが泣くぞ。おばさん」
「おばっ、そんな子供がいるような年齢に見えましてっ！」
「ああ～、ごめん。もうなんか痛々しくて見てらんないわ、俺」
「見るだけでダメージ受けるよな。あれは災害指定されるべき」
俯（うつむ）いてしまった女を見て、声を上げて笑い出す男たち。
しかし、彼らは迂闊（うかつ）にも女の変化に気付いていなかった。
「……ふ、うふふふふふふふふふ」
女は笑っていた。笑い声は徐々に大きくなっていき、否応なく男たちも気付かされる。
その哄笑（こうしょう）は、世の全てを呪う亡者のような響きを持っていた。
「おお、お嬢さまの復讐心がついにマックスに！」
「え、お婆さん……いつの間に？」

呆然と成り行きを見守っていた少女が、突然の声に振り返る。そこには、いつ間にか老女が立っていた。
「これは失礼を。私、さよと申します。以後お見知りおきを。っと、それよりもここは危のうございます。もう少し離れるとしましょう」
「へ？　えっと、何がなにやら……」
「あれに見えるかなり恥ずかしい格好をした女性。実は『魔法少女』というものでございまして。復讐心がマックスに達した時、その力を発揮するのでございます」
「はぁ、そうなんですか……」
　二人の少女を連れて路の端へと移動したさよは、困惑から抜け出せない様子の少女に説明口調で語り出す。少女からは気の抜けた返答しか返ってこなかった



が、さよに気にした様子はなかった。
「ふふ……もう自棄ですわ。魔法聖女マジカルアベンジャー降臨っ！　わたくしを嘲笑う者たちに凄惨なる死を！」
口上をすっ飛ばして、路の真ん中へと飛び降りたマジカルアベンジャー。その顔を見て、男たちは言葉を失う。見開かれた大きな瞳は、さながら昆虫の複眼。口元は半月のごとき不気味な笑みの形に歪んでいる。
「目的が変わっております、お嬢さま！」
男たちへと駆け寄った復讐者は、さよの突っ込みに反応を見せることなく、そのまま無造作にステッキを振り上げる。
「アベンジ〜ギガント〜ステッキッ！」
掛け声と共に振り下ろしたその先にあったのは男の肩。グシャッと何かが砕ける音が、少女の耳にも届いた。
「アベンジステッキは、アベンジャーの復讐心に比例して、硬度と重量を増すのでございます」
「は？　はぁそうなんですか……」
聞いてもいない説明を丁寧に行うさよ。少女はやっぱりなんと言ってよいかわかず、困惑している。

そんな微笑ましいやりとりの間にも、惨劇は広がっていた。
「く……くけけけけけけけけけけ。お次はどなたがお相手してくださるのかしら」
「ば、化物だー！　逃げろー！」
「くっくっくっ、逃がさなくてよ！」
逃げる男たちの背後から躍りかかるマジカルアベンジャー。ベキッ、ゴキャといった破砕音が聞こえるたびに、悪漢たちは一人、また一人と無残な姿で倒れていく。
「輝いておりますぞ、お嬢さま！」
「ねーや、あのおじさんたち、手とか足が変な方向に向いてるの。すごいね～」
「あは、あははは……気にしちゃ駄目よ、ふな」
気楽な外野が見守る中、復讐者の狩りは続いていく。そう、まさにそれは「狩り」と呼ぶにふさわしい光景であった。
数分後、そこに立っていたのはマジカルアベンジャー一人。
「お疲れ様でございました、お嬢さま。見事、正義は守られましたぞ」
「ええ、そうね……そうなのかしら……」
さよの称賛に、物憂げな表情を返すマジカルアベンジャー。すでに瞳は閉じられ、元の糸目に戻っている。
「あ、あの、助けて頂いて？　ありがとうございました。えっと……何というか……すご

かったです。さすがは都会ですね！」

恐る恐る近づいてきた少女たちも、さよの隣で律儀に頭を下げる。

「いえ、当然のことをしたまでですので」

その愛らしい様子に、アベンジャーの表情も和んでいる。しかし、その幸福な光景も長くは続かなかった。

「失礼ですけど……どこかでお会いしたことがありませんでしたっけ？」

「げっ。ひ、人違いですわ！　それじゃ、わたくしはこれで。さよ、行きますわよ！」

「はい、お嬢さま。それでは失礼致します」

首を傾げながら言った少女の言葉を聞いて、マジカルアベンジャーは逃げるように駆け出した。

「おっきいちゅういい、ばいばーい」

その姿を、少女は首を傾げながら、妹と一緒に見送るのだった。

（幕間一・了）

装甲悪鬼
恋愛講座

そう、あれは忘れもしない十日と三時間三六分ほど前のこと。
その時、僕は政務で疲れた身体を休めるため、城内を散策していたんだ。
新緑香る暖かな日差し。色とりどりに咲く紫陽花(あじさい)の鮮やかさも、僕の心を浮き立たせはしなかった。
散策といっても、一人になんてなれるわけもない。大和を支配する六波羅幕府、その次期大将領(たいしょうりょう)である僕、足利邦氏(あしかがくにうじ)には、常に護衛という名の監視が付き従う。心が休まる時間なんてありはしないんだ。
人に出会えば、皆左右に控え、道を空けるのも当然のこと。不思議になんて思ったこともない。
頭を下げ、彫像のように動かない人の間を僕は歩く。
「あっ」
何に足を取られたのか、気がつくと地面に手をついていた。お供の者たちの慌てた声が聞こえたが、そんなものは羞恥(ちしゅう)を煽るだけだ。顔が熱を持っていくのがわかる。
(うるさい！　黙っててくれよ！　道の端に立つ奴らみたいに！)
もちろん、叫びは心の中だけのもの。これ以上、次期大将領が醜態(しゅうたい)を重ねるわけにはいかない。怒りは地面にでもぶつければいい。
そんなことを思っていると、目の前に差し出された掌(てのひら)が一つ。それは白磁(はくじ)のような美し

い手だった。
「大丈夫でございますか？」
声に導かれるように顔をあげると、見知らぬ女性の微笑みがあった。それは、お供たちが浮かべている上辺だけのものとは違う、心を暖かくするような笑顔。
「お手を」
頭の中が真っ白になっていた僕は、反射的にその手を取ってしまう。
僕の頭は、馬鹿になってしまったのだろうか。周囲では誰かが何か喚（わめ）いているが、よくわからない。
「ご無礼を致しました。では」
周りの目を気にしたのか、彼女は困ったような笑顔でそれだけを言うと、礼をして去っていく。何も言えず、去りゆく背中をただただ見送るしかなかった愚かな僕。
この時から僕は、彼女の笑顔の虜（とりこ）になってしまったんだ。

◆　◆　◆

「殿下……殿下……」
「ん……うん？」

誰かが自分のことを呼んでいる。それを認識した時、少年の意識は空想の世界から現実に引き戻された。

声が聞こえる方向に視線を向けると、そこにはよく知る厳(いか)つい男の顔がそこにあった。

「見るも恥ずかしい恋詩を記されているところ、申し訳ありませぬ」

「うわっ、童心坊(どうしんぼう)！　いつの間に！」

ようやく現実に脳の回転が追いつき、少年は驚きの声を上げた。少年の名は足利邦氏。六波羅幕府の頂点に立つ大将領、足利護氏(もりうじ)の息子である。

ここは六波羅幕府の本拠地、普陀楽山塞(ふだらくさんさい)の彼にあてがわれた一室。常ならば、ここで執務を行っている時間である。

しかし、時期大将領の肩書きを持っているとはいえ、彼の場合は組織の象徴的な意味合いが強く、やらなければならない仕事などほとんどない。ありていに言って、彼は『お飾り』であった

「はっはっは、お取り次ぎを願ったのだが、殿下がその様子では女官長も困ったのであろう。何やら気分が優れぬ様子とのことでしたので、勝手に入らせて頂き申した」

いや、そこは帰るところなんじゃないだろうか、とは思うものの、口に出すのは自重する。もし口を滑らせれば、どんな反撃が待っているか知れたものではないことを、邦氏は知っていた。

この豪快な物言いの男は、名を遊佐（ゆさ）童心と言う。普陀楽山塞のある鎌倉を囲むように存在する四領地の一つ、古河（ふるかわ）を治めている。六波羅幕府の最高幹部である四公方（よんくぼう）の一人だ。

長年、父護氏に仕えてきた古参の配下で、邦氏とも付き合いが長い。

「それにしても、殿下がこのような痛々し……いや失敬。このような情感豊かな詩を嗜んでおられるとは、この童心、感服致しましたぞ！」

「いやこれはその……」

邦氏は、机に広げていたノートを慌てて隠した。童心は、それを見てニヤニヤと笑っている。

「皆まで言われますな。わかっておる、わかっておりまする。見られると自殺願望を誘発するような秘密ノートを所有する。それは、男なら誰しも通る道でござる。殿下のお歳なら、むしろ当然のこと。のう、義清（よしきよ）？」

背後に控えていた少女と見紛（まが）うような愛らしい美少年に、童心が同意を求める。彼の名は義清。童心お気に入りの小姓だ。

「はい、入道（にゅうどう）様。僕なんて、入道様への想いを綴（つづ）った姉さんとの交換日記が、もう百八冊

普陀楽山塞　鎌倉に築かれた六波羅幕府の本拠地。普陀楽城とも。

四公方　鎌倉を守るための要地である四軍管区（堀越、篠川、古河、御弓）の長官。

になりました！」

「そ、そうなんだ」

それもどうなんだろうとは思ったが、とりあえず頷いておく。これは、一癖も二癖もある人物たちが集う六波羅幕府の中心地で、彼が身に付けた処世術であった。

「若人(わこうど)らしい見事に香ばしい恋唄ではござるが、もう少し美しい表現を使った方がよいかと。女性の手の表現など、『白磁のような美しい』ではちと弱い。『艶(なま)めかしい』や『しゃぶりつきたくなるような』といった心の内を匂わせる表現を……」

「そんなこと思ってない！　思ってないよ！」

童心の語る直接的な表現に、邦氏は頬が熱くなるのを感じた。

「もう邦氏様ったら、恥ずかしがらなくってもいいのに～」

「これ義清、そんなことを言うものではない。この年頃の男子たるもの、鬱屈(うっくつ)したドス黒い性欲の渦を心の内で熟成させておるもの。そなたのように堂々と想いを口に出せる者は、むしろ少数派よ」

「ええ～、そうですかね～？　僕、男の娘(こ)だからそういうのちょっとわからないです」

「もちろん、それがしも少数派に属していたのでわからん！　それにしても、男なのに娘とはなかなか味な表現よの」

愉しげに笑う童心と義清。ところどころ邦氏には理解できない（脳が理解を拒む）単語が

飛び交っていたが、これだけはわかった。
（話題を変えなくては。これ以上は、きっと僕の心が壊れてしまう）
羞恥に身を焼きながらも、必死に頭を回転させる邦氏。
「それで童心坊、今日は何用だ？」
「おっとこれは失敬。実は、普陀楽で働く文武官の日頃の労をねぎらうため、能舞台を催そうと思いましてな。殿下にも是非ご足労をと、お誘いに参った次第で」
水を向けると、うっかりしていたといった感じで、童心は額を叩く。一方、邦氏は心の中でガッツポーズをしていた。
「そうか、それはご苦労だった。それで……」
「が、今、それとは別に重要な懸念事項が発覚してしまいましたからな。そんなことはどうでもよろしい」
「……え？」
童心が発した予想外の言葉に、邦氏の笑顔が凍り付く。彼には、話の展開が全く読めていなかった。
「つい先日までおしめをしていた幼子が、色を知る歳になっていたとは……それがしも老いるわけですな。いやはや、感無量というもの」
「うっ、そういうわけじゃ……」

「恥ずかしがる必要はありますまい。男子たるもの、男女の密事に興味を持つのは至極当然。ましてや殿下におかれては、六波羅八百万将兵の頂点に立つお方。女子の十や二十を侍らせる気概を持って、然るべきでござろう」

「そういうものだろうか……」

その堂々とした物言いに心が揺れてしまうのは、若さ故の脆さか柔軟性か。邦氏の中で、そういうものなのだろうかと思う気持ちと、何かが違うと思う気持ちが鬩ぎ合う。

「若さとは可能性。殿下の目の前には、多くの道が枝葉のごとく見えてござろう。正解のみを求め進むのであれば、恐れ惑うことになり申す。しかし、そのような若人を正しく導くのも、年長者の役目！　どうぞ遠慮なく、この童心坊をお頼りくだされ」

ドンと胸を叩く童心の姿に、邦氏は喩えようのない頼もしさを感じていた。はたして、今までにこんなにも親身になって接してくれた人間が、自分にはいただろうか。

「して、懸想しているお相手は、どこの姫君ですかな？」

「…………岡部桜子殿だ」

「ほっほう、弾正殿の娘御でござるか」

勇気を振り絞ってその名を口にすると、童心は感嘆の声を上げる。

岡部桜子は、父護氏の長年の盟友であり、ライバルでもある岡部弾正尹頼綱の娘である。現在、彼女は親元を離れて普陀楽山塞に住居を間借りしている、謂わば居候の身で

あった。
「なるほどなるほど、それならば邦氏殿下のお相手としても不足ありますまい。して、どこまで関係は進んでおられるのですかな？」
確信に近づいて来たことで、テンション増し増しの様子の童心。しかし、問われた邦氏には、質問の意図があまりよくわかっていなかった。
「どこまでって言われても、ちゃんと話したこともないんだけど……」
「なんと！　護氏様の血を継がれるお方ともあろう者が、そのような弱腰とは嘆かわしい！　のう、義清」
「え～、僕は初々（ういうい）しくていいと思いますけどね。そういうのも」
「いやいや、思い立ったが吉日とも言う。目と目が会った瞬間に押し倒すくらいの獣性は、漢（おとこ）なら当然であろう？」
「そんな男の子はちょっと遠慮したいです……あ、入道様が押し倒してくれるというなら、もちろん構いませんけど」
好き勝手言い出した二人に、邦氏は溜息をついた。
「いや、僕はもっと普通に仲良くなりたいんだ……」
「ほほう、普通とな？　殿下、具体的にはどのようになさりたいのですかな？」
「えっと、二人で楽しくお話ししたりとか……手を繋いで散歩したりとか……」

恥ずかしげにそう言った邦氏に対して、童心たちの反応は苛烈だった。
「くぅあ～、なんと軟弱な！　青い！　青すぎて虫酸が走る！」
「夢見るお年頃なんですよ。うん、お幸せな脳味噌をされてらっしゃってうらやましいですよ～」
　言いたい放題だった。これには温厚な少年といえども、むっとせずにはいられない。
「そ、そんな……そこまで言われるようなことじゃないだろ！」
「おっとこれは失敬。そうですな、若人には過ちが付きもの。それをあげつらい、したり顔で語るのは気の毒というものですな。それがしとしたことが失言でござった」
　意外にも素直に頭を下げる童心に、邦氏はというと拍子抜けといった体。明らかに翻弄されている。
「しかし、あれですな。このような場所でただただ悶々とされていても、精神衛生上好ましくないだけで、状況は一向に好転いたしませぬ。まずは行動されるがよろしかろう」
「うーん、そうだな。それじゃ、何か物を贈るというのはどうだろう？」
　やっと出たまともと思える話題に、以前から考えていた案を披露する邦氏。それを聞いた童心も頷いてくれたため、少し嬉しくなってくる。
「なるほどなるほど。物で釣ってモノにしてしまおうというわけですな。韻も踏んでいてなかなかよろしいかと」

「いやそんなわけないだろう！」
「ご案じめされるな。殿下ほどの尊き方なれば、ただ呼びつけて手込めにするくらいが当たり前。それを、贈り物で好感度まで上げておられるのです。その後、縛り上げて押し倒したとて、なんら問題はござらん！」
「いや、問題だらけだろう！　てか、縛り上げるとか僕しないし！」
童心の提案にいちいち突っ込みを入れていく邦氏。しかし、上がりきった童心のテンションを鎮めるには、如何(いか)にも足りない。
「ふむ。どうやら殿下に足りていないのは、策を実行に移す度胸のようですな。胆力を鍛えるには、やはり場数を踏むしかありますまい」
「話を聞いてよ！」
「あいや、わかっておりまする！　邦氏殿下にとって、これは初陣。不安もありましょう。ここで『黙って当たって砕け散れい、この童貞が！』などと突き放しては、この遊佐童心、面目が立ちませぬ」
一転、神妙な面持ちになる童心。それはまるで一つの舞台を見ているようだった。しかし、邦氏には内容に大きな問題があるように思えて仕方がない。
「ならば、こちらの義清を相手とし、経験を積まれなされ。義清、異存はないな？」
「はい。よろしくお願い致します、邦氏様……」

童心に命じられた義清は、顔を赤らめるとしなを作る。それは、その気のない男をもその気にさせる、強力な罠であった。
「異存大アリだよ！　そんな簡単にエ、エッチなことするなんて……それにこの子は男の子だろ！」
「何、穴は違えど閨の作法は心得ておりますゆえ、ご安心くだされ」
「はい、お任せください」
元気に返事をする義清はかなり可愛いかった。が、そんなことを思ってしまった自分に気付き、邦氏の思考はどんどんと煮詰まっていく。
「恐ろしいのは最初だけ。しかし、それを乗り超えれば涅槃が待っておりまする。ここはこの童心めを信じて、獣欲の赴くまま行動なされよ、殿下！」
「う……待って……いや……」
「さあさあさあさあ」
「いやだーーー!!」
そして、詰め寄る童心の姿に、ついに少年の心が折れた。
「あいや、戯れが過ぎたかな。はっはっはっ！」
「あれ？　からかってたんだ……」
走り去る少年の背を見送った童心と義清は、至って暢気なものであった。

◆
◆
◆

城を飛び出した邦氏は一人、人込みの中を歩いていた。
どこをどう走ってきたのかは、すでに記憶にない。しかし、逆にそれがよかったのか、城内ではどこに行くにもついてくるお供の者たちを、撒（ま）くことはできたようだ。
ここには、自分を知るものは誰もいない。望んでも得られないと思っていた一人の時間――自由がある。
しかし、浮き立つような高揚感は最初だけだった。
「どこだろう、ここ……」
知るもののいない未知の場所に放り込まれた不安に、邦氏は声の震えを抑えることができなかった。
「うぅ……」
地面を見つめながら歩く少年を、道行く人たちが邪魔そうに避けていく。
永劫（えいごう）に続くかと思えた孤独の時間。しかし、それは思いのほか長くは続かなかった。
「どうかしたのかな、少年」
それは見知らぬ男だった。がっしりとした体躯（たいく）をしているがその表情は優しげで、静か

に自分を見つめている。
「えっと貴方は？」
「おっとこれは申し遅れた。俺は鈴川令法。教師をやっている」
「教師……」
「そうだ。職業柄、子供の心情には敏感でな。不安げな表情をしている君を見つけたから、思わず声をかけてしまったというわけさ」
そう言って、邦氏を安心させるように笑顔を浮かべる鈴川。この人物も、すれ違う周りの人間たち同様、自分のことを知らないようだった。
見ず知らずの自分に声をかけてくれたのは、純粋な善意からなのだろう。それに思い至った邦氏は、胸に暖かなものが広がるのを感じた。
「そっか。心配をかけてごめんなさい」
普段使っている尊大な喋り方とは違う、年相応の喋り方が自然にできていたことに邦氏は驚く。それは、親しい人間の前でのみ出てくるものだった。
「何か悩みでもあるのかい？　よければ相談に乗るが……ええっと」
「……時王丸と呼んでください」
本名を名乗ってしまえば、否応なく素性がしれてしまうだろう。それを惜しいと感じた邦氏は、咄嗟に自身の幼名を名乗り、男との会話を続けることを選択する。

「そうか、好きな人への想いの伝え方……か、はは」
「な、何がおかしいの⁉」
鈴川の笑いを馬鹿にされたと受け取った邦氏は、真っ赤になって俯いてしまう。
それを見た鈴川は、自分の失敗を悟り、軽く頭を下げながら言葉を続けた。
「ああ、すまない。自分にも覚えのあることだったのでな。真剣な悩みを笑ってしまって悪かった」
「貴方にも経験が？」
その言葉に驚き、顔を覗き込む邦氏。対する鈴川は、予想以上に良い反応が返ってきたことで、少しこそばゆそうに身もだえしている。
「そうだ。初めて女性に好意を持ったはいいが、想いを持て余してな。どうすれば、自分の想いを正確に伝えることができるのか、などと夜も眠れぬ日々を送ったものさ」
そう言って、男は過ぎ去りし過去に想いを馳せる。
「若かった……そう、本当に若かったんだな。単純で簡単な方法にも思い至らなかったんだから……」
男の表情には、一言では言い表せない様々な感情が交じり合っている。しかし邦氏には、それが何を表しているのかをうまく理解できなかった。
「うまくいかなかったの？」

「うん？　どうだろうな。うまくはできなかったかもしれない……」
「そうなんだ……」
鈴川の言葉にあからさまに落胆する邦氏。それを見た鈴川は、いたずらっぽく笑いながら言葉を続ける。
「でもその女性は今、自分の妻をやっている。娘までいるんだ」
少年が目を見開き、ついで笑顔になったのを見て、鈴川は満足そうだった。
「結局、必要だったのは、一歩を踏み出す勇気だったのかもしれないな。そして、同時に持たなくてはならないのは覚悟だ」
覚悟。その言葉を発した時、男の発する空気が熱を帯びたものに変わる。
「何があっても、どんなものからも守るという、な。それがたとえ相手を壊すことになってしまったとしても……」
「……え？」
邦氏には理解できない言葉だった。愛するものを守る覚悟を持ち、また愛するものを壊す覚悟をも持つ。二つは相反するものではないのか。
「今になってわかったことがある。世の中は美しいもので溢れている。だが、それは脆く儚(はかな)い。簡単に手折られてしまう。強き者が護ってやらねばならないのだ」
怖くなって顔を背ける邦氏。だが、鈴川は顎(あご)を掴んで引き寄せ、それを許さない。

「君も美しいまっすぐな瞳をしているな……ならば、わかるだろう？」
「そ、そうですね……？」
「そうかわかるか。安心しなさい。ならばやはり、君も俺が護ってやらなくてはならない存在だということだな。死ぬまで面倒を見てあげるから……」
「ひぃ！」
　ついに耐えきれなくなった邦氏は、鈴川を突き飛ばして逃げ出した。

◆　◆　◆

　どれくらい走っただろうか。息の苦しさに耐えきれなくなった邦氏は、その場で立ち止まり、背後を振り返った。
　鈴川と名乗った男は、どうやら追ってきてはいないようで、ひとまず胸を撫で下ろす。
「いったい何だったんだろう、あの人……あ、すまない」
　道行く人とぶつかってしまい、反射的に謝罪の言葉が出る。しかし、それに対する応答は、彼には過剰に思えるほど強烈なものだった。
「糞餓鬼（くそがき）が、気を付けろ！」
　一喝されて身が竦む。父以外に怒鳴りつけられるなど、もちろん初めてのこと。一瞬に

して頭の中が漂白されてしまう。

「何を子供に凄んでおるのだ、右京。可哀想に、怯えておるではないか」

「ふん。この程度のことで怖じ気づくとは、根性のない」

蔑むような視線を向けられ、恐ろしさと悔しさで涙が溢れそうになる。

「すまなかったな、少年。この男は口が悪くてな、いつもこんな調子よ。特別、悪気があったわけではないのだ」

隣にいた褐色の肌の男性が、腰を屈めて話しかけてくる。

褐色の肌は、蝦夷という鍛冶に長けた種族の証だ。この人もそうなのだろうか、などと邦氏はぼんやり考えていた。

「相も変わらず出しゃばりだな、弥源太よ。このような餓鬼の機嫌を取ったところで、何の得にもならんぞ」

右京と呼ばれた男は、不機嫌そうに言い捨てる。

「お主こそ、その短絡ぶりは一向に治らぬと見える。このような子供に難癖をつけても、六波羅大尉長坂右京の格を貶めるだけであろう」

弥源太と呼ばれた蝦夷の男は、邦氏を庇うように長坂の正面に立ちはだかった。

「いちいち癪に障るわ、忌々しい。そもそもなぜ俺が、貴様と並んで歩かねばならぬのだ」

「観光ついでに顔を見に来た旧知の人間に、その言い草はなかろう」

長坂の酷い言い様に、弥源太は溜息をついている。しかし、その様子すら気に入らないのか、長坂の言葉は止まらない。

「そのようなこと、誰も頼んでおらんわ。お仕着せがましいにもほどがある。さっさと山に帰って一媛（いちひめ）のいた昔を懐かしんでおれ」

「まあ一媛との思い出は、うてにとって大事なものではあるがな。妄執を振り払えぬのはなれの方ではないか」

　やれやれといった感じで肩を竦める弥源太。しかし、長坂はその反応に怒るでもなく、不気味な笑みをこぼす。

「くくく、俺は貴様などとは違う。一媛はすでに去り、この手には入らぬ。だが、俺は新たな女神を見出した……俺は、一媛の残したあの一条という娘を手に入れる！　若かりし日の一媛と瓜二つの！　ピッチピチの！」

　往来で突然叫び出す長坂。道行く人々は関わり合いにならないようにと、顔を背けて早足に通り過ぎていく。

「いい歳をして……馬鹿なことを言うでないわ、通報ものぞ」

　こめかみを押さえながら、声を絞り出す弥源太。しかし、そんな蝦夷の男とは反対に、長坂の勢いは留まるところを知らない。

「くくく、愚か者が！　歳の差など些細（ささい）なもの。魅了しようとは思わん。地位、金、己の

すべてを捧げてでもこの手に掴んでみせる！」
　そこに何を見ていたのか。長坂は顔の前で握りしめた拳を睨み付ける。そして今度は、邦氏へ向かって拳を突き出した。
「いいか小僧。もし貴様に愛する女がいるのなら、何を犠牲にしてでも手に入れろ！　誰かのものなら奪い取れ！　さもなくば後悔に溺れ、老い朽ちていくことになるのだ！」
「いたいけな少年を、非道の道に引きずり込まんとするかのような物言いをしおって……このままなれを野放しにしては嬢——一条殿にも迷惑がかかろう。これを止めるは、うての役目であろうな！」
「はっはっはっ、これは傑作だな！　勝負から逃げ回っておった男が、大言を放ちおる。よかろう、長年に渡る貴様との因縁、ここで綺麗に断ち切ってくれるわ！」
　目の前で殴り合いを始める男たちを、邦氏は呆然と眺めることしかできない。
　そこに彼を呼ぶ声があった。
「もし、そこのお方。お困りのようですわね」
　我にかえり振り返ると、そこに居たのは一人の女性だった。大きな弦楽器を抱えたその女性は、優しげな笑みを浮かべながら自分に向かって手招きをしている。少し考えた後、邦氏は恐る恐るといった体で近づいていった。
「貴女は？」

「わたくし、占いを生業としておりまして。悩める少年少女を大好物としておりますの」
女性は、さながら西洋の貴婦人であるかのように優雅なお辞儀で少年を迎えた。
「このように大きな楽器を持ち歩き、怪しげな女とお思いでございましょうが、そこはそれ。どうぞ占い師という設定でお願い致します。それはそうとお嬢さま、恐れながらそのような自己紹介では、危ない趣向を持った変質者でございます」
女性の従者だろうか。脇に控えた老女が、絶妙のタイミングで主人の挨拶に続く。
「あら、言い方が悪かったかしら。悩みを抱えている方を導いて差し上げたいと、そう思っているのだけど」
「はい、その表現でしたら公的機関に身柄を拘束されることもないかと」
優雅なたたずまいの美女と、老齢ながらきっちりとした従者。見とれるほど絵になる組み合わせだったが、二人が行う不穏な内容の会話に、少年の脳は理解が追いつかない。
「えっと何が何やら……」
困ったように笑みを浮かべていると、女性にクスクスと笑われてしまい、顔の温度が上がるのを感じる。
「そうですわね。では、名刺代わりにお悩みを当てて差し上げましょう。……あなたの悩みは、ずばり恋の悩みですわねっ！」
「おお、なんとも芳しくも甘酸っぱい響き。このさよめも、テンションが上がって参りま

したぞ、お嬢さま！」
「いえ……まあ……なんか結構どうでもよくなってきてるんですけど……そうなのかな」
それは、今日一日だけで割といろいろな人に言われてきた言葉だった。
彼女は本当に神通力を持っているのか、はたまた自分は心の内が相当顔に出る質なのか。精神的な疲れが溜まっている少年にとっては、もはやどちらでもよかった。
「ご遠慮なさらないで。お代は見てのお帰りで結構ですから」
「ささ、どうぞこちらへ。ずずいと」
二人に勧められるままに移動していた邦氏だったが、突然、女性の端正な顔に覗き込まれ、心臓が跳ね上がる。
「ふふふ……見えました。お相手はお淑やかで礼儀正しい、深窓の令嬢のようですね」
「え……なんでわかるの？」
「見えたものですから」
女性の答えは、理性的なものではなかった。
「憚りながら、占いとはそういうものでございます」
邦氏の驚く顔を見て、占い師の女性は得意気だ。従者の突っ込みを聞いた時は少し不満そうだったが、すぐに表情を改める。
「……相手も憎からず思っているようです。積極的に仕掛けるが吉と出ましたわよ！」

「おお、なんとそれは重畳でございますな、お嬢さま！」
「……でも、裏切りは決して許されませんので、ご注意くださいまし。もしそのようなことをなされたなら……凄惨な最後を遂げることになるやも……いえ、なったとしても文句は言わせませんっ、このわたくしが！」
にわかにテンションが上がる占い師。一方、なぜか危険な香りのする宣告を受けた少年は、逆に顔を青ざめさせている。
「ましてや、粗野で鉄臭い鎧女やちんちくりんで貧相な若いだけが取り柄の女学生などに目移りするなど、もってのほか！」
やっぱり邦氏には、この自称占い師が何を言っているかよくわからなかった。
「お嬢さま。お嬢さま。多分に私情が漏れ出しておりますよ」
「あら、わたくしとしたことが失礼を」
我に返った占い師が、少しお茶目に表情を緩ませる。
その時、邦氏の前に新たな闖入者が現れた。
「おい、ちんちくりんで貧相な女ってのは誰のことだ？　でか女」
長いリボンをなびかせながら声を荒げているのは、肩で髪を切りそろえた学生服の少女だった。
「あら、これはこれはご機嫌麗しゅう。一条綾弥さん」

「綾弥一条だっ！　毎度毎度、わざとらしく間違えやがって……それとも、ほんとに忘れてる鶏頭か、おまえは」
「あらあら、これは失礼致しました。でもあなたに頭のことをどうこう言われたくはありませんわね。わたくし『ちんちくりんで貧相な女』ではなく、『ちんちくりんで貧相な若いだけが取り柄のおつむの残念な女』って言いましたのよ？」
「修飾語増えてるじゃねえか！」
声を荒げて詰め寄る少女。なぜこんなにいがみ合っているのかはわからないが、どうやら二人は知人同士らしい。
「そもそも、おまえが占い師だ？　片腹痛いぜ」
鼻で笑う女の子に対して、占い師は挑発的な言葉を投げかける。
「それでは、あなたにこの方の悩みを聞いて差し上げられまして？」
「む、いいぜ。好きな人にどうやって接すればいいかってことだろ？」
邦氏を睨み付けた女の子は、照れたように頬を掻くと、一つ咳払いをする。
「や、やっぱ男は誠実じゃなきゃダメだな、うん。浮ついた心持ちで相手を不安にさせるようなことがあったらダメ。あたしがぶっ飛ばす」
「ぶっ飛ばす……ですか」
なぜ彼女に殴られなくてはならないのかは疑問だったが、彼女の話はまだ話が続きそう

だったので、深く考えないことにする。
「まあ、多少強引なくらいにアプローチしてもいいかもだけど……間違っても、こんな惚れた男を射貫きそうな女に引っかかるんじゃないぞ」
「正義馬鹿に言われたくはないですわねー」
「なんだと！」
睨み合いを始める二人。やはり邦氏は、どうしていいかわからず呆然とするしかない。
「危険ですから、もう少し下がられた方がよろしいかと存じます」
「あ、ありがとう」
「いえいえ、お気になさらずに。それよりあちらに見えますのは、あなた様のお迎えの方ではありませんかな？」
従者のお婆さんが示した方向には、停車しようとしている一台の車が見える。その窓から顔を出している人物は、邦氏がよく知る人物だった。
「おーい、時王。迎えにきたぞー」
姉と慕う女性をそこに認め、邦氏は唖然とする。
「茶々姉さま。なぜ……」
彼女の名は、足利茶々丸。邦氏の従姉にして姉と慕う女性である。童心と同じく四公方の一人でもあり、邦氏が知る限り、気軽に外出できるような身分ではないはずだった。

「童心から経緯は聞いた。そろそろ気晴らしもいいだろ。ほれ、帰るぞ」
「……はい」
素直に頷きを返して、車に乗り込む邦氏。しかし、その背後では、また別の騒動が起きようとしていた。
「景明さま！」
「湊斗さん！」
今にも戦いが始まりそうだった占い師と学生服の女の子が、茶々丸の後ろで控える男を見て同時に声を上げる。
「姉さま、この者は？」
「ああ、お兄さんは臨時で働いてもらってるあての部下。そんであてのいい人だ」
わずかに頬を染めながら、そんなことを言う茶々丸。その顔は、付き合いの長い邦氏であっても初めて見るものだった。
「お初にお目にかかります、殿下。私は湊斗景明と申します。縁あって堀越(ほりごえ)公方閣下の元で働かせて頂いておりますが、閣下が仰るような関係ではありませんので、あしからず」
「ちぇ、お兄さんのいけずー」
丁寧な挨拶と共に、姉との仲をしっかりと否定する湊斗という男。それを聞いた茶々丸は拗(す)ねたように口を尖らせている。

「それから、こちらは私の相棒を務めております村正です」
「どうも、景明の『妻』の村正です」
景明の隣にいた蝦夷の女性が頭を下げる。そこへ、邦氏の背後から怒鳴り声が届く。
「この鉄クズ、どさくさ紛れに何を言ってやがりますの！」
「くそっ、そこは本来あたしのポジションのはずだろ！」
外野からの声を気にした様子もなく、村正は余裕の笑みを見せていた。
「恐れながら殿下。訂正させて頂ければ、村正は妻ではありません。それと一条、おまえはわけのわからないことを言うんじゃない」
首を傾げる邦氏に気付いた景明が、彼に説明しつつ、女性陣をたしなめる。
「ま、自己紹介も済んだことだし、立ち話もなんだ。そろそろ行こうか」
なおも騒いでいた占い師たちを無視して、邦氏たちは車に乗り込んだ。

◆　◆　◆

四人を乗せて車は走り出す。邦氏は声もなく、流れていく窓の外の景色を眺めていた。
何の前触れもなく訪れた自由なる一日。いろいろと怖い思いもしたが、普段なら絶対に体験できないような経験をすることができたように思う。

今日のような日は、この先訪れない。そう思うからこそ今、自分が抱えている問題に決着をつけておきたかった。
「茶々姉さま……僕はどうしたらいいんでしょう」
何の前触れもなく、曖昧な言葉で質問する邦氏。しかし、聡明な彼女ならそれだけでもわかってくれるんじゃないかという予感があった。
「おまえはどうしたいんだ」
茶々丸は、彼の心を確かめるかのように静かに問い返す。
「仲良くなりたいって気持ちはある。けど、もし拒まれたらと思うと怖いんです」
「まあ、こればっかりは自分で答えを見つけなきゃいけないことだしなぁ」
突き放すような返答。そこには、彼のほしかった明確な答えは見あたらない。
「やはり、身を退いた方がいいんでしょうか……迷惑がかかるだろうし」
弱気の虫が顔を出す。好きな相手に迷惑をかけるくらいなら、と自分に言い訳をして。
邦氏は怖かった。自分が理解できない未知の領域に踏み出し、失敗してしまうことが。
「恐れながら、殿下」
景明がそう言葉を発したのは、そんな時だった。
「誠実であるべきというお考えはご立派。嫌われるかもという懸念も当然至極でございましょう。しかし、その好意、好きというお気持ちこそを大事にするべきかと存じます。殿

下のお心のままに接すれば、想いはきっと伝わるはずです」
邦氏は、景明の落ち着いた声音が、苦しむ心に染み込むよう浸透していくのを感じた。
「うんうん。さすがお兄さん、いいことを言うなぁ」
茶々丸はというと、景明が会話に参加してきたのが単純に嬉しかったようで、愉しそうに頷いている。
それがなんだか悔しくて、邦氏は思わず反論の言葉を探していた。
「でも、想いを伝えたからってうまくいくとは限らないじゃないか」
「想いを伝える決心をすることに、うまくいくかどうかを考慮する必要はないはずです。勝敗は後からついてくるもの。行動を起こす際に考慮すべきは、それが必要か否か、その一点なのですから」
「つまり、当たって砕けてみろってことだな。時王は若いんだし、それでいいんじゃないかな」
茶々丸が景明の言葉をまとめてみる。しかし景明は静かに首を振った。
「いいえ、砕けては意味がない。勝負に出たなら勝たなければ意味がないのです。そうですね……有効なのは、やはり力関係をはっきりと相手にわからせてやることでしょう」
「「「え？」」」
突如、話の内容が物騒になってきて、面食らう一同。景明はなおも話を続ける。

「女性とは支配されることを望みます。組み伏せ、自由を奪い、どちらが主でどちらが従かを示してやれば、その後の関係も必ずや良好なものになるでしょう」
「ちょっとちょっと御堂！　何言っちゃってんの」
慌てて止めに入る村正。しかし、景明は悪びれた様子もない。
「いや、恋愛に対する心得を説いたのだが」
「貴方の持論は、一般性に欠けすぎてるわ」
彼の暴論とも言える持論に、村正は難色を示している。隣を見れば、茶々丸も困ったような笑みを浮かべていた。
「茶々丸、あんたも何か言わないでいいの？　こんな特殊な考えに染まったら、この子、道を踏み外すわよ」
「え？　うーん、いや～でも……概(おおむ)ね合ってるかな～なんて」
「は？」
「あては、ぐいぐい引っ張ってくれるっていうか……道具扱いしてくれるくらいの方が心地いいし……やっぱお兄さんとあてって、相性いいよね。うん」
邦氏のことなどそっちのけで、どんどん話を脱線させていく外野陣。
しかしこの時、人生初の難題に思い悩む邦氏の頭の中で、ある結論が実を結ぼうとしていたことを、彼女たちは知るよしもなかった。

◆　◆　◆

邦氏は、桜子が住んでいる京極屋敷への道を一人歩いていた。
その表情に思い悩む様子は既になく、雨後に晴れ渡った青空のように澄み切っている。
彼の頭の中では今、今日出会った人々の言葉が思い返されていた。
『今になってわかったことがある。世の中は美しいもので溢れている。だが、それは脆く儚い。簡単に手折られてしまう。強き者が護ってやらねばならないのだ』
鈴川という教師は邦氏に問うていたのだ。愛する者を絶対に守るという気概を。
『いいか小僧。もし貴様に愛する女がいるのなら、何を犠牲にしてでも手に入れろ！　誰かのものなら奪い取れ！　さもなくば後悔に溺れ、老い朽ちていくことになるのだ！』
長坂という六波羅士官は、悩む少年に伝えたかったのだろう。愛する者へ抱く純粋な想いの強さを。
『や、やっぱ男は誠実じゃなきゃダメだな、うん。浮ついた心持ちで相手を不安にさせるようなことがあったらダメ。あたしがぶっ飛ばす』
『……相手も憎からず思っているようです。積極的に仕掛けるが吉と出ましたわよ！』
桜子に対して誠実で居続けろ、行動を起こせと背中を押してくれた、学生服の少女と占

い師。あれは恋する少年へのエールだったのだ。

『女性とは支配されることを望みます。組み伏せ、自由を奪い、どちらが主でどちらが従かを示してやれば、その後の関係も必ずや良好なものになるでしょう』

そして、湊斗景明という不思議な雰囲気を持つ男の言葉。

闇の中、光が差したようだった。あの男の言っていた事は、童心が執拗に主張していたことにも通じるものがある。さすがは遊佐童心。その言葉に偽りはなく、あれは自分の事を思っての忠言だったのだ。

そんなことを考えているうちに、とうとう目的地へと辿り着く。依然として緊張は拭えなかったが、彼の中に迷いはない。

屋敷の使用人に来意を告げる。しばらくして出てきた、戸惑い顔の愛しい人。

「これは邦氏様。このような時間にお出で頂かなくとも、お呼び立ていただければ……」

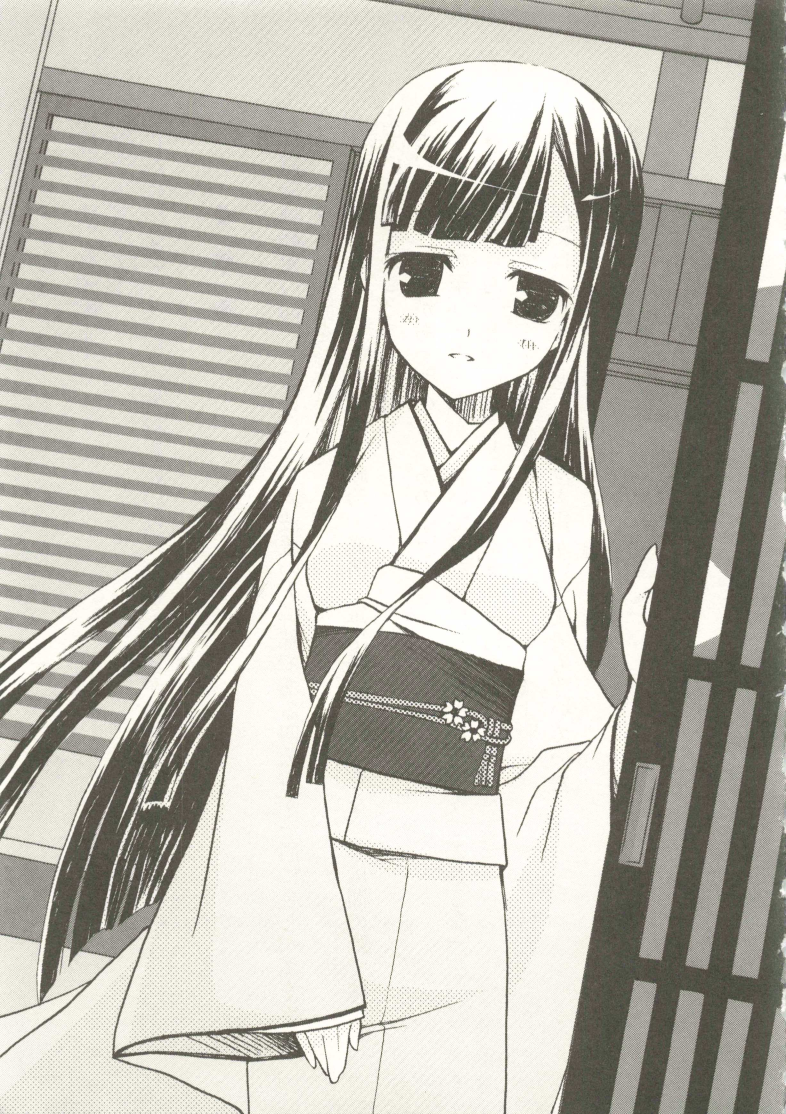
ここまできてなおも震えの収まらない自分の小心を叱咤し、邦氏は桜子に告げる。

「あの、大事な……大事な話があるのだ」

邦氏の言葉に少しだけ考えるような仕草を見せる桜子。しかし、それも一瞬だった。彼女は、少年の真剣な表情にいったい何を感じ取ったのか。

「わかりました。こんなところではなんですので、どうぞお上がりください」

戸が閉まり、二人の姿が屋敷の中に消える。そして……。



「好きです、桜子殿ーーーーー！」
「キャアアアア！」
夜空にパシンッという、気持ちいいほどの乾いた音が響き渡った。

◆　◆　◆

普陀楽城評定の間。ここには今、六波羅の大幹部である四公方が一同に会し、顔を寄せ合ってヒソヒソと話をしている。
話題の中心となっているのは、政治・経済・軍事のいずれでもない。広間の隅で膝を抱えている少年のことであった。
「で、いったい何があったのよ。あの子」
「いや、若気の至りと申そうか。急いて事を仕損じてしまったようでござるな」
「意味がわからん。どういうことだ？　茶々丸は何か知っているか？」
「まあ、何というか……しばらくそっとしといてやってよ」
評定の間には、少年の悲しげな泣き声がいつまでも響いていた。

（第二話・了）

魔法聖女マジカルアベンジャー 第二話 激突！ 正義の味方

鎌倉市街にある駅にほど近い通りは、今日も人の往来が盛んだ。

世の中は平和で、人々の気もやや弛(ゆる)みがち。道端で偶然出会った顔見知りが、世間話に華を咲かせていたりもする。

「どうも旦那。本日はお日柄も良く」

「やあやあ、店主。商売繁盛のようで結構なことですな」

「へい、お陰様で。戦争が終わって早数年、景気も安定してきているようで、あたしら末端の商人にゃ、ありがたいこってす。まあ、それでも不運ってーのは、どこにでも転がってるもんですがね」

「ああ、この前も怪しげな格好をした、女の通り魔が出没したらしいね」

「ええ、ここらへんは、戦場もかくやってほどひどいありさまでしたよ。半殺しにさ

れた野木山組の若衆がごろごろと」
「最近暖かくなってきたからなぁ」
「ですな。旦那もお気を付けくだせえ。もっとも、気を付けてどうにかなるもんでもありやせんが」
二人は笑いあうと、会釈をしてそれぞれの目的地へと歩き去った。
「聞かれましたかお嬢さま。街はお嬢さまの話題で持ちきりですぞ」
男たちの会話を盗み聞き、勢い込んで言うさよ。しかし、敬愛する彼女の主人から返ってきた反応は、非常に湿っぽいものであった。
「しくしくしくしく……」
香奈枝は、愛用のコントラバス『バロウズ』を抱きながら、泣き続けている。幼子のように泣き続ける香奈枝に、さよは困ったように溜息をついた。
「どうなさいました、お嬢さま。そのような泣き真似で同情を誘うがごときあざとい作戦、お嬢さまのキャラクターでは些か難しゅうございますぞ？」
「泣き真似じゃありません、本当に泣いているんですわっ！　ていうか、キャラクターに合わないとか、どういうことなのっ⁉」
キッと擬音が見えるようなキレの良さで顔を上げ、さよを睨み付ける香奈枝。しかし、

主人の呪詛たっぷりの視線を受けても、従者は怯む様子がない。
「これは失礼致しました。お嬢さまの凛とした雰囲気にはそぐわない、とそう申し上げたかったのでございます」
「そう……そうよね。わたくしったら、少々悪意に対して過敏になっているみたい」
大袈裟に申し訳なさそうな態度を作って謝罪するさよに、香奈枝はようやく我に返ったようだった。
「ええ、無理もないことでございましょう。衆目の面前であのようなアレな格好を、恥ずかしげもなく晒されたのですから。警察機関が真っ当であった一昔前なら、逮捕ものでございます」
「そんなひどかった？　ねえ、罪になるほどひどかったんですの？　というか、あなたが無理やり着せたんですのよね？」
「いえいえ、あれはお嬢さまの悪を憎む御心がお求めになったのでございます。そのように私めの手柄のような言い方をされては、さよは手柄を盗む不義に手を染めたと、後ろ指を指されることとなりましょう」
「いや、やめてっ！　わたくしが自分の意志で着たみたいな事実の捏造は！」
耳を塞ぎ、頭を振り、全身で従者の言葉を否定する香奈枝。彼女はすでに、何が真実かを見失いそうになるほど、精神的に追い詰められていた。

「くっ、何故わたくしがこのような目に……いったいわたくしは、この怒りを誰にぶつければいいんですの?」

頭を抱え身をよじる香奈枝。そんな彼女の近くをGHQのジープが通りかかる。

現在、GHQは六波羅と比較的友好的な関係を築いている。非武装であれば、街中で見かけることも少なくはなかった。

だが、どんなことにでも、不満を持つ人間というのはいるらしい。通行人の中には、露骨に顔をしかめる者もいた。

「人様の国を我が物顔で歩きやがって」

「六波羅は何をやってるんだ。平和になったんだからさっさと追い出せってんだよ」

負の感情を伴った囁きを聞いて、さよは肩を竦めた。

「地元感情の軟化には、まだまだ時間がかかりそうですな……おや、お嬢さま?」

「それは……許せません……許せません……」

「いけません、お嬢さま。蓄積されたストレスと他者の嘆きが化学反応を起こし、マジカル的なアレが反応しておりますぞ」

さよが主人から発する不穏な気配に気付いた時には、すでに手遅れだった。

「許せませんわーー!」

人々の嘆きに、香奈枝の中にあった復讐の炎は、油をかけられたかのように燃え上がっ

たのだった。
「そこまでです！」
往来に、聖女の声が朗々と響く。道行く人々は、何気なく声の主へと視線を転じ、それが何かを理解するとすぐに視線をそらした。
「オー、ナンデスカ？」
話しかけられたことに気付いたＧＨＱ兵士が、笑顔を浮かべて向き直る。が、次の瞬間には、その表情は好意から困惑へと成分を変化させていた。
「大和の民を虐げし侵略者。あなたたちの悪行三昧、このわたくしの復讐心にキュンッと来ましたわ。この思い、もはや我慢する気はありません！」
「ノー！　ワタシタチ、ヤマトノヒトタチト、トモダチニナリタイ、デス。ケンカ、シテナイデスネ」
「そのような戯(ざ)れ言、聞く耳もちません！　弱き民に代わり、この復讐の聖女マジカルアベンジャーが成敗して差し上げます！　とぅ！」
「グオッ！」
駆ける勢いそのままに放ったマジカルアベンジャーの跳び蹴りが、兵士の胸に炸裂。慣性の法則に従って後ろに吹き飛ぶと、兵士は仰向(あおむ)けに倒れた。

「ナ、ナニヲ、スルデスカ！」
苦しげな様子で抗議の声を上げるＧＨＱ兵。しかし、彼はすぐに自分の愚かさを悟ることになる。危険は、すでに彼のすぐ側までやってきていたのだ。
「クルナッ、クルナッ、アアアアアッ‼」
兵士の意思を無視して、マジカルアベンジャーは彼の上へと跨った。そして。
「アベンジャ～ナックル～ビート！」
ステッキを持ったまま、兵士の顔面へと拳を振り下ろす。
「グアッ、ギャッ、ノォッ、ストッ」
「さすがお嬢さま。ステッキに蓄えた復讐心を拳に宿らせることで、自らの獣性を引き出し破壊力を向上させる、『アベンジャーナックルビート』をすでに使いこなしていらっしゃるとは」
誰にともなく、感嘆の声を上げるさよ。彼女の前で、悲劇はさらに続いている。
「ストップ！　ストップ！　ヤメロ！　ウツゾ！」
呆然と同僚への攻撃を見ていた別の兵士が、我に返って拳銃を構える。その声に動きを止めると、復讐者はゆらりと立ち上がった。
「遅うございますよ。警告などしていては……」
さよの言葉が終わる前に、マジカルアベンジャーはその兵士に飛びかかっていた。

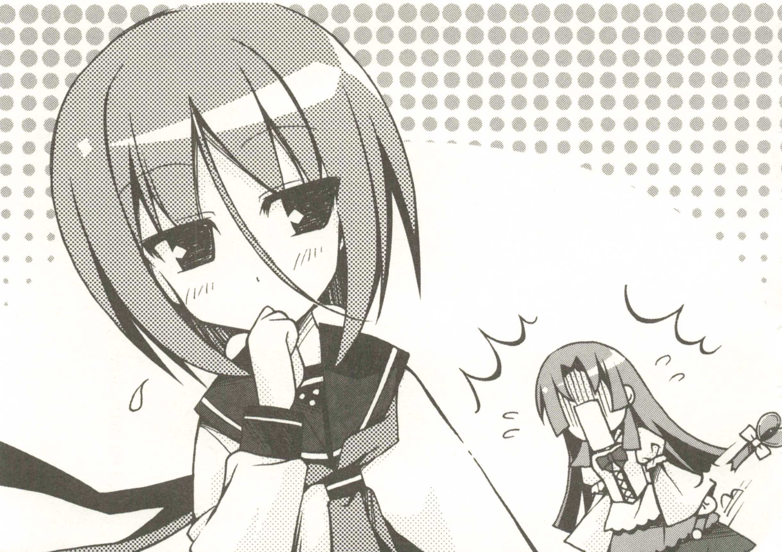
銃を撃つこともできず引き倒され、マウントの体勢に持ち込まれた兵士は、相手の顔を見て短い悲鳴をあげる。その目は奇怪な複眼。口元は笑顔の形に歪められていた。
「シャッ、ナックゥビートッ、ナックゥビートッ」
掛け声と共に拳を振り下ろすマジカルアベンジャー。断続的な悲鳴を上げていた兵士だったが、やがてその声も聞こえなくなっていく。
「ちょっと通してくれ……と、うわっ、なんだこりゃ」
人垣を抜け、姿を現した少女が驚きの声を上げた。
「おや、これは綾弥一条様、ご機嫌麗しゅうございます」
近くに現れた知人に、普段と変わらぬ挨拶を送るさよ。その声を聞いて、一条は近くに寄っていく。
「あんたは、大鳥香奈枝のとこの婆さんか、いったい何の騒ぎなんだ？」
「はあ。見てのとおり、正義の味方の大立ち回り、でございますな」
さよの言葉を質の悪い冗談と取ったのか、一条は顔をしかめる。
「あたしには、一方的な暴力にしか見えないんだが……何なんだ、あのひらひらした服着たガタイのいい女……女だよな？」
首を傾げる一条に、さよは愉快そうな笑いを上げる。
「これはお戯れを。一条さまには、あれが男性にお見えになるので？」

「いや女にしては体格いいし、あの鬼気迫る気は……なぁ」
「まあ、確かに女性的な淑やかさとは無縁でございますな」
一条の視線の先では、長い髪を振り乱しながら、マジカルアベンジャーが兵士を殴り続けている。
あれを前にしては、忠実なる従者を自認するさよも、主人を完璧に擁護することはできなかった。
「とにかく、ありゃやり過ぎだろ。止めてくる」
「マジでございますか。あれを見てそのお言葉が出るとは、さすがは一条さま。なんともまあ、勇気があるというか無謀というか」
感心するさよの視線を受けて、一条は頬を掻く。
「正直なところを言うと、関わり合いにはなりたくないけどな。婆さんは、あんまり近づいてくんなよ。危ないから」
「ご配慮、痛み入ります。一条さまもどうかお気をつけて」
さよの言葉に手を挙げて応えると、一条は兵士を殴り続ける女へと近づいていった。
「おいおまえ、それくらいにしとけ……よっ！」
言葉もそこそこに、死角から回し蹴りを放つ一条。しかし、その一撃は何の手応えもなく、女の頭部があった場所を通過する。

「警告も終わらぬうちに不意打ちの回し蹴りとは、さすがは一条さま。そこらにいるジャリとはレベルが違いますな。ですが……」
　自分を攻撃する者の気配を本能的に察したのか、マジカルアベンジャーは転がるようにして兵士の上から離脱していた。
「あなたも、この方たちのお仲間ですの？　せっかちなお方。お待ち頂ければ、ちゃんと始末して差し上げますのに。たっぷりと、念入りに、ふふふ」
　体勢を整えたマジカルアベンジャーの視線が一条を捉える。彼女の目はすでに細められ、異様な複眼はなりを潜めていた。
「おいおい、喧嘩の仕方もしらねーのかよ。そいつら殺す気か、この変態が……って、おまえもしかして、大鳥香奈枝か？」
　その顔を見て驚きの声を上げる一条。一方、名前を呼ばれたマジカルアベンジャー——香奈枝の表情も凍り付いている。
「なっ、一条綾弥！」
「綾弥一条だ！　毎度間違えるんじゃねえ！」
「さすがお嬢さま。どんな状況でも『お約束』というものを蔑ろにしない態度、立派でございます」
　さよの言葉は二人にも届いていたが、はっきり言ってどちらにとってもどうでもよいこ

とだった。
「これは失礼を。で、本日はどういったご用件でしょう?」
「いやご用件って……喧嘩を止めにきたんだけどよ。何なんだよ、その変態的な格好は」
「変態的……あなたは今、世界中に存在するであろう一定の趣向を好む男女を敵に回しましたわよ」
一条の言葉を指さし非難する香奈枝。一条は、途端に後悔の色を顔に浮かべる。
「ああ、悪い。そんなつもりじゃないんだ。謝るよ。趣味趣向は人それぞれだもんな。あんたがどんなに痛々しい服を好んで着ても、あたしには関係ないよ。うん」
優しげな視線を向ける一条に、今度は香奈枝がたじろぐ。
「い、いえ、わたくしも好きで着てるんじゃないんで……」
「いやいや! わかってる、わかってるって! あんたもストレス溜まってるんだよな。羽目を外したいときだってある。けど、もうちょっと場所を考えた方がいいっていうかさ……その、あんたもいい歳だろ? 少しだけ人の目を気にしてさ」
「な、何ですの、その憐(あわ)れむような眼差しっ。ですから、これはわたくしの趣味などではなく……ていうか、そんなに言われるほど、酷い格好なの!?」
「あ、いやがんばってる方だと思うよ、うん。でも心ない人っているからさ。悪く言う人もいると思うんだ。でも、他人に笑われたからって、こんな顔が変わるまで殴るのはやっ

ぱりよくないぜ」
　倒れた兵士を見ながら、一条は悲しげに言った。
　相手のことを労るような優しい言葉。しかし、今の香奈枝にとって、それは心を切り裂く刃にも等しいものだった。
「そんな悟ったようなことを言わないでっ。戦ってる理由も違うからっ」
　心の痛みに耐えきれなくなった香奈枝は、思わず叫ぶ。
　しかし、それに対して返ってきたのは、生暖かい憐憫の眼差し。
「わかってるわかってる。あたしもいろいろむかつくことあるけどがんばるから。お互いがんばろう。な」
「ううう、あんまりです……あんまりですわーー！」



「あっ、おい！」

精神的ダメージがついに限界に達した香奈枝は、一条の制止を振り切り、とうとうその場を逃げ出したのだった。

（幕間二・了）

ダンスインザウォーゲーム

嫌な予感がしていた。

かつて幾度となく経験した流血の気配。やはり自分は、それから逃れられぬ運命なのか。元来生真面目な性格の景明は、そんなことを思わずにはいられなかった。

そもそも、今日は朝からツイていなかった。朝刊に掲載されている復讐先生の占いを見れば運勢最悪。何を思い立ったのか、村正は朝食の支度をすると言い出し、思い留まらせるのに命を賭けた。

家を出れば黒猫の家族に横切られ、職場に向かうまでにお天気雨で濡れ鼠になった時には、今年一年の不幸が一斉にやってきたのだろうかと思ったものだ。

しかし、それは甘すぎる考えであったと思い知る。

(なぜ、こんなことに……)

目の前で繰り広げられる激論を前にして、景明は暗澹たる思いを味わわずにはいられなかった。

◆　◆　◆

二度目の世界大戦の終結後、事実上の敗戦国となった大和国には、ＧＨＱという軍事組織が設置されている。早々に連盟国へ降伏し、戦力のほとんどを温存することに成功して

いた六波羅幕府の監視が目的である。
当初こそ両者は反目し、暗闘を繰り広げていたようだが、六波羅は国内を概ね安定させ、GHQに表だった行動を決起させるほどの『切っ掛け』を与えなかった。
そのため、連盟内ではGHQの存在を疑問視される意見が出てきており、発足当初より立場が大幅に弱体化してきている。
現在、GHQは六波羅とより友好的な関係を築く方向へと方針を移行させており、相互補助の条約を締結。定期的に会合を開き、両者の関係を深めるよう努力している。
もちろん、それは表向きのことであろう。両陣営共に裏ではどのような考えでいるか、一般人には知れたものではないのだが。
今回、件（くだん）の会合に六波羅側の代表として出席したのは、堀越公方足利茶々丸である。景明は、彼女の副官という立場から、この場に居合わせていた。
一方、GHQ側の代表として現れたのは、大和人でありながらGHQに所属する女性。参謀部の指令を受けた大鳥香奈枝大尉その人であった。
「まあ、なんてことでしょう！　このような場所で景明さまとお会いできるなんて。やはりこれは、神がわたくしたちを結びつけようとしているのでしょうか！」
入室早々、景明の姿を認めた香奈枝は、喜びの声を上げた。

「これは大鳥大尉。まさか貴女も会合に出席されるとは思いませんでした」
「ええ、大和国の事情に詳しい者ということで命令を賜りましたの。正直、面倒に思っていたのですけれど……このような幸運があるなら、退屈な任務もたまには引き受けてみるものね。ねえ、ばあや？」
いつも通り彼女の背後に控えていたさよに、香奈枝は満面の笑みで同意を求める。
「まことにその通りでございます、お嬢さま。指令を受けた甲斐があったというものです。先ほどまではとても淑女とは思えないくらいの悪態をついていましたのに」
場の空気というものを気にした様子もなく、さよはいつも通りの調子でそれに応じる。
そんな中、会話に割り込むように新たな声が上がる。
「あー、仮にも六波羅四公方のあてに対して、たかだか大尉をよこすとは、ＧＨＱもなかなかいい度胸をしてるじゃんか」
不機嫌な様子を隠そうともせず、茶々丸は言った。
「あら、わたくしったら思わぬサプライズに浮かれてしまって、大変失礼を致しました。よいしょっと」
だが茶々丸の言葉も、香奈枝に堪えた様子はなかった。
「で、なんであんたは勝手に椅子を動かして、堂々と座ってやがるんだ？」
「あ、お構いなく。ささ、景明さまもこちらにどうぞ」

茶々丸の何かを苦労して我慢するかのような声音の言葉を軽くいなし、香奈枝は景明に隣の席を指し示す。
「いえ、自分には席を与えられておりませんので」
「まあ、でしたら……ちょっと恥ずかしいですけどわたくしの膝をお貸ししますわ。あ、それとも逆がよろしいのかしら？」
「空気を読まぬ怒濤の攻勢。さすがはお嬢さまでございます」
感心した様子で合いの手を入れるさよ。この忠実なる従者は、愛する主の暴走を煽ることはあっても、止める気はないらしい。
「どちらもご遠慮させて頂きます」
そういった問題ではないのだが、という突っ込みを辛うじて飲み込んだ景明は、申し出を丁重に謝辞する。
やましいところは何もなかったが、恨めしそうな茶々丸の視線が痛かった。
「おーいそこのデカ女。さっきから馴れ馴れしい態度でうちの副官に媚び売ってるんじゃねーよ」
景明が断ったのを確認した茶々丸は、香奈枝へと矛先を向ける。
「あらあら、放っておかれて寂しかったのかしら。あなたのお相手はあとでして差しあげますので、邪魔しないでくださいましね」

「あての部下にコナかけんなって言ってるんだけど、脳細胞が桃色に染まっちゃって理解できませんでしたかね、色ボケしたお・ば・さ・ん！」
「おば……部下とはいえ、個人的な交友関係にまで口出しする権利はないでしょう？　堀越中将閣下」
「GHQではそうなのかもしんないが、余所は余所、うちはうち！　副官ってのはあての個人所有物なんだよっ！」
「いえ、そんなものになった覚えはさすがにないのですが」
茶々丸のあんまりな言い草をさすがに放置できず、訂正する景明。それを聞いた香奈枝は、我が意を得たりと語勢を強める。
「ほらご覧なさい。景明さまもこう仰っていますわ。そもそも、警察に所属していたはずの景明さまが、何で六波羅公方の副官なんてやってますの！」
もっともな疑問だが、これには事情があった。
もともと景明の警察内での肩書きは『警察局鎌倉市警察署属員』という非公式なものである。これは警察署長である景明の父菊池明堯が私的に与えた役職であり、正規の署員ではない。給料こそ出ていたものの、それは明堯が用意したものであり、薄給であった。
それでも生活に支障はない額なのだが、近頃、彼の住む住居では様々な物が破壊されており……臨時の出費が重なって困っていたところ、公務で鎌倉に滞在する予定のあった

茶々丸が、自分が鎌倉にいる間アルバイトとして働かないかと声をかけたのである。
もちろん、副官などという高位の職を与えられるとは、彼も予想していなかった。
各所からいろいろと反発も受けたようだが、結局彼女は無茶を強引に押し通し、また景明も及第点を上回る仕事ぶりを示していたので、今ではどうこう言う人間もいなくなっている。
と、一から経緯を説明すると長くなってしまうので、結局景明は端的にまとめ、伝えることにした。
「……生活のため、でしょうか」
「まあ、なんてことでしょう！　さよ、聞きまして？　景明さまの嘆きを！　この方は、いったいどのような卑劣な罠で絡め取られ、奴隷のごとき扱いを甘受させられているのでしょうか！」
「はい、お嬢さま。経済的困窮を盾に取るとは、さよも憤りを覚えずにはおれません」
「いえ、そんな大層なものではなく、アルバイトのようなもので……」
大袈裟な言われようを訂正しようとする景明だったが、彼の話を聞いている者はこの場にいなかった。
「つまり、お兄さんは私の物ってことだ！　わかったか？　わかっただろ？　わかったら、その搦めた腕を今すぐ解け！」

「ああ、なんてことでしょう。愛する二人を国家権力が引き裂こうとするなんて！　しかし、愛とは障害が大きいほど燃え上がるもの……わたくし、引き下がることなんてできませんわ！」
「さすがお嬢さま、蛇のごとき執念深さでございます」
暖簾に腕押しといった香奈枝とさよ。全く屈しないその姿勢は、立派と言うほかない。
「そうか……穏便に済ませてやろうと思ってたが、おまえ、最初から言うことを聞く気がなかったってことなんだな」
「あらあら、人を所有しようなんて悪趣味な小娘には、年長者としてお灸を据えてあげなければいけないと、わたくし思っていますのよ？」
「上等だ！　その喧嘩、買ってやる！　待っててね、お兄さん。この周囲を把握するのに邪魔なうざでかい女を、二度と視界に入らないようにしてあげるからね！」
「お辛いでしょうが、もう少しだけ我慢してくださいましね。この大鳥香奈枝、狡賢い小娘の手から必ずや景明さまを解放して差し上げますから！」
「「勝負だ、このやろう!!」」

◆

◆

◆

「というわけで、諸君、戦争だ！」
茶々丸の元気な声が広間に響き渡る。
ここは普陀楽山塞の評定の間。現在は、四公方が集まっての会議の真っ最中である。
「あんた、いきなり何言ってるの？　理解できないのは、麿(まろ)が愚かだから？」
初めに声を上げたこちらは、小弓(おゆみ)公方今川雷蝶(いまがわらいちょう)。妾腹(しょうふく)の子ながら大将領足利護氏の実の息子で、嫡男(ちゃくなん)の地位こそ弟の邦氏に譲ることとなっているが、数々の武功を立てており、猛将と名高い。
「おお、雷蝶君にしては珍しく分際を弁(わきま)えた発言だな」
「ぬぁんですってー！　皮肉よ、皮肉！　それくらいわかりなさいよ！」
茶々丸の軽口に、律儀に反応する雷蝶。付き合いのいい彼は、いつものように茶々丸にからかわれ、頭に血を昇らせている。
「まあまあ雷蝶殿、落ち着かれよ。茶々丸殿、そう間の事情を端折(はしょ)られて、戦争などと物騒なことを言われては、それがしも同意致しかねますぞ」
そう言って騒ぎ始めた二人を窘めたのは、古河公方遊佐童心である。六波羅古参の将であり、四公方内の最年長者である彼は、とかく頭に血を昇らせやすい雷蝶や茶々丸たちを抑え、会議をまとめる役割になることが多い。
「おいおーい、眠たいこと言ってるなよ～。ＧＨＱは侵略者どもが残した尖兵。それを排

除するのは、大和を守護する六波羅の仕事だろ、童心坊？」
「貴様が言ってもまったく説得力がないな」
茶々丸の言葉を一刀で斬り捨て、斬れ味鋭い視線を投げかけている男は、篠川公方大鳥獅子吼。名門大鳥家の分家筋の出で、若いながら出世街道を駆け上った俊英である。また、目的のためには手段を選ばない、冷酷な男としても知られている。
「どういうことか説明しろ、湊斗景明」
茶々丸から情報を引き出すことを早々に放棄した獅子吼は、離れた場所に控える景明へと話を振った。
本来この会議に出席できるのは、四公方を除けば彼らの上司である足利護氏、もしくは邦氏だけである。しかし、今回は茶々丸の強烈な押しにより、景明にも特別に出席が許されていた。
「ハッ。本日の会合で、六波羅軍とＧＨＱ軍が合同で軍事演習を行うとの取り決めがなされました。実行日は十日後になります」
鋭い視線を受け止めながら淀みなく応える景明に、獅子吼は満足げに頷いた。
このようなやりとりを見ると景明などは、初めから茶々丸の代わりに報告させるため、呼ばれているのではないか、などと思わないでもなかったが、生真面目な彼は、上司の不足を補うのも副官の務めと、自分を納得させている。

「合同軍事演習？　何それ。なんでそんな話になってるのよ」
聞き慣れない言葉に、雷蝶は首を傾げる。
「ああー……うちらも何とかＧＨＱと拮抗するだけの勢力を取り戻したわけだし？　ここらで一発、国の威信的なものを内外にアピールするチャンス……みたいな？」
愛想笑いを浮かべながら応える茶々丸。しかし、そのようなことで煙に巻かれるような者は、この場にいなかった。
「それで本心は？」
「お兄さんに纏わり付くダニ女の駆除！」
悪びれもせずにそう言って、茶々丸は拳を突き上げる。
「何よそれ！　わけわかんないわよ！」
雷蝶は憤怒の表情を浮かべて叫んだ。景明としても、正直に言えばそれに同調したい気分ではある。
「……湊斗中佐」
顔をしかめ、再び茶々丸の副官の名を呼ぶ獅子吼。その意味を景明は正確に理解したが、先ほどと違ってその説明は、歯切れの良いものにはならなかった。
「ハッ、ＧＨＱ側の人物と堀越公方閣下の間で勝負……と言う話になりまして。負けた場合……自分はＧＨＱに移籍する、と。何故そんなことになったのか、自分にもわからない

のですが……」
　説明を聞いて、こめかみを押さえる獅子吼。景明はその背に、冷たい炎の幻影が見えるような気がした。
「結局私怨か。しかも男を取り合ってなどと、議論をするのも馬鹿らしいな」
「全くだわ！　国家を何だと思ってるのかしら。これは私物化よ、私物化！」
　獅子吼の身も蓋もない言葉に雷蝶が同調して、再び弾劾（だんがい）の言葉を放つ。対する茶々丸は、にへらと笑みを浮かべ、やり過ごす気満々といった様子だ。
「まあまあ、獅子吼殿、雷蝶殿。お二方が言いたいことはそれがしにもよ～くわかるのだが、すでに事態は動いている様子。今更反古（ほご）にもできますまい。であれば、この機会を最大限に利用することをこそ、話し合うのが有益かと思われるが、如何（いかが）かな？」
「むう、それはそうかも知れませんけど……」
「ふん、くだらん」
　踊り出した会議を締めるべく、強引に話をまとめにいく童心。彼の言葉に、雷蝶と獅子吼は渋々ながら矛を収める。
　その様子を確認してから、童心はさらに話を進めていく。
「ふむ、篠川公方殿、小弓公方殿共に、この件には乗り気でないご様子。それがしにしても、自領の政務がありますれば、全力を傾けることはかないますまい。であれば、事態を

招いた者であり、やる気も上々の茶々丸殿に一任するというのは？」
物は言い様だな、と景明は思った。つまり、面倒なので茶々丸に丸投げしようとそういうことである。まあ、気持ちはわからなくもなかったが。
「童心様がそう言われるのでしたら、麿は構いませんけど。正直めんどくさいしねぇ」
やる気なさげの雷蝶に、茶々丸は不満そうだった。
「え〜、戦争だぜ、戦争。戦バカのおまえが輝ける、絶好の機会じゃんか。雷蝶」
「武勲が上げられるわけでもなし、興味ないわね。それはともかく、戦バカとか言うんじゃないわよ！　あと麿はいつも輝いてるから！」
茶々丸の言葉を取りこぼさず、いちいち突っ込みを返す雷蝶。
「獅子吼殿はどうであろうか」
「勝手にしろ。馬鹿が何しようが俺は知らん」
やはり面倒だったのだろう、獅子吼は取り付く島もない。
「うわーい。みんなの暖かい声援が身に染みるぜー。セイシンセイイガンバリマース」
諸手を挙げて喜ぶ茶々丸。言葉とは裏腹に、口調は真心の欠片も見つけられないものだったが、慣れてしまったのか、声を荒げる者はいない。
「しかし、茶々丸よ。戯れのような話とはいえ、勝負は勝負。貴様は大和国を背負って戦うのだ。やるからには、負けは許されんからな。覚えておけよ」

「言われるまでもねーよ。ぎったんぎったんに叩きのめして、お兄さんが誰のものか、思い知らせてやる……あ、おまえら手伝わねーんだから、すべてあての好きなようにやるかんね。文句ねーよな？　よーし、燃えてきた！」
にやりと肉食獣を思わせる笑みを見せる茶々丸。なぜかはわからないが、景明は激しく不安だった。

◆　◆　◆

一方、こちらはＧＨＱ横浜基地。
会合の報告に訪れた出席者二人を前に、今回の会合の総責任者であるチャールズ・ウィロー少将は不機嫌を隠そうともしなかった
「大鳥大尉。今回の会合は友好を深める平和的なものだったと私は記憶しているのだが」
「もちろんその通りですわ」
「では、なぜこのような提案がなされるのだね？　大鳥大尉、もう一度言ってみたまえ」
女性に対する礼儀とばかりに、ウィロー少将は声を和らげて言った。
もちろん香奈枝は、それで自分には災禍（さいか）が及ばないと考えるほど愚かではない。しかし彼女の態度は、詰問を受けていても普段と一向に変わるところがなかった。

「はい、閣下。十日後に行われる合同演習で六波羅軍を完膚無きまでに叩き潰すため、精鋭部隊の選抜と、第一級装備の支給、および補給体制の発令許可を頂きたく」

香奈枝の説明を聞いた後、顔面に笑顔を貼り付けたウィロー少将が、傍らにいたさよに向き直る。

「君の主人は英雄だな。演習に見せかけて、六波羅に奇襲でも仕掛けようというのだね？」

「お嬢様ならむしろ正面突破を是とするかと」

「あら、ひどいわさよ。私にだって戦略的なものの見方ぐらいできてよ？」

普段と変わらぬ調子で会話をする主従にウィローの青筋が浮きたつ。

「何故、戦時下にも相当する装備と兵站(へいたん)体制が、たかが演習で必要になるのだ！」

怒声を浴びせつけたウィロー少将は、一度深呼吸をするとさらに言葉を続けていく。

「会合の経緯は私の耳にも届いているから、説明しなくても構わんよ。大尉、君も大変なことをしてくれたものだ。覚悟はできているのだろうな？」

「恐れながらウィロー少将閣下。これはＧＨＱにとって利あることであると、わたくしは確信しておりますわ」

「それはそれは。その利とやらがどのようなものなのか、私には想像も付かないが？」

心底驚いたようなパフォーマンスをしながら、ウィロー少将は続きを促す。

「六波羅軍の勢力が日に日に拡大しているのに対し、我が軍はまことに遺憾ながら劣勢に

立たされていると言わざるを得ません。このままでは、閣下のお立場も危うくなりかねませんでしょう？」
「物は言い様だな、大尉。何でもこの演習は、湊斗景明とかいう男を賭けてのものだと聞いている。生憎、貴官の恋敵を倒すために動かせる兵士など、このＧＨＱにはおらんよ」
「あら、これは心外ですわ。閣下ともあろうお方が、建前と本音を取り違えてしまわれるなんて。わたくし、大鳥香奈枝の忠誠心は一片の偽りもなく、女王陛下のためにのみ捧げられておりますのに」
「話にならんな。もういい。大鳥大尉、相応の処分は覚悟しておけよ」
話はここまでと手を振り、退出の合図を送るウィロー少将。しかし、それを遮るように声をかける者がいた。
「閣下、お待ちを。そのような結論を出されるのは早計ではないかと小官は考えます」
そう言ったのは、今まで彫像のようにウィローの隣に立っていた彼の部下、クライブ・キャノン中佐だった。
「なんだキャノン中佐。まさか、大尉の恋路を応援しようなどと言うのではあるまいな？　こんな茶番に付き合う価値などあるものか」
冗談を言うなといいたげなウィロー少将に、キャノン中佐が近づき耳元に口を寄せる。
「はい、閣下。まさに、まさに閣下の言う通りであります。しかし、小官には、先ほどの

大鳥大尉の言、聞くべきところがあったように思われるのです」
「おいおいクライブ。疲れでも溜まっているのか？　色狂いの女の暴走に、我々が付き合う価値があるっていうのか？」
　不快げに表情を歪めるウィロー少将に、キャノン中佐はさらに言葉を続ける。
「はい、閣下。私が思い出して頂きたいのは、その前に行った彼女の発言です。ご存じの通り、現在、六波羅とＧＨＱの力は拮抗しておりますが、大和国の内政が安定を見せている今、時間は六波羅に味方します。閣下もどこかで楔（くさび）を打ち込む必要を感じておられるはずです」
「この機会にそれを行えというのか？　リスクが大きすぎる」
「もちろん、失敗したときの生け贄の羊（スケープ・ゴート）は用意しておくべきでしょうが、それもすでに目の前におります」
「成功すれば良し。失敗したとしても、彼女がすべての責任をその身に被る、か」
「彼女は強か（したた）な人物ですし、私的な欲もあります。成算は充分にあるかと」
　信頼すべき部下の意見を聞き終え、ウィロー少将はしばし考えに沈んだ。
「ふむ……よかろう。大鳥大尉、君に今回の演習の件、すべて任せよう。自分の蒔いた種だ。もちろん刈り取りは、自分で行ってくれるのだろう？」
　今までとは百八十度反対の命令に疑問を抱いた様子も見せず、香奈枝は言葉を返す。

「ありがとうございます、閣下。ですが、些かそれでは物足りませんわ」
上官に礼を言いながらも、香奈枝はこの期に及んでさらなるものを要求する。
「強欲だな君は。キャノン中佐、この上、私は彼女の献身にどう報いればいいのかね？」
上官の質問に、声を潜めて返答するキャノン中佐。
「存分に働けるよう、権限を拡大するべきでしょう」
「よろしい。この件に関してのみの特例処置として、大鳥大尉の権限を大佐相当まで拡大。戦闘に関する全権を委任するものとする。これでいいかな、レディ？」
「はい、ありがとうございます閣下。偉大なる女王陛下と寛大なるウィロー少将閣下のため、粉骨砕身(ふんこつさいしん)の覚悟で望みますわ」
香奈枝は優雅に礼をすると、執務室を後にする。
しばらくして彼女の前に見知った男が現れた。
「うまくいったようで何よりだ」
「ご助力感謝致しますわ。ウォルフ教授」
頭を下げる香奈枝に、男は笑顔で応える。
「何、大したことではないよ。ただ私は、キャノン中佐に理を説き、若干のアドバイスをしただけなのだから。それよりも、約束は覚えているだろうね？」
「ええ、小娘の下着は必ず剥ぎ取って参りますので、ご心配なく」

約束の話にことがおよび、途端に男の眼光が鋭くなる。しかし、それも数瞬。香奈枝の返事を聞くと、すぐに元の温厚な様子へと戻っていた。
「うむ、よろしく頼むよ。それにしても、六波羅軍は精強と聞くし、相手はあの茶々丸君だ。彼女は勝負事に愚かなほど全力を尽くす質だからな。一筋縄ではいかないだろう。勝算はあるのかね？」
「ええ、今回に限り使える秘密兵器を用意致しました。彼女も存分に働いてくれることでしょう……景明さまとわたくしのために。ふふふふふふ」
興味深げな男を余所に、香奈枝は不敵に笑うのだった。

◆　◆　◆

そして、迎えた演習当日。
演習場を一望できる高台に立った景明の表情は、いつもに増して暗いものだった。
「とうとうこの日が来てしまったな……」
《この一帯に戦気が満ちている。両軍共に士気は高そうね》
「そうか」
景明の呟きに、蜘蛛形態で傍らに待機していた村正から金打声（きんちょうじょう）が返ってくる。

《だけど、これって演習よね？　なんか本気で殺し合いでもしそうな雰囲気なんだけど》
村正の金打声に疑念の響きが混じる。一方、景明はそれに沈黙で応えた。
確かに演習という話にはなっていたが、六波羅とＧＨＱは潜在的な敵同士である。何らかの陰謀がないとは断言できない。
さらに、発端となった二人の女性が、割と手段を選ばない種類の人間であることも、景明の不安を膨らませている要因になっていた。
《で、貴方のその格好はなんなのかしら？》
「俺にもわからん……」
村正に言われて自分の姿を見返す景明。六波羅士官の制服は着ているものの、武器は携帯しておらず、肩から掛けた襷（たすき）には『勝者所有』と文字が書かれている。
武器に関しては村正が近くにいるので、有事の際の枷にはならない。一方、襷の文字は、現在の自分の立場を明確に語っていると見ていいだろう。しかし、これを受け入れてよいものか……。
妄想の中にでも逃避したくなる思いだったが、目の前では戦が起きようとしている。景明の性格では、目をそらすことなどできようもなかった。
「激しい戦いに……なるのだろうか」
「ふっふっふ～っ、そうかもな」

遠い目をしながら誰にともなく言った言葉に、人の声が返ってくる。やってきたのは、今回六波羅軍の総大将を務める茶々丸であった。
「やあお兄さん、こんにちは。ご機嫌如何かな？」
「あまり落ち着きません。中将閣下」
相手はあくまで上官と、生真面目に応答する景明。それに対して茶々丸が何かを言う前に、今度は別の声が飛んでくる。それは、今回の演習のもう一人の首謀者、香奈枝の声であった。
「まあ、それは大変。すぐに介抱して差し上げなくては。わたくしたちの陣地にいらしてください、景明さま」
「ＧＨＱ軍の医療体制は完璧でございます。死んでさえいなければ、半刻で『お嬢さまのために』戦えるようにして差し上げられますので、ご安心を」
そんなことをいいながら、近くまでやってくる香奈枝たち。三者の距離は、景明を頂点とした二等辺三角形を正確に描いている。
「おい、『あての』お兄さんにいらんちょっかいかけるなよ。何のための勝負か、わかってるんだろうな」
「あら、この程度のユーモアも理解してもらえないとは悲しいですわ。今回の勝負は、景明さまが『わたくしのもの』になるための儀式のようなもの。あなたこそ、それを理解して

頂けているのかしら」
　両者の会話を傍らで聞いていた景明は、早くも逃げ出したい衝動に耐えなければならなくなっていた。
《……彼女たちがなぜ、貴方の存在を自分の『物』であるかのように主張しているのか、詳しい説明を要求していいかしら、御堂？》
　さらに増したプレッシャーに景明は、やはり無言で耐えるしかなかった。
「上等上等。そんじゃ戦闘規則（レギュレーション）を確認しとくぞ。武器は刃引きした模擬刀、実弾の使用は禁止。一応、演習だからな。ああ、劔冑の使用はもちろん可。現代戦で劔冑なしの戦場なんて想定したところで意味ないし」
「結構です。勝敗は陣地に設置された軍旗の奪取、または大将の撃破でしたね。その首、頂戴に参りますので、綺麗に洗って待っていてくださいましね」
「はいはい、返り討ちにあった時の泣きっ面を拝むのを楽しみにしてやるよ。で、そっちの大将首はだれがやるんだ？」
「僭越（せんえつ）ながらわたくしが務めさせて頂きます」
「たかが大尉が総大将とは、うまくやったもんだな。ええ？」
「ふふ、お陰様で」
　二人はどちらも笑顔であったが、当然それが友好を表すことには繋がらない。途中で交

差した視線は、激しく火花を散らしている。
「まあどっちでもいいや。楽しみが増えたことに変わりはないし。その首、胴体から斬り離して、お兄さんと一緒に笑ってやるぜ」
「景明さま、もう少々我慢してくださいましね。数刻後から、わたくしたち二人の輝かしくもスイートな日々を始めることができますので」
「「ククククク」」
二人は、そろって愉しそうに邪悪な笑いを上げている。その間に立っていた景明は、自分が魔界に迷い込んだかのような錯覚に囚われた。
「それじゃ、半刻後の合図で開戦だ」
「はい、ではご壮健で」
同時に踵(きびす)を返した両名は、それぞれの陣地に向かって歩き出す。
「あ、忘れてました。首と一緒にパンツも頂きますので、あしからず」
「何でだよっ！」
脈絡のない、理不尽な宣言であった。
一方、その場に残された景明は、不景気な顔をさらに湿っぽく曇らせている。
「止めることは、できないのだろうな……」
《さあ？　……さて、二人も行ってしまったようだし、こちらも用件を済ませてしまいま

しょう、御堂》
「なんだ？」
《なんだか勝った方のものになるとかなんとか……どういうことなのかしら》
「……」
自らに降りかかる新たな危機の到来を察し、景明は押し黙るしかなかった。

◆　◆　◆

戦場に喇叭の音が響き渡る。
《始まったわね。御堂》
「ああ」
両軍の先陣――騎航した武者の編隊同士が激突する。見たところ、両軍の練度は互角。
一当てで前線が崩れるようなこともなく、激しい空中戦が始まっていた。
ところ変わってＧＨＱ本陣。ここからも、先陣のぶつかり合いは確認されていた。
「まずは互角のぶつかり合いでございますな、お嬢さま」
「そのようね。結構な戦力を集中させたのだけど、さすがは精強で鳴る六波羅武者、と

いったところかしら」

双眼鏡で戦況を注意深く観察する香奈枝。部隊行動については予め打ち合わせをしているが、指揮官として機を誤る訳にはいかない。

「感心してばかりもいられませんぞ」

「ええ、わかっています。それじゃ早速だけど、働いて頂こうかしら。怖じ気づいたりしてませんよね？」

背後に声を向ける香奈枝。そこには、一人の少女が不満げに立っていた。

「六波羅と戦うのに否応はないけどよ……ほんとに湊斗さんのためになるんだろうな？　これって演習だろ？」

「ええ、もちろんです。堀越公方足利茶々丸は、景明さまのことを『自分の物だ』などとのたまっていました。この戦いは、人権も認められず、隷奴のようにこき使われているあの方を、鬼畜生の手から解放するための聖戦！　正義の戦なのです！」

その真意を見定めようとするかのようにじっと見つめる少女。しかし、腹芸では敵わないと悟ったか、ゆっくりと息を吐き出し、気持ちを切り替える。

「……なんか胡散臭いが。湊斗さんが、警察の仕事を休んでまで六波羅で働いてるってのは事実だ。とりあえず、信じといてやるよ……行ってくる」

少女が取ったのは『装甲ノ構』。仕手が劔冑を纏う際に行う礼法であった。

世に鬼あれば鬼を断つ
世に悪あれば悪を断つ
ツルギの理ここに在り

少女の立っていた場所に現れた藍色の武者は、そのまま背の合当理を噴かし、前線へと飛び立つ。

「まことに純粋なお方ですな」

武者の騎航を見送りながら、さよは言った。

「あら、含みのある言い方ね。わたくし、嘘は言ってませんわよ？」

香奈枝は武者のことなど忘れてしまったかのごとく、双眼鏡を覗き込んでいる。

「物にはいろいろと言い方があるものですな。さて、これで膠着した前線も動き出すはず。もうしばらくは、高見の見物ですかな？」

「いいえ、もう一手打っておきましょうか。神は自ら行動を興す者をこそ、お助けくださるそうですから。まあ、差し出されるのを待つだけというのも、性に合いませんし」

合当理　武者の背部にある推進機関。これによって武者は飛行することができる。

そう言ってさよに笑顔を送る香奈枝。その頬は、戦いの気配に昂ぶっているのか、やや上気している。

「ご立派でございます。さながら獲物を狙う肉食獣のごとき心境、といったところですかな。ご安心なさいませ、神は獣に手を差し伸べません。ここからは、お嬢さまの独壇場でございますよ」

「ふふ、それは嬉しいこと。せっかく機会が巡ってきているのですもの。美味しいところは全てわたくしが頂きますわ」

轟音が聞こえたのは、その時だった。

◆　◆　◆

戦場では、両軍の武者たちが弧を描くように飛び、時おりぶつかっては火花を散らしている。

武者同士の空中戦では、劔冑の装甲を貫くため、運動エネルギーを利用するのが定石である。より有利な条件で攻撃を行うべく、相手より高度を取るため、一定の空間を弧を描くように高速で飛び続けることになるのだ。

《なかなか崩れませんな。敵もやるものです》

六波羅の武者が自分のやや後方を騎航する隊長騎へと声を送る。
彼らは、次の攻撃を仕掛けるため一時的に離脱した編隊だった。主戦場からはやや離れており、今のところ至近に敵の姿はない。
《あまり感心してばかりもいられん。敵の側面に回り込み、強襲をかけるぞ。続け！》
《応っ》
速度を上げるため、合当理を噴かす武者たち。そこへ、索敵能力の高い一騎が、仲間たちへ警戒を促す。
《センサーに感あり。こちらに向かってきます！》
《敵か？　主戦場にはまだ距離があるはずだが。数を報告せよ》
《単騎です……視認できました。真打武者、見たことのない型です》
《こちらでも確認した。見たところ大和の劔冑のようだな。味方か》
《なおも接近。こちらの呼びかけに応答なし》
《故障でもしているのか？　まったく……》
《抜刀！　攻撃態勢に入ってます！》
《なんだとっ！　くそ、迎撃……ぐあぁぁっ！》
《隊長ーー！》
武者の太刀をその身に受けた隊長騎は、損傷のためか応答もなく、そのまま高度を下げ

ていく。
《馬鹿野郎！　ぼうっとするな！　次が来るぞ！》
その声ははたして届いたのか、接近を許した僚騎が太刀を受けて墜落していく。
《くそぉっ！》
一騎、また一騎と墜とされていく六波羅武者たち。気付いた時にはすでに数の有利はなく、撤退を余儀なくされていた。

敵が逃げていくのを見届けて地面に降り立った一条は、周囲の状況を確認した。とりあえずの安全は確保できたらしい。武者たちの乱舞する戦場は遠く、敵の姿もまた遠い。
《うじゃうじゃ居やがるな……いけるか、正宗？》
《応っ、邪悪なる敵を討ち果たすは我が本懐なり。悪と対する限り、正宗に敗北は無し！だが、改めて問うておこう。御堂よ、我らが行動は正義か。対峙す奴等共は悪か》
《民を虐げ、好き勝手やってる六波羅が正しいはずはねえし、これは……だ、大事な人を助けるための戦だ。あたしたちの征く道は間違ってなどいない！》
自身の正義を問う正宗に、一条は応える。途中、照れたように言い淀んだのは、若さゆえであっただろうか。
《与するＧＨＱは正義を行うものか？》

《確かにGHQも香奈枝の奴も信用ならない奴らだけどな。もし、裏切られたのなら一緒に潰してしまえばいい》
さらに問う正宗に一条は、今度は淀みなく応えを返す。
《その覚悟、心地良し。我らこそ正道、我らこそ正義の体現よ！》
満足そうに金打声を発する正宗に、一条は頷きでもって応える。そこに一切の迷いはなかった。
そこに、新たな六波羅武者の編隊が現れる。不意打ちに成功した先ほどと違い、すでに武者たちはあたりを警戒している。
《敵騎多数！　どうする、御堂？》
《一々相手にするのも面倒だな。よし、あれで蹴散らす！》
《承知！》
劔冑の内部から発せられる異様な破砕音。その音が聞こえなくなると、正宗は腕を前に突き出し、射撃態勢を取る。
《……正宗、七機巧（からくり）が一。飛蛾鉄炮（ひがてつはう）・弧炎錫（こえんしやく）》
《DAAI・AAARRRRR‼》
正宗の中から産み出された砲弾は、戦場に到達すると爆散。轟音を巻き起こした。

◆◆◆

同時刻、六波羅軍の本陣から戦場を伺っていた茶々丸は、その光景を目にして顔をしかめていた。

「げっ、無茶苦茶しやがって……ずっりーなぁ、あれはありなのかよ」

視線の先には爆炎に飲まれる武者の姿。その中には六波羅はもちろんＧＨＱとおぼしき武者も見える。

「まあ、考えるのは後にしよ。さっさと立て直さないと戦線が崩れる……予備隊の一部を左翼に回して敵右翼を圧迫。それと厩(うまや)衆を呼べ」

口早に指示を出す茶々丸。それから間を置かず、茶々丸の元へ一騎の武者が現れる。これなるは、六波羅の特殊部隊、厩衆の一騎であった。厩衆は足利一族の守護を任とし、常時は護氏や邦氏の身辺を警護する部隊だったが、この演習のために茶々丸が半ば以上強引に借り受けていたのだった。

《お側に》

「ちょっと早いが厩衆を投入する」

別段驚いたふうもなく、茶々丸は武者へと指示を伝えた。

《恐れながら、閣下。それでは本陣の陣容が薄くなりますが》

「いい。今勢いを止めとかねーと、そのまま押し切られかねないかんな。わかったらさっさと動け」

《御意》

　武者は、声だけを残し、すぐさま姿を消した。

「それにしても正宗か。天下一名物様を引っ張り出すとは予想外だったな」

　茶々丸は、かの武者と直接的な面識があるわけではなかったが、景明とは知己だと言うことは知っている。身も蓋もなく言えば、香奈枝と同じく邪魔者であった。

　ＧＨＱ側について演習にしゃしゃり出てきているということは、おそらく景明の件を利用して香奈枝に丸め込まれたのだろう。

　ともかく打つべき手は打っており、これでしばらくは保つだろうと見立ててもいる。しかし、当然安心はできない。次の一手を早急に考えねばならなかった。

　考えに沈んでいたその時、常人より遥かに優れた彼女の聴覚が、その身に迫る危機を察知する。

「くっ、ステルスか！　敵襲！」

　彼女の叫びとどちらが早かったか、ＧＨＱの西洋劔冑（レッドクルス）部隊が出現、本陣へ突入を開始する。さらに、茶々丸の前には白銀の装甲を持つ騎士が姿を現す。

《ご機嫌よう、堀越公方閣下。その首、頂きに参りましたわ》

劔冑から金打声を発したのは、誰あろう大鳥香奈枝だった。
「おいおい、総大将自ら敵本陣に強襲とか、いつの時代の猪武者だよ。正気の沙汰じゃねえな」
《ふふ、あまりにも戦の芳しい香が近いので、当てられてしまったのかしらね》
「うわぁ、血臭嗅いで興奮とか、マジ変態」
《自分でもはしたないとは思うのですけども、居ても立ってもいられなくって。お相手頂けるかしら？》
まるでダンスを強請るような調子の香奈枝に、茶々丸は肩を竦める。
「いや〜あんまり関わり合いになりたくないんですけどねえ。しようがねえなあ。じゃ、とりあえずお代としてその首もらっとこうか」
《まあ、困りましたわ。そんなに安いものでもないのですけど。まあ、せっかくだから存分に楽しませていただきましょう、かっ！》
手甲に装着された弓から矢を放つ香奈枝。人の身など易々と貫くであろう剛弓の一撃を、茶々丸は超人的な身のこなしで何とかかわす。

西洋甲冑　西欧諸国における数打劔冑の呼び名。大和のものより若干大きく、長剣を主兵装とする。

「うぉい、てめぇ！　そんなんが当たったら、さすがのあてでも死ぬっての！」
すぐさま抗議の声を上げる茶々丸。一方の香奈枝は普段と全く変わった様子を見せていない。
《あら、これはわたくしとしたことが、失礼致しましたわ。でも、まあ演習とはいえ事故は付き物ですし、あまり気にすることもありませんわよね？》
「ほう、そうかそうか。そういう心算か。そっちがその気なら遠慮はいらねぇよな……」
茶々丸が腕を振り上げたのを合図に轟く爆音。香奈枝のいた地点に土煙が巻き起こる。
《砲兵を伏せてるなんて、いけずなお方。最初からやる気だったんじゃありませんの》
「細かいことは気にすんなって。皺が増えるぞ？」
土煙の中から現れる白き武者。その装甲には傷一つ付いていなかった。
睨み合う一人と一騎。その中間で響く新たな轟音。それは藍き武者が放った砲弾が起こしたものだった。
《助太刀してやろうか？》
「チッ、前線突破されたか」
一条の声を聞いて思わず舌打ちする茶々丸。正宗は単騎で抜けてきたようだが、これで一対二。しかも相手が武者とあって、状況は絶望的といっていいほどだ。
《わたくしを巻き込むところだったじゃありませんか。何考えてるんですの！》

《あははは、わりいわりい。あまりのチャンスに手が滑っちまった》
怒りを顕わにする香奈枝を、一条は明るく、そして軽くいなす。
《そいつを倒せば終わりなんだろ？　大将首、もらうぜ！》
そう言うや否や突撃する一条。しかし。
《ぐっつっ……てめえ、何しやがる！》
その身に矢を受け、今度は一条が激怒する。
《あら、これは失礼致しました。茶々丸さん『も』狙っていたんですけど、手元が狂ってしまいましたわ》
《ほう、そうかい。そっちがそういうつもりなら、気兼ねなくやれるな。生かしといたところで、湊斗さんも迷惑だろうし》
《はあ、あなたには期待していたんですけどね、一条さん。最前線で共倒れにでもなってくれると。まあ、そちらの堀越公方閣下と一緒に始末してしまえばいいですか。どちらも景明さまに付きまとう害虫ですし》
二騎の武者の間で、途端に緊張が高まる。二人の共闘を警戒していた茶々丸は、にやりと笑みを浮かべた。
「あてとお兄さんのハッピーライフを邪魔する奴等を二人も排除なんてラッキーだなぁ。これはちょっと本気で行くぜ」

こうして六波羅軍の本陣では、三人の女による三つ巴の戦いが幕を開けた。

◆◆◆

所変わって、ここは戦場を一望できる高台。
ここから演習の推移を見続けていた景明は、絶望に近い想いを抱いていた。
「なぜ、このようなことになった……」
《御堂……》
切っ掛けは、正宗が戦場の最前線へ放った砲撃であったであろう。攻撃を受けた六波羅兵士は、あれを演習での使用を禁止されていた実弾兵器と勘違いした。元々士気の高かった同軍は、これに激昂。苛烈な攻撃を敵に加え始めた。
もちろん、GHQ側も黙ってはいない。敵の異常な戦意に触発され、猛烈な反撃を開始。戦闘は刻が経つに従ってエスカレートしていく。
そして現在、戦は両軍が死力を尽くした総力戦となっている。装備こそ最初と変わらない非殺傷が目的のものではあったが、戦いの熱狂に支配された戦場は、すでに本物の戦争と変わらない地獄絵図を描いている。
負傷者は数え切れない。死者が出ていないとしたら、奇跡と言えるかもしれない。

「俺が悪いのか……」

この惨状を前にして、自分が戦いの原因となっていることを知る景明は、未だかつてないほどの自己嫌悪という名の闇を心に広げていたのだった。

◆　◆　◆

合同演習の数日後。茶々丸は、意気揚々と執務室へと向かっていた。

あの後、熾烈(しれつ)を極めた茶々丸たち三者の戦いは、日が落ちるまで勝負が付かず、時間切れ。割と近くにあった六波羅軍旗の存在を香奈枝、一条共に忘れていたため、勝利条件が満たされることはなく、演習自体の勝敗も引き分けとの裁定が下っている。

そのため、茶々丸と香奈枝の勝負も引き分け無効。景明は自分の部下という立場のままであり、結果的に彼女の目的は達せられた。

一方、両軍の主力がぶつかった最前線では大将の鬼気が伝播(でんぱ)したのか、戦闘は時が立つと共に苛烈さを増していった。最終的には、両軍共に武者百騎を越える損害を出すに至り、後の世に史上最悪の演習として語り継がれることとなるのだが、今の茶々丸にとってはどうでもいいことであった。

「ふっふっふっ、今日からずっと、どこに行くにもお兄さんと一緒だぜ」

そんな心の声を口に出していることにすら気付かないほど、彼女は浮かれていた。
そのままの勢いで執務室のドアを開ける。
「グッモーニンッ、お兄さん！　今日も……あれ？」
室内に景明の姿がないことに首を傾げる茶々丸。ふと机の上を見ると、そこに『堀越中将閣下へ』と書かれた封筒が置かれているのに気付く。
「これ、お兄さんからだ……てことは、これはもしや……嬉し恥ずかし恋文というやつですかっ？」
封筒を見ながら顔を赤らめる茶々丸。大きく深呼吸をしてから封を開け、取り出した便箋を開く。そこには、彼の性格を表したかのような整った文字が、几帳面に並んでいた。

『争いのない地へ旅立ちます』

「な、なんじゃこりゃ〜〜〜〜〜」
真っ白になった脳に理解させるため、書かれた一文を何度も何度も読み返した茶々丸は、その内容に愕然とするのだった。

（第三話・了）

魔法聖女マジカルアベンジャー

第三話　強襲！　鎌倉大番

「んぐ、んぐ、んぐ、んぐ……ぷはぁっ、マスターもういっぱい！　いいから。いいから注ぎなさい！」
　手にしたコップをカウンターに叩きつけ、香奈枝は言った。
　困った様子の店主は、糸目の香奈枝に睨まれ、首を振りながら酒を注ぐ。
　ここは、駅近くにある屋台の一店。すでに日は暮れ、飲み屋などが集まった一角から離れたこの辺りは、人通りがほとんどなかった。店のカウンターも、香奈枝、さよを除けば一人分しか埋まっていない。
「うううう……なぜ、わたくしがこのような仕打ちを受けなければならないのっ」
　そう言って、カウンターに突っ伏す香奈枝。コップは手放しておらず、注がれた酒が波立ってすらいないというのは、なかな

か器用な芸当だった。
「おやおや、はしたない。まるで、仕事に失敗してアル中になった中年のようでございますよ、お嬢さま」
御猪口(おちょこ)を上品にやっていたさよは、暴飲を続ける主人をやんわりと窘める。
しかし、もっともなことを言っているようで自分の方を見ようともしないさよに、香奈枝は子供っぽく頬を膨らませた。
「さよ、あなたにはわからないの？　何も知らない人々から心なき批判を受けた、この！わたくしの！　ブロークンハートが！」
そう言ってガバッと起き上がったかと思うと、コップの中身を一息に喉へ流し込み、そのまま前方へと突き出す香奈枝。店主は諦めたように溜息をつくと、再びコップを酒で満たした。
「わたくしだって……わたくしだって……客観的に振り返れば、あの格好はほんのちょっとだけ厳しいかなぁと思わなくもありませんわよ？」
さよが構ってくれないと見て、香奈枝は店主へと矛先を変える。
「でも……でもですわよ！　あんな病人を扱うかのような態度を取られるほどのことなんですのっ！　しかも、同情してきたのはあの小娘！　ああ、生きるのがつらいっ……………ぷはぁ、もう十杯！」

コップを突き出した香奈枝を見て溜息をついた店主は、彼女の手からコップを引き抜き、代わりに一升瓶をもたせた。
「そうか、あんたも大変なんだな……世の中、ままならないことばっかだよなぁ」
　香奈枝が一升瓶を呷りながら隣を見る。そこには、顔を酒気で染めた白スーツの男が、噛み締めるように何度も頷いていた。
「……あなたは？」
「オレか？　オレは野木山組の武藤ってもんだ」
「野木山組……ですか」
　さよが小さく呟くが、男はそれを気にせず話を続ける。

「うちの組は六波羅御雇なんて看板掲げちゃあいるが、こう平和な世の中じゃ仕事がやりにくくってしょうがねぇ。おまけにこの前なんか、若い衆がこっぱずかしい格好をした女に襲われてな。天下の大通りでのされてからってもの、怪我人が多くて人手は足りねぇわ、集金やり過ごすなんてなめた態度取る奴は増えるわ……」

「それはお気の毒に……」

武藤の心情が伝播したのか、悲しみに沈む香奈枝。しかし、すぐに表情を改め、可愛らしく首を傾げる。

「あら？　でもなぜかぶん殴りたいような激しい衝動が湧きあがる……この感覚はいったい何なのかしら？」

「『こっぱずかしい格好』に反応したようですな」

どうでもいいことのようにさよは言った。香奈枝はというと一升瓶を呷っており、さよの言葉は脳に届いていないようだ。

「そろそろやばい仕事にも手をつけなきゃ、看板降ろすなんて事にもなりかねねえなぁ。田中の爺さんには悪いが、早いとこ立ち退いてもらわねえと……」

「そうですわね〜。あ、おでんいただこうかしら」

「はい、食べごろでございますよ、お嬢さま。店主、私は、はんぺん、がんも、ちくわでお願い致します」

早くも興味を失ったのか、愚痴る武藤に適当な返事を返す香奈枝。武藤は武藤で、それを気にした様子もなく話を続ける。
「だいたいよ、こっちだって必死に働いてんだよ。けど、六波羅への上納金に加えて、鎌倉大番にまで鼻薬（はなぐすり）を用意しなくちゃならねぇ。これがまた重くってしょうがねえのよ。根っこは同じ組織だってのに二重取りじゃねえか、ちくしょうっ」
そう言うと、コップをカウンターに叩きつける武藤。
「まあ、なんてひどいっ！　これは許せませんわね、ばあや？」
おでんが盛られた皿を嬉しそうに受け取りながら、香奈枝は言った。
「恐れながら、お嬢さま。さよはそうは思いませんが」
同じくおでんを受け取りながら応えるさよ。
「わかってくれるか、ねえちゃんっ！　あんたいい人だなぁ」
「ふふ、そんなおだてないでくださいまし。善良なる一般市民を苦しめる悪に義憤を燃やすのは、人間として当然のことですわ」
同意を得て顔を弛める武藤に、香奈枝も笑顔で応える。

鎌倉大番　六波羅幕府が鎌倉の治安維持を名目として発足した公安警察。

「あなたの嘆き、わたくしの心に届きましたっ。許すまじ、鎌倉大番！」
「脳細胞の隅々まで酔いが回ってらっしゃいますね、お嬢さま」
さよが溜息と共に吐き出した言葉は、やはり主人に届いていないようだった。

どごーんという轟音が、深夜の鎌倉に響き渡る。
「何だ何だ！　何が起こった！」
「音は近かったぞ。詰所内を確認しろ！」
夜番の兵士がすぐさま動きだし、建物内がにわかに騒がしくなる。
ここは、市街にある鎌倉大番の詰所。六波羅幕府によって骨抜きにされている警察に代わり、街の治安を維持する要(かなめ)として設置された、治安組織の最前線基地だった。
「ん？　壁が崩れてる。みんな来てくれ！」
立ちこめる粉塵に目を細める兵士たち。その前に、一つの影が現れた。
「どうも、夜分遅くに失礼致します。正義の味方が天誅(てんちゅう)を下しに参りました」
場違いに丁寧な挨拶をする人影に、兵士たちは困惑する。
「な、なんだ貴様は！」
「ふっふっふっ、問われたならば名乗りましょう。民の嘆きをその身に受けて、晴らして見せましょう、その復讐心！　復讐の聖女マジカルアベンジャー、参上ですわ！」

ポーズを決めつつ、マジカルアベンジャーは名乗りを上げる。その顔は朱に染まっており、妙に愉しそうだった。
「なんだ、この頭の中が春っぽい女は。酔っぱらい？」
「あんまり、関わりたくないタイプだよなぁ。おまえ、ちょっと相手してやれよ」
「えっ、しょうがねえなぁ。ゴホンッ、あーここが鎌倉大番の詰所と知っての狼藉（ろうぜき）か！」
「「おお～」」
朗々と語る兵士に、同僚二人が拍手を送る。
「ええ、もちろんです。わたくし、理由もなく壁を破壊するような趣味も暇もございませんので」
「なら、入口から入ってこいよなあ」
「全くだ。ただでさえ、経費削減とか言われてんのによ。この壁の修理に特別予算、下りるかな……」
「おい、気が散るからそれくらいにしてくれよ……。奇妙な格好をしおって、狂人が！　貴様には羞恥心というものがないのか！」
野次を飛ばしてくる同僚を窘め、再び言い放つ兵士。その言葉にマジカルアベンジャーは、はらと悲しげに崩れ落ちる。
「あなたも……あなたも……そんなひどいことを言うんですのね……。どうやら間違いで

はなかったようです」
次の瞬間、兵士の言葉にスイッチが入ったマジカルアベンジャーの気が、異質な物へと切り替わる。
さらに、女の顔を見て戦慄する兵士たち。その目は複眼、しかもその眼球には多数の瞳があり、それぞれが別個の動きをしていたのだ。
「やはり鎌倉大番は悪！　このマジカルアベンジャーが成敗して差し上げます！」
「め、面妖な！　いい歳してマジカルとか頭につけおって。よかろう、痛めつけて牢に放り込んでくれる。出会え出会え！」
兵士の叫びに呼応して、近づいて来る気配は十を越えていた。しかし、マジカルアベンジャーはというと、それに気付いて怯えるどころか、口元に浮かべていた笑みをさらに深くしている。
「あら嬉しい。こんなに獲物がたくさんいらっしゃるなんて。皆さん、遠慮なくわたくしの復讐心を受け止めてくださいましね」
「おいおい、姉ちゃん。こっちは銃火器で取り囲んでるんだぞ？　そんなステッキ一本でどうするつもりだよ」
「あら、ご心配なく。これだけで充分事足りますので」
数の優位、装備の優位からか、精神的な余裕を見せる兵士たち。しかし、それも長くは

続かない。
「マジカル～」
カシャンと乾いた音を立ててステッキの先が三つ叉に分かれる。さらに取っ手部分にもグリップが現れ、固定された。
「連装ボウガンッ！」
「グワッ」
グリップを握ったアベンジャーがそう言うと同時に飛び出した三本の矢は、狙い違わずそれぞれの兵士に突き刺さる。
「ふっふっふっふっふっ、パーティは始まったばかり、皆さん楽しみましょう」
不敵に笑う狂気の復讐者を前に、兵士たちはそのまま戦意を、根こそぎ奪われてしまったのだった。
「はあ。酔いもいい感じに抜けましたし、そろそろお暇させて頂こうかしら」
増援を片付け満足げなマジカルアベンジャーが、周囲を見回しながら言った。すでに瞳は細められ、傍から覗うことはできない。
そこへ現れる新たな気配が一つ。
「ひどい有様だな……」

香奈枝が振り向いた先には、彼女のよく知る人物——湊斗景明の姿があった。
「か、景明さま！　なぜこのようなところに……」
倒れた兵士の様子を確かめていた景明は、女の声に顔を上げる。
「見回りをしていたところ、大番の詰所で騒ぎが起こっていると聞きまして。自分の力も何かの足しになればと、様子を見に来たのです」
動揺するそぶりも見せず、淡々と語る景明。
「大鳥大尉、貴女こそなぜこのようなところに……というか、その……個性的な格好は何です？」
気になる男性に服装のことを指摘され、香奈枝は途端に動揺を露わにする。
「こ、これはその……そう、変装ですわ！　大番の詰所を見学させて頂こうと思ったのですけど、ＧＨＱの士官だと知れれば、不都合が出てきますでしょ？」
苦しい言い訳をする香奈枝に対し、景明は生真面目な顔で応える。
「なるほど。しかし、大尉殿。その格好は、些か潜入任務には適さないのではないかと思われます」
「お、おほほほ……そう思われます？」
「はっ、失礼を承知で申し上げるなら。この手の任務では、人目を引かないことこそが重要になります。服装は、人々の間に埋没するような物こそが相応しいのです」

「ええ、その通り……」
「しかし、大尉殿の格好は少女趣味が過ぎ、容姿、体型、雰囲気、すべてが不釣り合い。そのつもりがなくとも、全力で存在をアピールしております。そのインパクトたるや一度見たら数日夢でうなされかねないほど」
「……景明さまにまで、そんなはっきりくっきり言われるなんて。酷い……酷すぎます！」
彼女に取って景明は特別な男性だった。そんな彼の口から聞きたくない単語が次々と発せられたことで、彼女の中の復讐心が一気に限界まで燃え上がる。
「……大尉殿、なぜそんなステッキを振り上げ……ぐふっ」
ステッキで殴打された景明は、その場に崩れ落ちた。
「ああ……愛し合う人までこの手にかけてしまうなんて……わたくしは……わたくしは、なんてことを。正に悲劇！」
香奈枝の頬を一滴の涙が流れ落ちた。
「大尉殿……私は死んでおりません。それから……『愛し合う』というのも訂正を……」
悲劇に酔った香奈枝にとって、ダメージの影響によって擦れた景明の声は、あまりにも儚く、小さすぎた。
景明の声には気付かず、その場を後にする香奈枝。外に出た彼女を、すぐにさよが出迎える。

「お疲れ様でございました、お嬢さま……おや、どうされました？」
「虚しい……全てが虚しいですわ。さようなら、愛おしいお方」
主から不穏なものを感じ、身構えるさよ。それにすら気付かない様子で、香奈枝は愛する男に別れを告げた。
「マジカル～対戦車～ミサイル！」
カシャンカシャンという音と共に、ステッキが巨大な筒状に形状を変える。香奈枝はそれを肩に担ぐように構えた。
「あれはもしや、マジカルアベンジャーが持つ必殺技の中でも最強と伝えられる……マジカルジャベリン！」
「ファイヤ！」
ステッキだった物から発射されたミサイルは、詰所に飛び込み爆発。香奈枝は、涙で霞む視界で、鎌倉大番詰所が崩壊する様を見つめていた。

（幕間三・了）

雷帝戦記

鎌倉市街の一角に広がる広大な竹林。深夜、人気のないこの場所に、姿を現した異形の影が一つ。それは、血を浴びたかのように紅い、巨大な鋼鉄の蜘蛛であった。
静謐な空気と緑の香りが満ちる竹林に、硬質な燦めきが反射する。巨蜘蛛の身体は堅牢な鋼で覆われており、姿こそ蜘蛛のようであったが生物のそれとは相容れない、異質な存在感を放っていた。
《他にも来ているようね》
巨蜘蛛——村正は一人ごちる。彼女と契約を交わした仕手である湊斗景明を含め、周囲に人影はない。
しかし、劔冑であり、通常の人間より格段に優れている彼女の感覚は、近辺にいる何らかの存在を感じ取っていた。
だが、彼女はあまりそれを気にした様子もなく、林立する竹の一本へと近づいていく。
《さて、と……》
シュルシュルという音が、周囲に満ちる。鋼糸をはき出した彼女は、器用にそれで網を作っていった。
《はぁー……落ち着くわぁ》
鋼糸の網を広げながら、声を発する巨蜘蛛。もし、これを受け取った者がいたならば、そこに恍惚と安堵感が入り交じったような溜息を感じ取れたかもしれない。

彼女がこの竹林を訪れるのは、今日が初めてではない。それどころか、景明に命じられた夜のパトロールの際には、必ずと言っていいほど訪れていたりする。
人の手がほとんど加えられていない、清浄な緑の気配が惹きつけるのか。ここは多くの意志持つ甲冑が訪れる、劔冑たちの憩い(いこ)の場となっていた。
このことは、劔冑たちの主たる仕手たちにさえ、知られていなかったが。
《こういう場所をなんて言ったかしら。確か……〝ぱわぁすぽっと〟？　……まあどうでもいいけど》
作り上げた巣の中心に収まって、溜息をもらす村正。その姿からは、現代戦場の主兵器とは思えない、弛緩(しかん)した空気を漂わせている。
共に武を示すべき主から離れ、戦いからはほど遠いであろうこの場所において、彼女は今、確かに幸福だった……のかもしれない。
しかし、そんな至福の時間は長くは続かなかった。鋭敏な彼女の感覚が、頭の中に警笛を鳴らす。
《熱源探査に反応あり。距離……近い！》
探査機能によって浮かびあがった姿が、急速に大きくなっていく。
《奴だ……奴が来たんだわ……》
地響きを立てて駆けてくる存在感の塊。それは人の姿をしていた。

《竹林を統べる者……雷帝！》

「きっさっまあああ！　そ～こでなっにっをっしておるくぅわあああああああ‼」

静寂を切り裂き、雷鳴のごとき怒声が響き渡る。
それを正面から受け止る形になった村正は、戦慄を禁じ得なかった。
（このご老人は、ほんとどこから嗅ぎ付けてくるの？）
気が緩んでいたと言われれば否定はできない。しかし、彼女とて真打劔冑であり、世に聞こえし、妖甲村正である。隠行術（おんぎょうじゅつ）は並以上である自信があった。
にもかかわらず、毎度自分が竹林に侵入すると決まってやってくるのだ。真っ直ぐ、一直線に。
そもそもどのようにすれば、人の身で劔冑の探査範囲外から自分を発見することができるというのか。
「くぉぉの化物蜘蛛がぁぁあああ！　今日こそ駆除してくれるぅぅあああ‼」
そう言うと手にした竹箒を振り上げ、気合の雄叫びと共に突っ込んでくる老人。
しかし、振り下ろされた場所に、村正の身体はすでになく攻撃を回避している。
勢いそのままに鋼糸の網を叩いた箒は、先端三割のところで断たれ、鋭い断面を作り出

している。
（くっ、一般人相手に戦ったら……絶対御堂に怒られる。あのご老人が私を劔冑だと気付いていないみたいなのは幸いだけど……劔冑を見たことないのかしら？　全く、無知は怖いわね……）
疑問には思うが、この際それは有り難かった。何しろ、この異形である。一般人の目に触れれば、すわ魔物か物の怪か、などと騒がれることは想像に難くない。噂にでもなれば、今後の活動に支障をきたす可能性もあるのだ。
（この姿で人前に出るの、御堂に禁止されてるしね）
「逃ぃがしてぬぁるものくぁっ！」
その怒声に視線を向けると、そこには逆手に持った箒を肩に担いだ老人の姿があった。限界まで振りかぶったその姿は、さながら引き絞られた弓のよう。
「ぉぉぉぉセイっ！」
《きゃっ！》
気合一閃、放たれる竹箒。それは老人が投げたとは思えない速度で飛来し、間合いの外と油断していた村正に命中。甲高い音を立てる。
鋼糸で断たれたことで、竹箒はさながら槍のように先端が鋭くなっていた。人が相手なら充分な殺傷能力を発揮しただろう。しかし、当然のことながら劔冑の装甲を貫くには足

りず、傷を付けることすらできていない。
だがこの一撃は、彼女の身体ではなく精神へとダメージを与えていた。村正からすれば、今のは正に不意の一撃。致命傷には程遠いが、冷静さを失わせるには充分だった。
《この……調子に乗って‼》
態勢を立て直し、鋼糸を放つ村正。
その糸は、人の力で断つことはできない。たかが年老いた人間を拘束するなど、造作もないはずだった。
しかし、現実は彼女の予想を完全に裏切る。老人は、鋼糸を全て避けきっていた。地面に転がり、竹林を盾にして。
(信じられない……)
目にした光景に驚愕し、動きを止める村正。しかし、目の前の老人は、彼女が立ち直るまで待ってはくれなかった。
「貴様……儂の竹林に……何しよるくぅぁぁぁぁ！」
老人は鋼糸によって倒された竹林の竹を手に拾い上げ、鬼のような形相で巨蜘蛛へと打ちかかる。
《ヒィッ！》
その威圧感に本能的な恐怖を感じた村正は、距離を取るべく後ろへ飛んだ。その瞳に、

老人が大きく息を吸い込んだ姿が映る。

「ーーーーーーーーーーーっ‼」

《きゃあっ！》

それははたして声だったのか。老人の口から発せられた音の波に、村正は叩きつけられるような衝撃を感じた。

《なっ！　探査機能に異常⁉　身体反応にも障害ですって⁉　な、何とか離脱を！》

老人の怒声から遠ざかろうと、無我夢中で蜘蛛は疾る。

彼女がパニックから立ち直った時には、竹林は遙か後方にあった。

◆　◆　◆

《内部をスキャン。探査機能復旧、損傷部位なし》

市街にある建物の屋根に降り立った村正。彼女が何事か呟くと、その姿は人のそれへと変容する。

「ふぅ」

蝦夷の女性の姿へと変じた村正は、一つ息を吐いた。回復した感覚で周囲を索敵するが、敵の気配は感じられない。

「いったい何なのあれは……」

彼の動きは全く予測の範囲外。理由を探したくとも、相手を理解できなければ、想像することも難しい。

しかし、あれは紛れもなく生身の人間だった。そして、自分には最強の兵器たる自負がある。戦闘能力で圧倒的に劣るただの人間に、劔冑である自分が退けられたとあっては、動揺せずにいられなかった。

「くっ……無様な」

《そう、まさに無様としか言いようがないな》

背後に降り立つ気配を感じて振り返る。そこには月光を受けて銀色に輝く、女王蟻の姿があった。

《辰気収斂》

女王蟻がそう言うと、蜘蛛と同じく人へとその姿を変じさせる。容姿は蝦夷特有の肌を持つ女性のもので、どこか村正に通じるところがあった。

「かかさま……」

女王蟻から人へと変じた彼女の名もまた『村正』。蜘蛛から変じた村正の母であり、先んじて劔冑となった二代目——二世村正と呼ばれる劔冑だった。

「唯人と対峙し、背を向けて逃げ去るなど、なれには劔冑としての誇りがないと見える。

それでよく村正を名乗れたものだ」
「あ、あれは違うのよ。本気で戦えば負けないけど、御堂に怒られるっていうか……」
「言い訳とは見苦しい！　この上、さらに我らの名を貶めるつもりか！」
なおも言い募ろうとする娘を、二世村正は言葉の刃で一刀のもとに斬り捨てる。
「うぅ、ごめんなさい……」
村正にも言い訳をしているという自覚があったので、黙るより他ない。
人と劔冑には、戦闘能力に覆し得ないほどの差がある。仕手がいない、能力を十全に扱えない状態であっても、彼女は自律行動が可能な真打劔冑。正面から戦って負ける要素はない……はずであった。
「……仕方がない。あの地は、冑にとっても心地よき場所。あの老人の排除は冑の手で行おう」
「待ってかかさま。『排除』って……」
「なれはそこで見ているがいい」
そう言い残して、再び女王蟻の姿に変身した二世村正は、竹林へと飛び去った。

◆
◆
◆

（全く、あれにも困ったものだ……素材は良いはずだが、大事なところが抜けている）
竹林に着いた女王蟻は、林立する竹を避けながら奥へと進んでいく。
《ふむ。反応はなし、か。誘き出さねばな》
今回は目標の撃破が目的。ならば、派手に動いてこちらの存在を知らせねばならない。
さて、いったいどうしてくれようか、と彼女が考えていると……唐突に、直下の地面が盛り上がる。
「むぁたっ来ぃおったぬぁああああ！」
土中から現れたのは、竹槍を携えた老人だった。
《なっ、待ち伏せだと！》
「羽蟻めがっ！　叩き落としてくれるぅわあああ！　ふんぬっ！」
反射的に回避運動へ移り、飛来する竹槍を避わす銀蟻。しかし……。
「逃がすかぁ！　くふぉおおりゃっりゃっりゃっりゃっりゃっ」
彼女の軌道を追うように、さらに多数の竹槍が彼女の身体へ迫る。その狙いは正確無比。速度も常人のそれではない。
並の劔冑なら、あるいは凡百の仕手が駆る武者だったのなら、早々に直撃を受けていたであろう。しかし今、老人が打ち落とそうとしているのは、巷で銀星号と呼ばれし意志持つ災厄の片割れ。もちろん、その限りではなかった。

《なめるな下郎！》

一時の困惑から立ち直った二世村正は、直撃は避け得ぬと見られた投げ槍を、その腕で叩き落とす。

鋼の腕で弾かれた竹槍は、その硬度に負け、二つに折れて地面へと落ちた。

「まだまだまだまだああああああ！」

どこに隠してあったのか、老人の手から次々と放たれる竹、竹、竹。

しかしそれを、銀の女王蟻はすべて打ち砕く。

《無駄だ。すでに見切った》

不意を突かれた最初の一撃こそ焦らされたが、それも一時のこと。如何に常人離れした攻撃とはいえ、所詮人の手で投げられた竹槍では、劔冑の装甲を貫くことなど叶うはずがないのだ。事ここに至っては、実力差、戦力差は決定的。勝敗はすでに明白。

彼女のくだしたその結論は妥当なものであるだろう。しかし、それを認識したことで、彼女の冷静な思考にわずかな傲り（おご）が混入する。

「ぁあああまいわっ‼」

竹槍を投げた後、勢いそのままに流れるような滑らかさでしゃがみ込んだ老人は、土に埋もれた縄を引き上げる。それに連動して風切音が聞こえたかと思うと、どこからか射出された網が、女王蟻の身体に直撃。その身に絡みつく。

《なんだと⁉》

「殺ったああああああ‼」

そこへ新たに飛来する一本の竹槍。タイミングは必撃であり、稀代の妖甲とはいえ、避けることはすでに不可能だった。月明かりのみが差し込む薄暗い竹林に、甲高い音が木霊する。

しかし、それだけであった。

《見事であった、ご老》

網を切り裂いて抜け出し、頭上から見下ろす銀色の女王蟻。その身体には当然、傷一つついていない。

《なれの武に、こちらも礼を尽くすとしよう》

その言葉と共に、目に見えない精神の波が老人に向かって放たれる。

「ぐ？　ぐぬぅぉぉぉ」

頭を押さえて苦しみ出す老人。

その時、目で追えないほどの速度で飛来した紅の影が銀色の女王蟻に激突。二世村正を弾き飛ばす。

体当たりをしたのは、紅の巨蜘蛛だった。

《かかさま！　一般人に精神汚染なんて、何を考えているの！》

《彼の者に敬意を示した結果だ。優れた武人には、我が全能を持って応えねば、礼を失することになろう。この御仁、なれなどよりもよほど気骨のある人物だったぞ》
《だからって、精神汚染はやり過ぎでしょう！》
《ふむ、そうか？　まあ幸か不幸か、なれの横槍のお陰でほとんど波を送り込めなかった。数日動けぬ程度で済むだろうよ》
目の前でのたうち回る老人を見ながら、二世村正は言った。しかし、母の取る尊大な態度に、村正の怒りは到底収まらない。
《随分と冷淡な物言いね、かかさま。やっぱり、自分がやったことの意味をその身体に教え込んであげないといけないかしら》
《ほう。未熟の身でまた随分と大言を吐く。人間の老人にさえ遅れを取った者の言葉とは思えぬが……教育もまた母親の務めか》
《教育が必要なのは、そっちの方でしょう》
睨み合いを始める蜘蛛と蟻。その傍らで、ゆらりと老人が立ち上がる。
「ううううう……」
《……ちょっと、話が違うじゃない。暴れ出すようなことはないんじゃないの？》
《……いや、狂っているのではない、のか？》
二人の困惑を余所に、一歩を踏み出す老人。言い知れぬ威圧感を感じ、二人は同じだけ

後ろに下がる。
「うしゃあああああああああああああああ‼」
老人とは思えない肺活量で、強烈な雄叫びが上がる。それは獣の遠吠えなどでは決してなく、確かに人間としての意志が込められた、気合の叫び——言うなれば、戦士の咆吼であった。
《なんと、精神汚染を弾き返した、だと！》
《うそ、そんなこと可能なの……？》
「ふっっっっかあああああっ！　覚悟せよっ、妖怪変化どっもっがあああああああ‼」
《《きゃあああ！》》
あまりの出来事に二人は、自らの意志とは関係なく、その場から逃げ出していた。

◆
◆
◆

「どぉこにぃいきおったあぁぁぁぁ……」
彼方(かなた)から聞こえてくる怒声が、徐々に遠ざかっていく。
《なんとか撒いたか》
《どこの怪奇絵巻よ、まったく》

身を潜めていた二騎の村正は、同時に安堵の息を吐き出した。

《それにしても……元気なお爺さんね。なんかさっきので余計元気になった気もするんだけど。そこのところどうなの、かかさま?》

《う、冑のせいではない……と思うのだが。精神汚染を受ける前から、底知れなさは感じていたしな》

《ああ、それについては同意かしら。いったい何者なんだか》

《〝雷帝〟田中(たなか)老人と言えば、このあたりでは有名な人物らしいのだが。詳しい逸話までは聞いていない》

《そう、それは残念。まあ、それはひとまず脇に置いて、どうしようかしらね》

《そうだな、まずは……そこに潜んでいる者、出てくるがいい。それとも我が一撃にて砕かれるが望みか》

闇に向かって鋭い言葉を投げかける二世村正。その声に反応して、黄銅色の塊がのっそりと頭をもたげる。

《あいや待たれよ。話を盗み聞くがごとき不作法、失礼した》

そう言って姿を現したのは、巨大な百足(むかで)だった。

《井上真改(いのうえしんかい)!》

《和泉守国貞(いずみのかみくにさだ)、貴殿もここにおられたか》

《勢洲千子右衛門尉殿が二領お揃いとは珍しい。このような場所で如何されたのか？》
《えっと、さっきから大騒ぎしてたんだけど……聞こえなかった？》
《恥ずかしながら。この地で、心地よい土の冷たさに身を埋めていると、周囲の様子は大抵気にならなくなるものでな》
（つまり地面に寝そべってぼけっとしていたということ？　百足の姿をした者の性か、この土地に不思議な力があるのか……それともその両方かしら）
　畜生の性に支配されると考えるのは、あまりいい気分ではないが、自分も先ほどは蜘蛛の巣を張ってくつろいでいた身である。認めたくはなかったが、全てを否定するのは少々難しかった。
《ふむ、お二方に残る戦いの気配。交戦中とお見受けしたが、如何に？》
《ええ、その通り。劣勢に立たされていてね、恥ずかしながら撤退したところなのよ》
　事情を説明する村正。彼女の母は、撤退した事実を認めたくないのか、不機嫌そうな気配を発するだけで黙している。
《なんと！　音に聞こえし妖甲村正を後退せしむるほどの劔冑が、この鎌倉の地にあろうとは。これは一手、手合わせ願わねばなるまい！》
《……劔冑じゃないのだけど》
　村正は、認識しずらい金打声を放つ。人間で言えば、ぼそりと呟いた感じか。

《はっ？　今なんと？》
《いいえ、なんでもないわ》
《二人とも、話はそこまでだ。来たぞ》
二世村正の警告に身構える異形の者たち。
《応さ。どのような名物が相手か、腕が鳴る！》
《ええっと……見ればわかると思うけど、殺さないでね》
その言葉とどちらが速かったか。一直線に飛んできた竹槍が、真改のすぐ横にある竹にぶつかって弾かれ、カコーンと音を立てる。
そして、槍と同じ方向から姿を現す老人が一人。その背には、竹槍が十字の形に刺さっていた。
「見つけたぞぉぉぉ妖怪変化どもぐぁあっ！」
《なんと、このような場所にご老人が！　ここは間もなく戦場と化すはず。保護せねばなるまい》
《あ……》
村正たちに警告を発する暇はなかった。
老人は一気に距離を詰めると、手にした竹槍を横薙ぎに一閃。前に出ていた真改をはじき飛ばす。

距離を取るため後方に飛んだ村正は、その光景に目を擦りたい衝動に駆られた。
鋼の塊でできているはずの百足の巨体が宙に浮き、先にあった竹を数本まとめてなぎ倒しているのだ。
「貴様らぁぁ！　むぁたっ儂の竹を傷付けおってぇぇぇぇ‼　許すまじっ！」
《今のは明らかに貴方が原因でしょ！》
村正の突っ込みは、老人に届かなかったようだ。鬼の形相を浮かべた老人は、距離を詰めるべく駆ける。
《ヒィッ‼　こっちこないでっ》
竹を器用に上へ上へと登っていくが、背後からは弾丸のごとき速度の竹槍が、串刺しにせんと追いかけてくる。
竹を足場に横へジャンプすることで投げ槍をかわし、地面に着地する村正。しかし、危機はまだ去ってはいない。
「あまいぅわっ！」
地面に竹槍を突き立てる老人。
ぶちっと何かが千切れるような音がしたかと思うと、村正の右前方にあった藪の中から十本あまりも竹槍が飛び出してくる。
《冗談でしょっ》

咄嗟に吐き出した鋼糸で弾き、事なきを得る。しかし、これで窮地を脱したと判ずるのは早計であった。
「まだまだぁぁ！　せやっ」
老人があらぬ方向に竹槍を投げると、その先からはバキッという音が聞こえてくる。
《今度は……上!?　きゃっ》
樹上から落ちてくる岩を避けきれず、村正は地面に叩き落とされた。
すぐさま損傷のチェックを開始し、軽微であることに安堵したのも束の間。背後からは、ゆっくりと近づいてくる人の足音が聞こえてくる。
（ああ、助けて御堂……）
「ふしゅるるる。むぁぁずは一匹ぃぃ」
《またれよ、ご老人。汝の相手は我が致そう、参られよ！》
口上の先にいたのは、頭をもたげた巨大な百足であった。
老人の意識が真改に向いたその時、真逆の方向から女王蟻が接近、攻撃を仕掛ける。
完全な不意打ちと思えた二世村正の攻撃だったが、二本の槍を眼前で十字にすることで、老人はこれを受け止める。
《不覚、加減が過ぎたか》
二世村正の声に苦々しいものが滲む。必中の呼吸で放たれた攻撃は、老人を殺さず行動

不能にしようとしたため、竹でできた槍さえ砕くことができなかった。
だが、劔冑の膂力を考えれば、加減のし過ぎを責められはしない。むしろ老人の反応をこそ、誉めるべきだろう。
「害虫どもぐぁ何度も何度も！　まとめて叩き潰してくれるっっ！」
老人の怒声が再び空気を震わせた。劔冑たちは、老人を取り囲むように三方向へ散る。
(こっちに来ませんように)
などと考えていたのは、果たして村正だけだっただろうか。
緊張に空気が張り詰めていく。
その時、竹林に新たな金打声が響き渡る。
《まていっ！》
《もう、今度は何なの？》
声の方向を見上げれば、藍い異形の天牛虫がそこにあった。
《かような老人を寄って集ってなぶりものにするかのような諸行、たとえ天が許しても、正義の体現者たるこの正宗が許さん！　とう！》
掛け声も軽く、老人を背にする位置に降り立つ天牛虫。
《村正よ、やはり汝は邪悪であったか。邪悪に荷担せし、他の二体も心して聞けい。吾が刃にて諸共討ち滅ぼさん！》

《また面倒なのが出てきたわね……正宗、貴方は空気を読むって言葉、聞いたことないでしょ？》
　的外れな口上を聞いた村正は、心底呆れた様子だった。
《何を訳のわからんことを。そのようなこと、正義を成すことに何の関係があるか》
《まあいいけどね。一応、忠告しておくけど……その位置やばいわよ？》
　その言葉を鼻で笑う正宗。しかし、正宗と対峙する村正には、彼の背後が見えている。彼に降りかかるであろう不幸もまた、しっかりと見えているのだ。
《ふん、邪悪の言葉など、吾が耳に入らグバッ》
　背後から頭部に強烈な一撃を受け、ふらふらする正宗。自分の身に何が起こったのか、瞬時に理解することができない様子だ。
《それじゃ、そのお爺さんとよろしくやってね》
　そう言って身体を反転させる村正。すでに二世村正、真改はこの場を離脱している。
《な、何をなさるご老。吾はその方を助けグフッ》
　背後に正宗の声を聞きながら、村正は駆けだした。
《ま、待てぃ村正……事情を説明せよ！》
《貴方、しぶといわね》
　いくらもしないうちに併走した天牛虫は、背後を気にしながらも村正に詰め寄った。

《邪悪の言葉は耳に入らないんでしょ？　悲しいわね》
《貴様、臨機応変という言葉を知らんのか》
《貴方が使うと便利な言葉ね、それ。まあいいわ》
今は共に追われる身。相憐れもうと、今までの経緯を掻い摘んで話す。
《やはり、貴様たちが悪いのではないか！》
《ここに居合わせたってことは、貴方だって不法侵入のお仲間でしょ？　あのお爺さんから追われる理由としては充分よ、きっと》
《くっ……しかし、そういうことなら話は簡単であろう。話合いで誤解を解けばよいではないか！》
《貴方……あれ見て言ってる？》
背後を探れば、距離は離れていながらも、しっかり後を追ってくる老人の雄叫びが聞こえてくる。
《かーっ、そんなことだから貴様は邪悪だと言うのだ！　相手は無辜（むこ）の一老爺、誠心誠意理を説けば、わかり合えぬはずがなかろうが！》
《あっそう。じゃあ勝手になさいな。言っておくけど、基本的に非はこっちにあるから。話が通じないからってぶった斬ったら『悪』よ》
《誰に向かって善悪を説くか！　無論、わかっておるわ！》

正宗はその言葉を最後に、走る速度を落としていった。
しばらくすると、一人駆ける村正のセンサーが二つの声をキャッチする。
《落ち着かれよっ、吾は味方なり！　吾は味方なり！　ご老は邪悪の手から護られるのだ、恐れるグハッ》
「害虫ぐぅわあああああ！」
《何が……何が起こっておるのだ。吾が正しくないとでも言うのか、ご老グバッ！》
「ーーーーーーーーーーっ‼」
老人の声ならぬ声を最後に、会話は途切れる。
《さようなら、相州五郎入道（そうしゅうごろうにゅうどう）正宗》
村正は、藍色の天牛虫のことを想い、しばし感傷に浸るのだった。

◆◆◆

「因果応報」というべきだろうか。正宗を犠牲に逃走を続けた村正だったが、ついに追跡者に追い詰められようとしていた。
地面にできた僅かな窪地に身を潜める紅の蜘蛛。そのセンサーが敵の接近を察知し、頭の中で警笛を鳴らす。

（ああ……この身を劔冑に変えて幾星霜。このような受難が待っているなんて……）
気配は徐々に近づいている。見つかるのも時間の問題だろう。
「ふしゅるるる……ふしゅる……る……ぐ……」
《来た……御堂、ごめんなさい……》
断てぬ絆で結ばれた仕手に対し、別れの言葉を呟く。絶望の中、脳裏に浮かぶのは、愛する主の、どこまでも不景気な顔であった。
「……で、ここで何をしている。村正」
《……え？》
幻想に浸っていた村正の精神が、現実に引き戻される。
「ああ、先ほど警察に田中老人が発する怒号をどうにかしてくれと、苦情……いや懇願があってな。現場に来たのだが……」
《信じられない……なぜ、ここにいるの？》
そう言った景明は、村正の背後を見つめていた。
「で、なぜその方がそこで倒れているのか、説明してくれ。村正」
景明が向ける視線の先には、泡を吹いて倒れ、ピクピクと痙攣(けいれん)する雷帝の姿があった。

◆　◆　◆

それから数日後の深夜。
《ふぅ、落ち着くわ……》
今日も今日とて紅蜘蛛は、竹林に作った鋼糸の巣でくつろいでいた。
《極楽極楽、やっぱりゆっくりできるって贅沢ね》
《然り、然り》
そう金打声を発しながらのっそりと身を起こしたのは、黄銅色の百足だった。
《あら真改、いたの》
《我らの天敵が動けぬとあれば、今のうちにと思いな》
《田中老人、過労ですってね。あれだけ無茶苦茶な動きをしてれば、当たり前よね》
《貴殿のご母堂殿の話では、やはりあの御仁、精神波の影響で限界を超えて疲労していたとのこと。まだ二、三日は動けぬだろうな》
《そう。一安心ではあるけど、それだけしか猶予がないというのも残念ね。まあ雷帝の帰還までは、この平和をまったりと楽しみましょう……》
《同意……》
沈黙する二体の劔冑。さらさらと夜風に揺れる葉の擦れる音だけが、竹林に満ちる。
《そういえば、貴方はあの後大丈夫だった？　私の方は、御堂に夕方までお説教され

ちゃって……もうあんなに怒られたのは人だった頃以来よ。一条に怒鳴られて萎縮する正宗は見物だったけど》
《こちらも似たようなもの。説教と言えば我が仕手、鈴川令法は普段からやりなれてる。こっぴどく絞られたものよ……》
《それは大変だったわね》
《うむ》
《《はぁ……》》
弛緩しきった二体の劔冑は、同時に息を吐き出した。
再び訪れる沈黙の時間。しかし、今度のそれは長くは続かなかった。
《こんな時間に人間のお客とは、珍しいを通り越して、奇妙過ぎるわね》
センサーが捉えたノイズを確認し、村正は不機嫌そうに一人ごちた。

◆　◆　◆

それは、見るからにガラの悪い男たちの集団だった。
「本当にやっちまっていいんですかい、アニキ？」
「おおう、構わんからドンとやっちまえ」

「でももへちまもあるかいっ。ここの爺さんにゃ、さっさと立ち退いてもらわにゃならんのよ。心残りは綺麗さっぱり灰にしてやろうじゃねえか。な？」

周囲をキョロキョロと警戒する男たち。しかし、彼らは自分たちが見られていることに気づいていない。

現場から離れた場所にある竹藪の暗がりから、男たちの様子を観察していたのは、もちろん、村正と真改である。

《そういうこと、ね》

《放置してはおけぬな》

そう言って、真改は村正の隣から姿を消した。

視線を戻せば、一人の男の手元に、小さな火が灯るのが見える。あれは燐寸（マッチ）だろうか。その明かりを手に、長い棒を持っている別の男へと向き直る。

《ふん、させるものですか》

そう言って鋼糸を吐き出す村正。狙いは違わず、松明（たいまつ）であろう男が持つ棒を、真ん中から二つに切断した。

「な、なんだ。何が起こったんだ？」

「なんだこれ……刀で切られたみたいな断面だぞ」

「お、おい、なんかいるんじゃねえか？」
男たちが狼狽えるのを見て、村正は幾分気分が晴れる気がした。
「おい、いいから油まいて、火つけちまえっ」
「へい……あれ？」
可燃性の何かが入っているであろう容器を傾けた男は、そこで異様な光景を目撃する。
重力に従って流れ出るはずの液体が、凍ってしまったかのように出てこないのだ。
「おい、早くし……ろ……ひぃぃぃ」
さらに、地面に伏して移動していた巨大な百足がその姿を露わにする。その異様を前に悲鳴を上げる男たち。
「ば、化け物だ……に、にげ、にげ、に……ぐへっ」
男の一人が百足に弾き飛ばされる。それを契機に、集団は完全に恐慌状態に陥った。我先にと逃げ出すものが現れる。
しかし、先頭の男が銀色の影に弾き飛ばされたことで、それは阻止されてしまう。
《敵に背を向けて逃げ出すとは何事か》
空を飛ぶ銀色の女王蟻から発せられた声なき声が、男たちの頭に響き渡った。
《貴様らの悪行、断じて見逃すわけにはいかぬっ！　正義の裁きを受けるがよいわっ！》
他方からは藍色の天牛虫が現れ、苛烈な金打声を響かせる。

いつの間にか男たちは、蜘蛛、百足、女王蟻、天牛虫という四体の異形に四方を囲まれる形になっていた。

《さあ、それでは始めましょう》

「いやだーっ！　助けてくれーっ！　ひぎぃぃぃぃ！」

深夜の竹林に男たちの悲鳴が響き渡った。

◆　◆　◆

翌朝、男たちは朝一番で警察署に収監されることとなる。それというのも、気絶した男たちが署の前に、罪状の記された書き置き付きで放置されていたからだった。

現場検証で発見された物的証拠や周辺住民からの証言、またなぜか警察署長の後押しもあり、事件は異例の速度で解決することとなる。

その一方で鎌倉に住む住民たちの間には奇妙な噂が広がっていた。それは、事件現場である竹林に、怪物が住んでいるという怪奇譚（かいきたん）じみた話であった。

噂の火元は、竹林で犯人たちを捕らえたのが異形の化物であったという証言を、犯人自身がしていることにあったであろう。

その後も化物の姿は、周辺住民に度々目撃されており、やれ竹林の守神（まもりがみ）だ、やれ竹林は

魔界に通じており、雷帝はその守人だのと、様々な憶測を呼んでいる。
最近最も人気を集めているのは、雷帝田中老人が魔物を調伏し、使役しているというものであった。
嘘か真実（まこと）か、噂の未確認生物が目撃される回数も増えており、異形のものが徘徊する竹林とそれを統（す）べる雷帝の異名は、人々の間に深く浸透していくのだった。

（第四話・了）

魔法聖女マジカルアベンジャー

第四話　共闘！　二人の聖女

「いい加減、パンツを脱いで降参したらどうかね、大鳥大尉！」
　窓すらない陰気な一室に、男の怒声が響き渡る。
「ここは、ＧＨＱ横浜基地の地下にある一室。今、私たちは、言い掛かりと言っても差し支えない罪状で拘束、尋問を受けているのでありました」
「黙りたまえ、永倉軍属。私は君に発言を許可した覚えはないし、君が身につけたパンツにも興味はない」
　独り言にしては謙虚さの足りない声で喋るさよに、目の前の男――ウォルフ教授は叩きつけるように言った。
「まあ破廉恥な。さよは心に大きな傷を負いました！　賠償を要求させて頂きますよ、ウォルフ教授」

よよよと泣き崩れる真似をするさよを見て、ウォルフ教授はうんざりとした表情を浮かべる。
「だから君は口を閉じていたまえ。私は大鳥大尉と話をしているのだ」
「そうまで言われては、私も引き下がるほかありませんが……しかし、教授。これに話しかけても虚しいだけではございませんか？」
さよが『これ』扱いしたものへと視線を向ける。
「あんまりですわ……何でこんな目に……あんまりですわ……何で……」
この有様だった。
「このような状態の女性と、意思を通わせようという不毛な作業に快感を覚えると仰るのでしたら、私もあえて止めは致しませんが」
夜道で不審人物を見かけた妙齢の女性のような視線を向けられたウォルフ教授は、心底嫌そうな顔をしていた。
「ふむ、確かにこれでは自らパンツを脱ぐこともできないか……よろしい、私も暇ではない。『女性兵士のズボン着用を禁止する規則』についての意見書を早く仕上げねばならんからな。永倉軍属、貴女にお尋ねすることにしよう」
「はい、私めに答えられることでしたら、なんなりと」
ウォルフ教授の意見書は軍属にも適用されるのだろうかと、若干の不安を覚えながら

も、さよは見事に平静を保つ。
「よろしく頼むよ。さて、君たちはあのマジカルアベンジャーとか名乗る痴女が、我らが同胞に暴行を働いた時、現場に居合わせていたそうだね」
「偶然でございます」
鋭い目付きを向けてくるウォルフに、さよは依然として態度を崩さず、簡潔に応えた。
ウォルフ教授が『痴女』と言った辺りで、香奈枝がビクンと肩を震わせた気がしたが、それに関しては見なかったことにしている。だがウォルフ教授の追及はなおも続く。
「わかっているのだよ。君たちがあのマジカルアベンジャーとかいう勘違い女と繋がっているということは。正直に白状したまえ」
「がふっ」
ウォルフの言葉に再び反応を見せる香奈枝。主人の様子を横目で確認し、さよは静かに息を吐き出した。
「何を根拠にそんな言いがかりを仰るのでございましょうか」
「調べはついているのだよ。アレが野木山組とかいう大和のマフィア連中を半殺しにした時も、鎌倉の大番詰所が崩壊した時も、君たちは現場で目撃されている……白状したまえ、あのイカレた女はどこにいるのだ！」
声を荒げるウォルフ教授。その激しい眼差しにさよは違和感を覚え、首を傾げる。

「教授は随分と、あの恥知らずな格好をした女性にご執心な様子ですな」
「さよが着ろと勧めたのに……さよが着ろと勧めたのに……」
「少々鬱陶しいですよ、お嬢さま」
さよと香奈枝のやりとりを無視して、ウォルフ教授は話を続ける。
「執着していると？　ふん、当然だ。あの玩具を作ったのはこの私、プロフェッサー・ウォルフなのだからな」
「なんですと？」
突如明かされた衝撃の事実に、さよは目を見開いた。
「茶々丸君から構想を聞かされた時は、心躍ったものだよ。いったいどんな美幼女が身につけることになるのかと。もちろん、その下着の色、形状、脱がせるところまで想像したさ！　そして、知識、経験、技術……私の全てを注ぎ込んで、あれは完成した……」
「……あまり、常人には共有できかねる感覚ですな。恐れながら、私にはさっぱりわかりません」
恍惚とした表情をしながら針仕事を行うウォルフ教授の姿を想像し、さよは背筋に怖気(おぞけ)が走るのを感じた。
「そう、完成したはずだったのだ！　盗まれることがなければ！　八方手を尽くし、発見したかと思えば、神をも冒涜するかのような魔改造を施され、あんな！　脳内で補正する

こともできないほどの！　デカイ女が身につけている！　君にもこの無念、わかるだろう？」
　ウォルフ教授は机に拳を叩きつけ、無念さを露わにする。
「いえ、残念ながら。同意を求められても困りますなあ」
　呆れた顔をしていたさよだったが、隣から聞こえてくる不気味な声に気付き、そちらへ振り向いた。
「そう、あなたでしたのね……ふふ、ふふふふふふふふ」
　狂気を胎んだ笑いと共に、香奈枝が光に包まれる。
　視界が戻った時、そこにいたのは、外見と全く釣り合っていない装飾過剰な洋服を身に纏い、先にハートがあしらわれた可愛らしいステッキを持つ、復讐の化身だった。
「見るものの正常な精神を狂わせる年齢不相応なその格好、そしてその凄まじいまでの怨念……まさか君だったのか」
「貴方ほどの方が油断しましたな、プロフェッサーウォルフ。すでにアレはお嬢さまの一部でございますよ。お嬢さまに復讐の心さえあれば、どこに居ようと瞬時に装着が可能なのです」
「何だと……そこまで使いこなしているというのか！」
　信じられぬと言うかのように、さよを凝視するウォルフ教授。その彼の肩に女性の手が

置かれる。
「うふうふうふふふふふふふ」
「覚悟はよろしいですか、だそうでございます」
律儀に通訳を行うさよだったが、それを教授が聞いていたかどうか、彼女には確信が持てなかった。
「や、やめろ……やめてくれっ、そんなステッキでそこ……あ……アアアアアアアッ‼」
悲鳴を上げる教授に、さよは黙祷を捧げるのだった。

香奈枝の正気が戻るまでには、少々の時間が必要だった。
「ふう、すっきり……あら、ばあや」
「なかなか刺激的な光景でございました。が、お嬢さま、正気に戻られたのでしたらさっさと脱出いたしましょう」
「ええ、そうね」
顔を見合わせた二人は、長居は無用と部屋を出て廊下を走る。
ここは彼女たちの職場だ。道に迷うこともなく、無事に出口へと辿り着く。しかし、そんな彼女たちを待ち受ける声があった。
《待っていたぞ、マジカルアベンジャー！》

ほど近い倉庫の屋根に佇む銀色の武者。月を背に腕を組むその姿には、全ての頂点たらんと志す王者の風格があった。
「なっ、銀星号ですって！　なんでこんなところに……」
「こ、これは思わぬ難敵が現れましたな」
驚愕に動きを止める二人へ、武者の金打声が届く。
《プロフェッサー・ウォルフを退けるとは見事！　次は、総統の忠実な戦士であるこの光が相手になろう！》
銀星号は、詩を詠むがごとく朗々と宣言する。
《で、この茶番なのだが……本当にやらねばならないのか、御堂》
《うむ、茶々丸に是非に頼まれてしまったからな。しようがない。それに、あの番組に出演する機会を逃すなど、光にはできん！》
ノリノリな仕手に対し、劔冑はなんだかやる気なさげだった。
《それが本音か。だが、いいのか御堂。兄君に知られれば、こっぴどく怒られてしまうと思うが》
《そうだな……茶々丸からはなるべく派手にというリクエストだったが、やり過ぎなければ構うまい》
《御堂がそう言うならば、もはや何も言うまいよ》

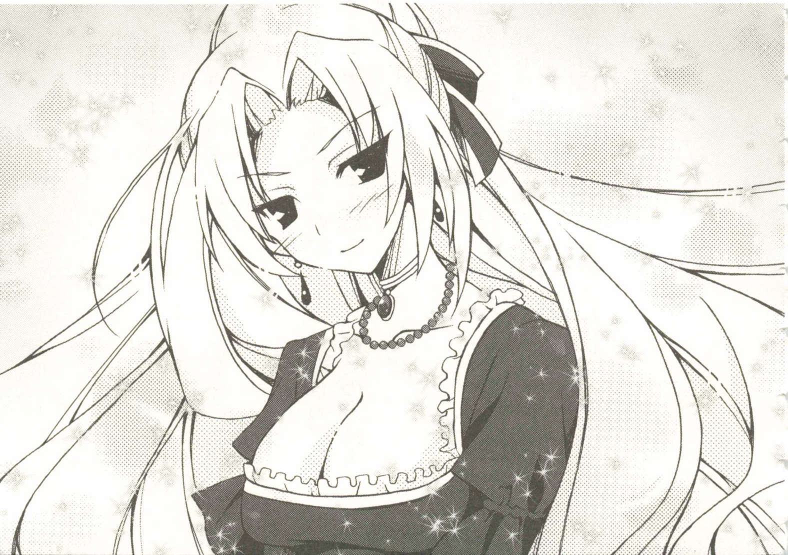
諦めたように劔冑は呟いた。それを合図に武者は戦闘態勢へと入る。しかし……。
《では、いくぞ！　マジカルアベンジャー！　ってどこいった！》
武者が意識を向けた時には、すでに香奈枝たちの姿はそこにはなかった。

《ふざけるな！　出てこい、マジカルアベンジャー！》
「冗談ではありませんわーーー！」
広範囲に発信された金打声は香奈枝にも届いていたが、彼女は構わず逃げ続けている。
ドカーンと言う爆音と共に建物が崩壊する。
この場合、素直に出て行くのは、自殺を決意するのと同じことだった。
《どこだ！　どこにいる！　出てきて光と戦え！》
どんどん増えていく爆発音。破壊されていく基地施設。突如来襲した怪物に、兵士たちは大混乱に陥っていた。
「うわーっ、敵襲ー敵襲ー！」
「さっさと警報を鳴らせ！　はっ？　故障だと！　くっ、司令部に人を走らせろ！　ぐずぐずするな！」
「主力が出払っている時になんてことだ。おい、当直の小隊はどこだ？　出せる劔冑は全て出せ！」

「うわーーーーーー！」
「大丈夫か！　クソッ、メディック！　早く来てくれ、メディーーック！」
被害はどんどん広がっている。
そんな中、怪物に狙われている当人は、建物の影を縫って移動していた。
「調子に乗って！　こうなったらこの一発で仕留めてあげますわ」
遮蔽に身を隠しながら、目標を視認する香奈枝。兵士たちの嘆きに反応したのか、その眼はすでに複眼に変化している。
「マジカル～対戦車～ミサイル！　ファイヤッ！」
必殺の一撃を放つ。着弾。しかし……。
《ふん、この程度で光を落とすことはできん！》
爆煙の中から現れた武者は無傷だった。
「そんなーー反則ですわーーーー！」
再び逃げ出すマジカルアベンジャー。ギリギリのところで、辛くも追撃を振り切ることに成功する。
遠くからは未だ、敵の姿を求める金打声と共に破壊音が聞こえてきている。
「ああ、いったいどうすればいいんですの……」
無力感が彼女を蝕み始めたその時、救いの手は差し伸べられた。

「諦めてはいけません！」
監視塔の屋根から振ってきたその声は、清流のごとき清らかさだった。
「あ、あなたは……ばあや、何やってますの？」
流麗なドレスに身を包んだ美女を見て、香奈枝は素直な疑問を口にする。
「いいえ、私はあのような完璧なる淑女にして忠実なる従者ではありません」
美女の返答を聞いて、途端に視線が冷たくなる香奈枝。しかし、美女はその程度のことで動じず、華麗な立ち姿を崩さない。
一方、周囲に居たのは香奈枝だけではない。ＧＨＱの兵士たちもその声を聞き、姿を見上げていた。
「なんだ、あの美しい女性は」
「女神だ。女神が降臨なされたのだ」
「おお神よ！　どうか我らを怪物の手から救いたまえ……」
その美貌(びぼう)に神々しさを感じたのか、美女を女神と讃(たた)える兵士たち。
「ううう……なんですの、この扱いの違いは！」
その光景を見た香奈枝は、胸の奥から力が湧いてくるのを感じた。
「それでは名乗りましょう。私は鮮血の聖女マジカルブラッディ。貴女に私の力をお貸しします。これをどうぞ」

そう言って彼女が渡したのは、猫耳がついたヘアバンドだった。
「こ、これをわたくしに着けろ……と？　いや、これは……無理でしょう」
「敵が迫っています。時間がありませんので早く！」
　それを着けている自分の姿を想像し、躊躇する香奈枝。しかし、敵はいつまでも待ってはくれない。マジカルブラッディの声を察知した銀星号が、こちらへと向かってきていた。
「これを着ければ、本当に勝てるんですのね」
「ええ、貴女はどんな敵をも粉砕するほどの力を得るでしょう」
　マジカルブラッディの言葉にとうとう決意を固めた香奈枝が、そのヘアバンド



を頭に装着する。しかし、何の効果も現れない。
「……ぷっ」
猫耳姿の香奈枝を見て、マジカルブラッディが思わず吹き出す。
「わ、笑いましたわね！」
湧きあがる羞恥心。マジカルアベンジャーは、自身の内に新たな力の存在を感じる。だがその時、ついに彼女の前へ銀星号が現れた。
《見つけたぞ！　マジカルアベン……うわ……》
《現代の美的感覚というのはよくわからないが……あれはさすがにフォローできぬ》
頭に装飾品が増えたマジカルアベンジャーを見て、動きを止める銀星号。その金打声を聞いて、彼女のボルテージが一気に上がる。
「う、うるさいですわーーーーー！」
彼女の叫びと共に、世界が白く塗り潰される。
それからどの程度の時間が過ぎたのか。視界が戻るとそこに銀星号の姿はなかった。
いや、銀星号だけではない。少し注意深く見れば、彼の劔冑がいた場所を中心に周囲の建物が切り取られたように消滅していた。
しかし、怒りや復讐心や羞恥心など様々な感情に満たされている香奈枝は、それに気付くことはできなかった。

「あ、あんまりですわ……こうなったらこの復讐心、あなたに受け止めて頂きますわよ、マジカルブラッディとやら！」
　未だ感情が鎮まらないマジカルアベンジャーは、その捌け口として目の前の美女を指名する。
「残念ですが、そろそろ時間のようです。私は行かなくてはなりません。ですがご安心なさい。貴女が復讐すべき相手はまだいるはずです。最大の敵が……」
　しかし、マジカルブラッディは優雅に微笑むと、危ない気配を放つ彼女から少しずつ遠ざかる。
「それでは、縁があればどこかでお会いしましょう」
「ま、待ちなさい、さよ！」
　マジカルアベンジャーの制止の声を聞くことなく、身を翻すマジカルブラッディ。
　その後数日、さよは香奈枝の前に姿を現すことはなかった。

（幕間四・了）

四公方編集会議

ぼ同時だった。

声の主である篠川公方大鳥獅子吼は、険しい表情で広間の奥へと歩いて行く。

ここは普陀楽城評定の間。今日は、六波羅の最高幹部『四公方』が一同に会して行われる会議の日である。

本来なら大将領の代理として足利邦氏もこの会議に参加するはずなのだが、心に負った傷から未だ立ち直れず、自室で引き籠もる日々が続いており、本日も欠席となっている。

「よーす、獅子吼。お疲れさん」

彼の姿を見て、年若い少女が気の抜けた挨拶を行った。彼女の名は足利茶々丸。四公方の一人で堀越を治めている。

獅子吼に名を呼ばれた本人であるが、生粋の軍人をも震え上がらせる怒声を受けて、恐れる様子もなく挨拶をするあたり、さすがは天下の六波羅公方と言えるだろうか。

「……で、貴様らはいったい何をしている」

少女を見て、こめかみをひくつかせながら獅子吼は問う。その言葉には、ある感情を抑え込んでいるような、危険な響きがあった。

「何って言われても……なあ、雷蝶」

「うっさいわね。今、考え中なんだから話しかけないで」
隣に座る男の邪険な態度に、へいへいと言いながら肩を竦める茶々丸。彼女が話し掛けた男の名は今川雷鳥。小弓公方であった。
手元のカードを覗き込み、何やらぶつぶつと言っていた雷蝶は、その内三枚を投げ捨て、チェンジを宣言する。
「……いいから答えろと言っているのだ」
再び、同じ質問をする獅子吼。が、やっぱり茶々丸の態度はおざなりだった。
「見てわかんねえ？　ポーカーだよ、ポーカー。ああ、あては二枚ちょうだい、童心坊」
「だから、なぜここで札遊びなどやっているのかと聞いているのだ！」
「なんでって、なあ……暇だから？」
無言で帯刀の柄に手をかける獅子吼。それを見た茶々丸は、両手を上げて降参の意志を示した。
「これこれ獅子吼殿、殿中ですぞ。そのように物騒な気を放ちますな。茶々丸殿も、獅子吼殿が苛立つ理由はわかっておろう？」
そう言って二人に割って入ったのは、古河公方遊佐童心だった。
カードの束を持っていた彼は、それを雷蝶、茶々丸が捨てた枚数だけ配る。
「もう少し待っていてくだされ、獅子吼殿。この勝負が終わったら席を用意致す」

「一緒にやりたいなら素直に言えよなー」
「全くね。いつもカリカリしちゃって、感じ悪いったらありゃしないわ」
「そんなわけがあるか、たわけっ！　なぜ、四公方が集まっての会議の席で、札遊びなどやっているのかと聞いていているのだっ！」
怒り爆発と憤怒の表情を見せる獅子吼。その感情をぶつけられている茶々丸はと言えば、畳の上に寝っ転がり、ことさら面倒臭そうな態度をアピールしている。怒声を浴びても文句は言えないだろう。
「え～、いいじゃん。世の中平和で、あんまり報告するようなこともないし」
茶々丸の言葉に隣で座る雷蝶も頷く。
「そうよねぇ、ここのところ反乱らしい反乱も起こってないし。こんなんじゃ、腕が錆び付いちゃうわ。こんなことならこの前の合同演習、参加しとけばよかったかしら。なんだかすごく盛り上がってたらしいじゃない」
「あーあれね。まあ派手なことにはなってたけど……あてにとっては、あんま実りのあるものになんなくってね……」
その結末を思い出し、ガックリといった感じで俯く茶々丸。当然、今この広間に彼女の元副官、湊斗景明中佐の姿はない。
「はっはっはっ、周到な茶々丸殿には珍しい失策でしたな。男に逃げられ項垂（うなだ）れるなどと

「うう……いつもアレな感じの雷蝶に、よりによって女の魅力を語られるとは、屈辱だぜ……」

「あんたの魅力が足りないのよ。麿のようにビューティでエレガントでなくちゃ」

「いや、これは失敬。天下の堀越公方殿も年相応の女子(おなご)であったか」

畳に「の」の字を書き始める茶々丸を見て、童心はさらに笑みを深くする。

「ううう、真面目にへこんだんだから、あんまいじめるなよな〜、童心坊」

いう愉快な姿が拝めるとは思わなんだ」

いじける茶々丸に、笑う童心、雷蝶。権謀術数が渦巻く政治の中心地であるはずの広間は、暖かな空気に満たされていた……獅子吼のいる一角を除いて。

「貴様ら、いい加減にしておけよ……」

「どうしたのよ、獅子吼。もしかして、篠川で何か事件でも？」

獅子吼のいつもと違う様子に気付いたのか、雷蝶が問う。一方、茶々丸は相変わらずのお気楽ムードだった。

「ないない。たとえあっても、どうせ神経質な獅子吼君が小さなことを気にし過ぎているとか、そんなところだろ？」

茶々丸の言葉を聞いて黙り込んだ獅子吼は、一転口元を笑みの形に歪める。目は笑っていなかったが。

「……篠川はもちろん安泰だ。が、他方で事件がないわけではないぞ、茶々丸。聞きたいか？　忠義に篤い堀越公方殿のこと、当然聞きたいであろう？」

「い、いやあ、別に今はいっかな～、なんて……」

猫がねずみをいたぶるような嗜虐的な笑みを浮かる獅子吼。それを見た茶々丸は、不気味な気配を感じたのか、嫌そうに遠慮の言葉を口にする。

しかし、そんなことで逃れられるほど、大鳥獅子吼の追及は甘くなかった。

「らしくもなく遠慮などするな、茶々丸よ。童心殿にも聞いてもらいたい」

獅子吼は一同を見回して、自身に注目が集まっているのを確認する。先ほどまで一緒に茶化していた雷蝶と童心も、今は興味津々といった様子だった。

「どうやら、この中に公金に手をつけている者がいるようなのだ。覚えがあるのではないか、茶々丸よ」

「おいおい、そりゃねーよ。いくらあてにジョーカーが二枚きてたからってさ」

「貴様はいい加減札遊びから離れろっ！」

なおもシラを切るつもりかと詰め寄る獅子吼。それを押し留めたのは、童心であった。

「どうやら獅子吼殿には、根拠があるご様子。まずはそちらをお聞かせ願えんかな？」

窘められて多少なりと冷静さを取り戻したのか、獅子吼は姿勢を戻すと大きく息を吐き出した。

「実は最近、公費の中に多額の使途不明金があるようでな。今日の会議で皆に確認をと思っていたのだ」
「なんですって？　それ本当なの？」
雷蝶の反応を見て、獅子吼は少し機嫌を上向かせたのか、満足そうな顔を見せる。
「昨今は経費削減だなんだと口うるさい。警察……はどうでもいいが、鎌倉大番までも予算を削られているような状態だ。このような不正を見逃しては、天下に示しがつかんだろう。俺は早急な対応が至当と考えるが」
「ふむ、確かにそれが真実なら獅子吼殿の言う通りであろうが……のう、茶々丸殿？」
一同の視線が疑惑の主に集中する。
茶々丸はというと、獅子吼の言葉を聞いて思考に沈んでいたが、何かに思い至ったのか顔を上げた。
「おー、もしかしてあれかな」
「茶々丸殿、何か思い当たることがおありかな？」
「いや、不正ってのは全然思い当たらないんだけど……なあ、獅子吼。なんか資料とか持ってきてねーの？」
「仮にも貴様らを相手にするのだ。もちろん、抜かりはない。残念だったな」
そう言って、獅子吼は茶々丸の前に紙の束を放り投げる。

「ん、あんがと」
茶々丸は、律儀に礼を言いながらそれを拾い、目を通す。しばしの沈黙の後、顔を上げた彼女は、にんまりと笑みを浮かべていた。
「これ、『マジアベ』関係の出費だわ」
「なに？」
突然現れた意味不明の単語に、思わず聞き返す獅子吼。
「おいおい知らないのかよ『魔法聖女マジカルアベンジャー』。ちょっとショックだわー」
不満げな顔の茶々丸。しかし、獅子吼には茶々丸の言葉がやっぱり理解できない。
「テレビでやってるあれよ、あれ」
そんな二人の様子を見て、助け船を出したのは雷蝶だった。しかし、それに対しても獅子吼の反応は冷たい。
「知らんな。そんなものは。大体のんびりとテレビを眺めている暇など、我らにはなかろうが。もしや、貴様らテレビなんぞにうつつを抜かし、自分たちの責務を疎かになどしておらんだろうな？」
四方の重要地を任された公方に対する責任は重く、それに伴って多忙でもある。個人の時間などほとんど取れないのが現実だ。この会議の後も、獅子吼のスケジュールは分刻みで詰まっている。他の公方も同じようなものだろう。

　まあ、彼の場合、個人の時間を持てないというよりも持たないと言った方が正しいのかもしれない。座ってテレビを見ている時間があるなら、兵の調練にでも使った方が有意義だと考え、実行してしまうような生真面目な性格なのだ。

　なおも不満げな様子が変わらない獅子吼に、わかってないなとでも言うかのように溜息を吐く童心。

「そうは言うがな、獅子吼殿。時間というのは自分で作るもの。予定表に穴が空くのを期待しているようでは、いつまで立っても自由に使える時間などできますまいよ」

　童心の言葉を聞いて、茶々丸と雷蝶も同意を示す。

「そうそう、いいこと言うなぁ童心坊は。それにたかがテレビって言うけどな。あれで馬鹿にしたもんでもないんだぞ？」

「そうよね。世間の流行や風聞を集めるのにも意外と役に立つし。獅子吼もちゃんとアンテナ立てとかないと、いざって時に困るわよ」

「たわけ。そんなものが戦の何に役立つと言うのだ」

「ぷっ、こりゃ重傷だな。おまえ、そんなんじゃ好きな人ができた時とか困るぞ～。話題が見つからないとか、彼女に何を贈ったらいいかわからないとか」

「そうでござるなぁ。たとえば野花を摘んできて、貴女が好きだと聞いたもので……などと純情ぶるのは、獅子吼殿のキャラでは有り得まい。まあその歳で、んな青臭いことをさ

れたら、それがし悶絶してしまうが」
「おほほ、獅子吼に限ってそんなことするはずないじゃありませんか。政略結婚した相手と殺し合うとかの方が、らしいでしょ。もう、童心様ったらお茶目なんだから……て、どうしたのよ、獅子吼」
笑い合う三人の輪から一人外れた獅子吼は、何だか居心地が悪そうだった。
「……何でもない。それで、その『マジアベ』とやらが何だというのだ」
獅子吼は、脱線した話題を元に戻そうと試みる。
「あれ、制作してんのうちなんだよねー」
茶々丸の言葉に凍り付く獅子吼。しかし、それも数瞬の間だった。
「貴様がどんな奇怪な事に金を費やしているかは知りたくもないし、勝手でもあるが、公費に手をつけたとあっては見逃すことなどできん」
あくまで弾劾する姿勢を崩さない獅子吼。それに対して、責められる側の茶々丸は苦笑いを浮かべている。
「勘違いすんな。『うち』ってのはあて個人を指してるんじゃない。もちろん、堀越のことでもねえ。六波羅ていう意味だ」
「……は？」
再び凍り付く獅子吼。それは気にせず茶々丸は続ける。

「番組の最後にだって、ちゃんと『この番組は、六波羅幕府の提供でお送りしました』って言うんだぞ。な？」
「ええ、あれはある意味、感動ものよね」
雷蝶の同意を得て、嬉しそうな茶々丸。一方、話題に乗り遅れ続けている獅子吼は、言い知れぬ疎外感を感じずにはいられなかった。
「なぜそんなことになっているのだ！」
「あら？　茶々丸、あんた獅子吼に言ってなかったの？」
「だってさー。反対すんの目に見えてるし、めんどくせーじゃん」
あんまりな言われように絶句する獅子吼。そんな彼を不憫（ふびん）に思ったのか、童心が話を補足する。
「実は、すでにそれがしたちは承知しておってな。いや、獅子吼殿にも連絡が行っているものだとばかり思っておったのよ」
不満げに問う獅子吼。彼は相変わらず不機嫌そうな様子であったが、感情の成分内訳は、先ほどとは少々趣がことなるようだ。
「くっ……知らされていなかったというのは腹立たしいが、他の二人が了解していたというなら致し方ない。不正の言は撤回しよう」
「いや〜、あても悪かったよ。獅子吼だけ除け者にしたみたいになっちゃってさ」

手をひらひらと振りながら、あくまで気楽に言う茶々丸。しかし、今度は雷蝶が獅子吼にからむ。

「あらあら、仲間外れにされて拗ねるなんて、冷酷非道で鳴る大鳥獅子吼にも可愛いところがあるのね」

「黙れオカマ」

「誰がオカマよ！　麿は別に同性愛者でも女装趣味でもないわ。口調だけで判断しないで頂戴！」

青筋を浮き立たせて反論する雷蝶。彼に拘りがあるのは獅子吼も知っている。それでもその部分を指摘するのは、仲がいいのか悪いのか。

「そうそう。失礼だぞ獅子吼。雷蝶は同性愛者じゃなくて自己愛者なんだから」

便乗して茶々を入れる茶々丸だったが、意外にも雷蝶は満更でも様子だ。獅子吼への怒りもすでにどこかへ行ってしまっている。

「うっさいわね～。まあ否定はしないけど、麿が好きなのはあくまで『美しいもの』よ。そのカテゴリーの中に、自分という何者にも代え難い存在が入っちゃってるんだから、しようがないじゃない」

「つまり、平たく言うと変態ってことでいいんだな」

「異議な～し」

「異議あるわよ！　ありまくりよ！」
断定する獅子吼に賛成票を入れる茶々丸。
しかし、やはりというか雷蝶は、この認識がお気に召さないようだ。
「これこれ、お二方とも変態というのはちと言い過ぎであろうよ」
「さっすがは童心様！　わかってらっしゃるわ」
「まあ、多少美的感覚が常人とズレていることは否めぬであろうが」
信頼する童心の嫌らしい笑顔を見て、狼狽する雷蝶。
「ちょ、それどういう意味です、童心様！」
「面倒だ。もう変態でいいだろう」
「賛成～」
「嫌って言ってるでしょ！」
「まあ、それはともかくとしてだ。そもそもどうしてテレビ番組の制作などという話になったのだ？　答えろ、元凶」
「流すんじゃないわよ！」
雷蝶を無視した獅子吼の視線の先にいるのは茶々丸だった。
「あ～ん？　決めつけるなんてひで～な、この野郎。さっきまでみたいにまた的外れな推測で、いたいけな少女を貶めるんですかね？」

元凶と言われたのが気に食わなかったらしい茶々丸は、先ほどまでの獅子吼の態度を持ち出し、反撃する。
しかし、獅子吼はすでに終わったことと気にした様子もなく、平然としたものだった。
「根拠など、普段の様子を知っていれば充分だろうよ。このようなくだらんことを考えるのは、貴様しかいまい？」
「はっはっはっ、説得力に満ちあふれておりますな」
「ま、実際のところ、企画出したのはこの子だしねぇ」
すぐさま賛同の意を表明する童心と雷蝶。三人を相手に回しては、茶々丸も素直になるしかなかった。
「おめーらもノリノリだったじゃねえか。まあいいけどさ。えっと理由は広報活動の一環だな。メディア戦略ってやつ」
「くだらん」
言下に否定する獅子吼。その様子に、再び茶々丸の機嫌が傾いていく。
「ああん？　おまえ、マスメディアの力を知らないな？　内政も安定してる今、イメージ戦略って大事よ？」
「うむ。それにある程度、生活に余裕が出てきた民は、次に娯楽を求めるもの。エンターテインメントに目をつけたのはなかなかの慧眼と、それがしなどは思うが」

茶々丸の言葉に、芸能関係に造詣の深い童心も同意する。
「競技用劔冑もそうだけど、大衆娯楽っていうのは多くの人を引きつけるわ。ストレスの発散にもなるし、民衆の不満を抑えるのにも優秀な手段よ」
「お～、雷蝶もたまにはいいこと言うな。それに比べて獅子吼は頭が固い！　コレに理解力で負けてるとか恥ずかしいぞ」
「どういう意味よ、それ！」
「ちっ！　確かにそうだな」
「ちょっと！　獅子吼まで何よ！」
比べられた獅子吼にまで裏切られ、驚きの声を上げる雷蝶。しかし、それを気に掛ける者は誰もいなかった。
「まあ、言いたいことはわかった。番組制作というのも百歩譲って良しとしよう。しかし、いくら何でも金を掛けすぎではないのか？」
再び疑問を口にする獅子吼に、茶々丸は訳知り顔で応える。
「いやいや、良い物を作るには予算が必要なのよ。これくらいは許容範囲内でしょ」

競技用劔冑　装甲競技での使用を目的として作られた数打劔冑。低空における速度と機動性に能力を特化されている。反面装甲は極めて薄く、武装を持たない。

「正気か？　これだけあれば連隊が新設できるんだが……」
「いいだろ別に。相対的に見て一番金出してるのは堀越なんだし」
堀越の地は、他の四公方たちの領地に比べ、目覚しい経済発展を遂げている、関東でも有数の豊かさを誇る土地だった。
税収も安定しており、六波羅にとって欠くことのできない経済基盤となっている。
「それにこれでも、がんばって削った額なんだぞ？」
「ほほう、具体的なところを聞いてよろしいかな、茶々丸殿？」
「そうね、いろいろ任せっきりで細かいところは麿も知らないし、興味あるわね」
二人にも興味を向けられ、茶々丸は応える。
「ん～、たとえばマジカルアベンジャーの装備を削ったり……」
「そういえば、なんか嫌に地味な感じになってたわね。ステッキと洋服、後は……猫耳？麿はもうちょっと見栄えの良い物を提案したはずだったのだけど」
「主役の衣装関係は確か雷蝶殿がデザインしたのでしたな」
「そうなんですよ、童心様。時間が足りなくてちょっと物足りない出来だったんですけど……あ、写真あるけど見る？」
自分の関わった部分に水を向けられ、雷蝶は嬉しそうだ。懐に忍ばせていた写真を取りだし、獅子吼に渡すところからもそれは伺えるだろう。

「これ、か……？　そうだな、貴様の脳味噌から出てきたというなら納得もできる……」
写真を見た獅子吼はあまり誉めているようには聞こえない単語を使って口を濁す。一方、茶々丸は別の意見があるようだった。
「あてはなかなかいいと思ってるよ。かなり色物になっちったけど、主役ってのはインパクトが大事だからさ」
「そういうものか……？」
意外と真剣な茶々丸を見て、少し意外そうな獅子吼。彼には茶々丸の言っていることが、感覚的に理解できないようだった。
そこら辺はセンスの問題と理解している茶々丸は、気にした様子もなく話を続ける。
「あと削ったとこっていうと……配役かな。ほとんど一般人使ってるしね」
「ちょっと……まさか、一話に出てきた野木山組ってお金払ってないの？　もしかして、二話のＧＨＱ兵士も？」
雷蝶の反応に、よくぞ気付いたとでも言うように、満足そうな笑みを浮かべる茶々丸。
「そうそう。あと、大番の詰所も勝手に使ってるし、ＧＨＱの横浜基地もな」
「はっはっは。まあ普通は許可など下りないでござろうな」
「でもかなりいい絵が撮れてただろ？　撮影班忍び込ますの、苦労したんだわ。知り合いの伝手利用してさ」

一同の驚く様子が見れて、愉しそうな茶々丸。雷蝶など開いた口が塞がらないといった感じだ。

「恐ろしい人脈ね……まさか、あの銀星号も本物……なんてことはないわよね？」

「横浜基地が襲撃されたという情報があったが……そうか、貴様の仕業だったか」

雷蝶の話を聞いて眉をひそめる獅子吼。彼の掴んでいる情報では、横浜基地はほぼ半壊といった被害を出している。基地機能を完全に取り戻すには、かなりの時間と金を必要とするだろうことは、想像に難くない。

「はっはー。敵の戦力も削れて一石二鳥だったろ」

「お、恐ろしい子ね、あんた」

「では、この巨額の資金は何に使ったのだ？」

驚きから立ち直ったところで、話を戻す獅子吼。茶々丸も機嫌良くそれに応える。

「まずマジカルアベンジャーの装備かな。あれ、かなり特殊な仕様だったから。後はほとんどが最終話の仕込み。こっちはまだ未放送だから、詳細は勘弁しといてよ」

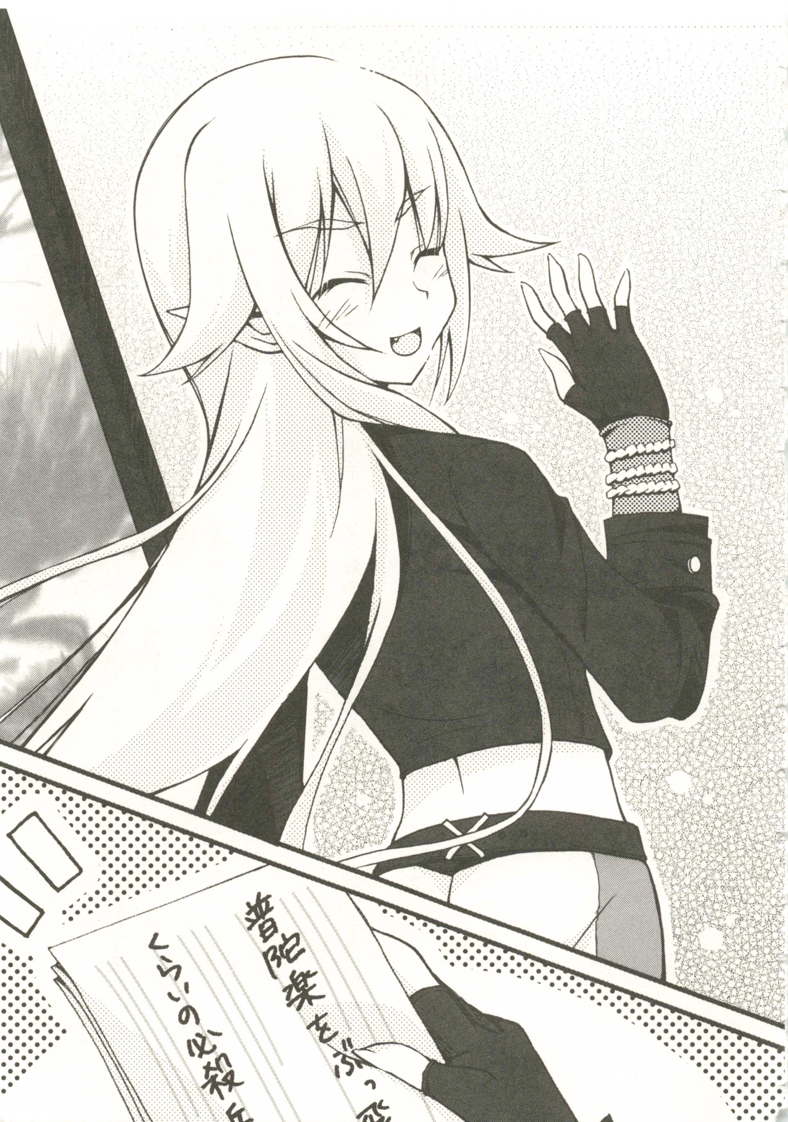
茶々丸の顔は、いたずらを企む幼子のようだった。

「ふむ、この額を一点に集中させた？　普陀楽城を改造などしていないでござろうな、茶々丸殿」

「あ！　それも面白かったかもな。先に言ってくれよ、童心坊」

「はっはっはっ、冗談のつもりであったのだが、いや藪蛇(やぶへび)であったかな。それにしても、その反応は空恐ろしいものがありますな」
「ちょっと、頼むわよ。他に変なことしてないでしょうね？　関東崩落とか嫌よ？」
「馬鹿が、そのようなことができるわけなかろう。しかし、そうだな……秘密基地を作って改造人間の開発とかはどうだ？」
「お、獅子吼もノってきたね。それもチョイスが特撮系とか、正に男の子って感じだ」
同好の士を見つけた趣味人のような反応をする茶々丸。一方、獅子吼も彼女のそんな様子を見て、満更でもなさそうだった。
「まあな。幼い頃は、よく正義の味方ごっことかしたものよ。これでもいろいろこだわりもあってな……」
「ああ、もういいや。聞いてないから」
燃え始めた趣味人の心の火は、しかし、すぐに水をかけられてしまう。ガックリしている獅子吼を見て、茶々丸は心底愉しそうだった。
「まあ、最終回は期待してくれていいよ。実は、撮影これからなんだけどさ。ド派手にいくつもりだから」
「ほほう、それは今から楽しみですな」
「ここだけの話なんだけど、実はあても出演する予定なんだよね～。へっへ～、羨ましい

だろ？」
「マジ？　あんたみたいなちんちくりんを出すんだったら、麿を出しなさいよ。この肉体美、絶対テレビ映えするんだから！」
そう言ってポージングを決める雷蝶。
「そんなもの誰が見たがるか。馬鹿も休み休み言え」
「な～んですって～！」
睨み合いを始める二人に、童心はやれやれといった様子で肩を竦めた。
「まあまあ、お二方とも落ち着いて。それで、放送日はいつでしたかな？」
「ああ、それに関しちゃ後で連絡してやるから。獅子吼も見逃すんじゃねえぞ？」
茶々丸は、獅子吼に指を突きつける。
「ふん、仕方がない。時間を取ってやる」
釘を刺された獅子吼は、嫌々と感じの表情を作って応じた。しかし、その口元は僅かに歪み、内心を隠しきれてはいない。その様子に気付いた雷蝶は溜息をついた。
「あんたも素直じゃないわねぇ」
「ふん」
心の内を見透かされたのが気に食わなかったのか、獅子吼は顔を背ける。それでも言葉を続けたのは、やはり機嫌がよかったからか。


普陀楽をぶっ
くらいの必殺

「せいぜい面白い番組になるよう、がんばるんだな」
「うん、楽しみにしてろよ。そんじゃ、あては準備があるから、これで失礼するわ」
立ち上がった茶々丸は、元気にそう言うと、評定の間を出て行った。
「騒々しい娘ねぇ。あら、何これ……」
雷蝶は、彼女が座っていたあたりに残された紙に気づき、拾い上げる。
「ほほう、これはこれは……」
「なんだこの武装は……移動要塞か？」
それは、様々な兵器を満載した巨大な絡繰りの設計図だった。
さらに紙の端には茶々丸の指示らしきものが書かれており、それを見た三人は思わず顔を見合わせる。
そこには『普陀楽をぶっ飛ばせるくらいの必殺兵器！』と書かれていた。

（第五話・了）

銀星号を退け、からくもＧＨＱ横浜基地を脱出した香奈枝。しかし、彼女の戦いは、まだ終わってはいなかった。
「覚えておいででしょうか、お嬢さま」
「さよ……あなたはよくもわたくしの前に姿を……」
絞り出すようにそう言う香奈枝の手には、猫耳ヘアバンドが握りしめられている。それを見ただけで、さよは自分の危機について正確に把握した。
「お待ちくださいませ、お嬢さま。私は、潔白でございます」
さよは、懇願するように香奈枝を見上げた。その瞳には、愛する主人に嫌疑を掛けられた従者の悲哀が映し出されている。
「考えてもみてくださいませ。マジカル

ブラッディなる勝利の女神にして超絶美女と誤られるなど、この老骨には荷が勝ちすぎるというもの」

さよの弁解を香奈枝は鼻で笑い、小馬鹿にするように肩を竦めてみせた。

「わたくしたちが何年一緒にいると思っていますの？　どう見てもあの顔は、あなたが劔冑を使って若返った時の顔ではないの！」

叩きつけるように言い放つ香奈枝に、さよは一転、面白い冗談を聞いたとでも言うように笑みを見せる。

「いやいや、お嬢さま。あのように神々しくも慈愛に満ちた美の化身のごとき女性と同一などと言われては、如何に私といえど照れずにはいられません」

言葉とは裏腹に、さよの表情は満更でもなさそうだった。

「過剰な自己賛美を利用して、わたくしが誉めているかのような演出をするなんて、なんて恐ろしいばあや……これが自作自演乙というものなの？」

香奈枝の怒りは収まらないようだったが、さよは至って冷静である。

「何をおっしゃいますか。それはお嬢さまの強すぎる復讐心が、清楚にして可憐な女神の美しさを嫉妬するあまり引き起こしている、誤認識というものでございます。しっかりしてくださいませ」

「白々し過ぎますわ！　ああ……わたくしの中で大きくなるばかりのこの復讐心。いった

いどこにぶつけたらいいの？」
早くも臨界寸前といった様子を見せる香奈枝。そんな彼女を見て、さよは未熟な彼女の様を慈しむような表情で溜息をついた。
「恐れながら、思い出してくださいませ、お嬢さま。あの変態教授が語っていたことを。まだ大きな獲物が残っているのではございませんか？」
「獲物……？」
思わせぶりな言葉に、しばし考えに沈む香奈枝。そして、目を見開いた彼女は歓喜の叫びを上げる。
「思い出しましたわ。『茶々丸君から構想を聞かされた時は、心躍ったものだよ。いったいどんな美幼女が身につけることになるのかと』なんて、ふざけたことを言ってやがりましたわね」
「さすがはお嬢さま。昨日食べた朝食の内容は覚えていなくとも、獲物の名前はお忘れになりません。さよは感服致しました」
さよは優雅に頭を下げ、主人に敬意を表す。しかし香奈枝は、そんなものに興味はないといった様子で、不気味な笑い声を上げている。
「く、くくくく……そう、そうでしたわね。全ての元凶は、今までわたくしが被った不幸の源泉は、あの小娘！　これは、心を込めた礼を返して差し上げなくては、失礼に当た

りますわ。ねえ、ばあや」

「まことにそうでございますな。受けた恩も仇も忘れず、必ず返そうというその心意気。恐れ入りましてございます」

新たな標的を見つけ、活き活きとし出した香奈枝を見て、さよは自分への嫌疑が逸れたのを確信し、にやりと笑った。

「さよの調べでは、目標は政務で普陀楽山塞に逗留（とうりゅう）している模様でございます。これはすぐにお伺いせねばなりませんな、お嬢さま」

「さすがはさよ、抜かりはないわね。それじゃ、カチ込むと致しましょうか」

こうして復讐の聖女は、加虐的な期待感で胸を膨らませながら、最後の戦場へと向かうのだった。

「で、内部への潜入に成功した訳ですが……ここから如何いたしましょうか、お嬢さま」

数人の警備兵をマジカル的な力で暴力的に昏倒させ、誰に見られることなく城壁を乗り越えた香奈枝とさよは、無事、普陀楽山塞の敷地内へと潜入していた。

彼女たちが今いるのは、敷地内に設置された案内板の前。そこには、大きく『六波羅へようこそ！　普陀楽山塞案内板』と書かれており、山塞の全景と主要な建物の配置などが可愛らしいイラストと共に描かれている。

「そんなもの決まっていますわ。もちろん、愛しいあんちきしょうの居場所を突き止め、このステッキを頭蓋骨の中に突っ込みに参ります」
笑みを浮かべながら彼女が掲げたのは、お馴染みのステッキ。先端にあしらわれたハート型の装飾は、先ほど警備兵を排除する際に使用したことで、すでに血に塗れている。
「あの子は、いったいどんな声で鳴いてくれるかしら……うふふ、うふふふふふふ」
「恐れながら、お嬢さま。我々は今、敵地に潜入している身。そのように憚ることなく笑われては……」
自分の世界に入り込み、周囲が見えなくなっている主人をさよが窘める。しかし、その忠言は、少々遅きに失した。
突如聞こえてくるファンファーレの音色。そして、彼女たちのいる場所からほど近い塀の上を、監視塔からのスポットライトが照らし出す。
「くくく、はーっはははははは！　待っていたぞ、マジカルアベンジャー！」
「あ、あなたは！」
スポットライトを浴びながら、彼女たちを見下ろして高笑いを上げるその人影を見て、さよは驚愕の声を上げる。
「そう、あてこそ結社の大首領、キングライガーだ！」
大仰な甲冑を纏った茶々丸がマントを翻すと、その背後に立ち上る爆煙。天守閣をバッ

クにするロケーションを選んでいるところにもこだわりが感じられる。
「……あちらの方、ノリノリですわね」
「……怖いものを知らぬ年頃なのでございましょう」
一方、彼女を見上げる形になっている二人のテンションは急下降。冷え冷えとしたものになっていた。
「おーい、素で返すんじゃねーよ」
香奈枝たちの反応に、素に戻る茶々丸。しかし、それも一瞬。すぐに状況を思い出し、表情を改める。
「大した芸人根性でございますねぇ」
さよの呟きは、茶々丸には届かなかった。
「ごほんっ、あー、まんまと誘い込まれてくれたな、マジカルアベンジャー！　貴様さえ倒れれば、この鎌倉にあての野望を阻む者はいなくなるのだ！」
あくまでノリを継続するキングライガー。そのいじらしい姿に、香奈枝のテンションも上がっていく。
「あらあら、勝手を言ってくださいますわね、小娘が……まあいいでしょう。何を喋ろうとあなたの運命は、もはや変わりませんから。そう、わたくしの復讐の贄となる運命は……くくくくくく」

「うぉ、聖女とか言っときながら、何と邪悪な気。そして公序良俗に対して反抗心むき出しのその格好！　我が部下、プロフェッサーウォルフや銀星号を退けただけのことはある。正に存在自体が害悪！」
「いちいちうるさいですわよ！」
　香奈枝が反応を返してくれたので、悪の総統はちょっと嬉しそうだ。
「マジカルアベンジャーよ、確かにおまえは強い。しかし、はたしてこいつの相手を務めることができるかな？」
「なんですって？」
「さあ姿を現すがいい。結社の総力を上げて創られた決戦兵器『荒覇吐(あらはばき)ＭＲ―２』よ！」
　茶々丸の声に呼応して、天守閣の近くにあった建物が地面に沈んでいく。そこに残された巨大な穴から、ゆっくりと浮上してくるものがあった。
「な……でかい！」
　全貌を現したそれは、全高が天守閣の屋根にも届こうかというほどの巨躯を持つ、武者であった。
「さて、いくぜ。痴女は消毒だ！」
《オーケーボス。メガ竜気砲(りゅうきほう)、ステンバーイ》
　胴体にある砲口に不気味な光が灯る。それは徐々に強さを増し、眼に痛いほどの輝きへ

と成長を遂げる。

「てーーー！」

轟音と共に砲門から光の帯が伸びる。それは香奈枝たちの頭上を越えて、城壁へと直撃。巨大な穴を穿（うが）った。

「は、反則ではありませんの……？」

「同意して差し上げたいのはやまやまなのですが……このようなものを用意してくるとは、さよは些かあの方を舐めていたようでございます」

目の前に現れた衝撃的な光景を、呆然と眺める香奈枝とさよ。そんな彼女たちを目にして、茶々丸は再び高笑いを上げる。

「ふはーはははは、どうしたマジカルアベンジャー。まだまだこれからだぞ？　次弾準備……てーーー！」

「じょ、冗談じゃありませんわ！」

砲撃の気配に逃げる香奈枝。再び発射された光は、案内板のあった辺りを直撃。一帯にあったものを炭に変えた。

「当たんないかー。よし、全砲門開け！　景気よくどんどんいけーー！」

その命令を合図に、次々と必殺の光線が放たれる。細かい狙いをつけていないのか、光線はさながら制圧射撃のように城内へと降り注ぎ、壁を、道を、施設を破壊していく。

「ぬおおおお、あ、危なかったですわ」
「凄まじい出力でございます。如何にマジカルアベンジャーと言えど、あれの直撃を受けては、持ちますまい」
近くに飛んできた光線をからくも回避した香奈枝たちは、破壊の権化のごとき巨大な武者を操る、茶々丸を仰ぎ見る。
「おいおい、ちゃんと狙えよ！　おいコントロールルーム、どうした……あん？　制御が効かない？　ふざけんなっ！」
虚空に向かって怒鳴っていた茶々丸は、香奈枝たちの視線に気付くと、愛想笑いを浮かべた。
「あーあて、ちょっと用事思い出したから、おまえらで後はよろしくな」
「な、無責任にもほどがありますわよ！」
「いや～あても最後まで付き合いたいのはヤマヤマなんだけどさ。ほら、こう見えて公方って忙しいんだよ……てわけで、あとよろしくっ！」
そう言って身を翻した茶々丸の姿は、あっという間に見えなくなってしまった。
「逃げましたわね……」
「逃げましたな……で、あれはどう致しましょうか、お嬢さま」
茶々丸がいなくなってからも、状況はさらに悪化していった。

巨大武者の攻撃には、敵も味方もない。武者の凶行を止めるべく、六波羅武者たちも出撃しているが、強力な弾幕と見た目に違わない強固な装甲により、有効な攻撃はできていない。それどころか、続々と被害が出ている。
「……なんとかしなくてはなりませんわね」
付近に墜落してきた六波羅武者を見ながら、香奈枝は言った。
「しかし、あれに近づくのは些か骨が折れますな。如何致しましょうか、お嬢さま」
「さすがに吶喊(とっかん)というわけにはいきませんわよね……遠距離から攻撃するにも、無策に出れば狙い撃ちですし」
《……囮(おとり)がいれば……いいのか？》
その声は、先ほど撃ち落とされた六波羅武者が発したものだった。
「あなた……大丈夫なんですの？」
香奈枝が気遣うような声で語りかけるのも、無理からぬことだろう。
見れば、脚部は黒く変色して炭化しており、合当理も全壊。騎航することは不可能だろう。その様子から、内部の仕手も重傷を負っているのではないかと、容易に想像が付く。
《俺のことは……いい……あんたにはあれを……倒す手段があるのかと聞いているんだ》
苦しげに問う武者に、香奈枝ははっきりと頷いてみせる。
香奈枝には、それを見た武者が微笑んだように感じられた。

《各部隊に告げる……各騎連携して巨大武者に攻撃しろ……倒す必要はない、注意を引きつけるんだ》
六波羅武者が発した声は、香奈枝たちに向けられたものではなかった。
武者が金打声を発した直後、六波羅武者たちの行動に変化が起きる。
「あれをご覧ください！　勇猛なる六波羅の将兵たちが、お嬢さまに血路を切り開こうと無謀な突撃をしております」
さよの視線を追って戦場を見つめる。
先ほどまで闇雲に戦っていた六波羅武者たちは、互いに連携を取りながら一撃離脱を繰り返していた。有効な打撃を与えることができている訳ではない。しかし、そこからは武者たちの『陽動』を行うという確たる意志を見て取ることができる。
「あなた……」
香奈枝の呟きが届いたのか、六波羅武者が暴れ回る巨大武者を指し示し、弱々しい声を発する。
《行け……必ず勝てよ……》
その言葉を最後に、武者の腕は力なく地面へと落ちた。
それを見届けた香奈枝は、決意を込めて頷いて見せる。武者の目はそれを確認できていなかったかも知れない。しかし、香奈枝はそれが無駄な行為だとは思わなかった。

振り返れば、猫耳バンドを捧げ持つさよの姿が目に入る。香奈枝は、それを無言で受け取ると躊躇なく身に付け、走り出した。
注意を引かないように、遮蔽に身を隠しながら進む香奈枝とさよ。その耳には、戦場に近づくにつれて、六波羅武者たちの声が届くようになっていた。

《くっ……いつまで続ければいいんだ。このままじゃ持たないぞ》
《弱音を吐くな、馬鹿野郎が！　これは部隊長が残していった命令だぞ。勝算は必ずあるはずだ》
《まだだ、俺たちは負けねえぞ！　単騎で突っ込むな！　各隊連携して行動しろ！》
《退くな、勇猛なる六波羅武者たちよ！　ここが勝負の分かれ目ぞ！　仲間の屍を踏み越えて進め！》

一騎、また一騎と数を減らしていく六波羅武者たち。
彼らに巨大武者の注意が向いている間に、香奈枝は目的地である建物の屋根へと辿り着く。周囲の建物に比べて一際高いその場所からは、普陀楽山塞を一望することができた。
「さて……わたくしの復讐心をすべてぶつけてやりますわ！」
そう言って、香奈枝は手にしたステッキを構えた。軽い音を立てながら、ステッキが形

を変えていく。
「ステッキ、ゴスロリ、そして猫耳……お嬢さまは、とうとう魔法聖女の持つ力の最奥に到達なさったのでございますね」
　感無量といった体のさよの言葉も、香奈枝の耳には入らなかった。
「充填率五十……七十……九十……」
　香奈枝――マジカルアベンジャーへ集まっていく、六波羅武者の……いや、普陀楽山塞にいる全ての人間の嘆きの感情。彼女の中で荒れ狂う力の奔流へと変わったそれを、そのままステッキに蓄積させていく。
「……百……百二十！　臨界突破でございます、お嬢さま」
「喰らいなさい！　マジカル～アトミック～バズーカ！」
　ステッキから射出されたのは、巨大な光球だった。光球は時を追う事にスピードを増し、巨大武者へと直撃する。
　その瞬間、全てが光に包まれた。

◆　◆　◆

　数日後。景明は、自宅で昼食後のお茶をまったりと飲んでいた。

傍らには、いつかと同じようにテレビを見る妹の姿がある。違いと言えば、家の奥から破壊的な騒音が聞こえてこないことだろうか。

テレビから届く音を環境音楽としながら、景明はゆったりとした気分で新聞を広げる。

「む……」

新聞の一面を見て、景明は呻きを上げた。そこには、先日起こった普陀楽山塞消滅の記事が掲載されている。

「あら、相変わらずそれが一面なのね」

「事の大きさを考えれば致し方あるまい」

隣から新聞を覗き込んだ村正に、景明は言った。

その事件が起こったのは数日前のこと。普陀楽山塞に『マジカルアベンジャー』なる狂人が潜入し、テロ行為を行ったのだ。

それによって引き起こされた爆発により、被害が出たのだが……その規模は尋常なものではない。普陀楽城塞は敷地の八割が、文字通り消失。さらに、被害は山塞に隣接した市街地にまで広がっており、爆心地を中心に巨大なクレーターが穿たれている。

この事件による経済的被害は計り知れないものがあった。しかし、死亡者が全くいなかったというのは、神の奇跡か悪魔の仕業か。どのような手段を用いればあの規模の爆発でそんな芸当が可能なのか、景明には想像も付かなかった。

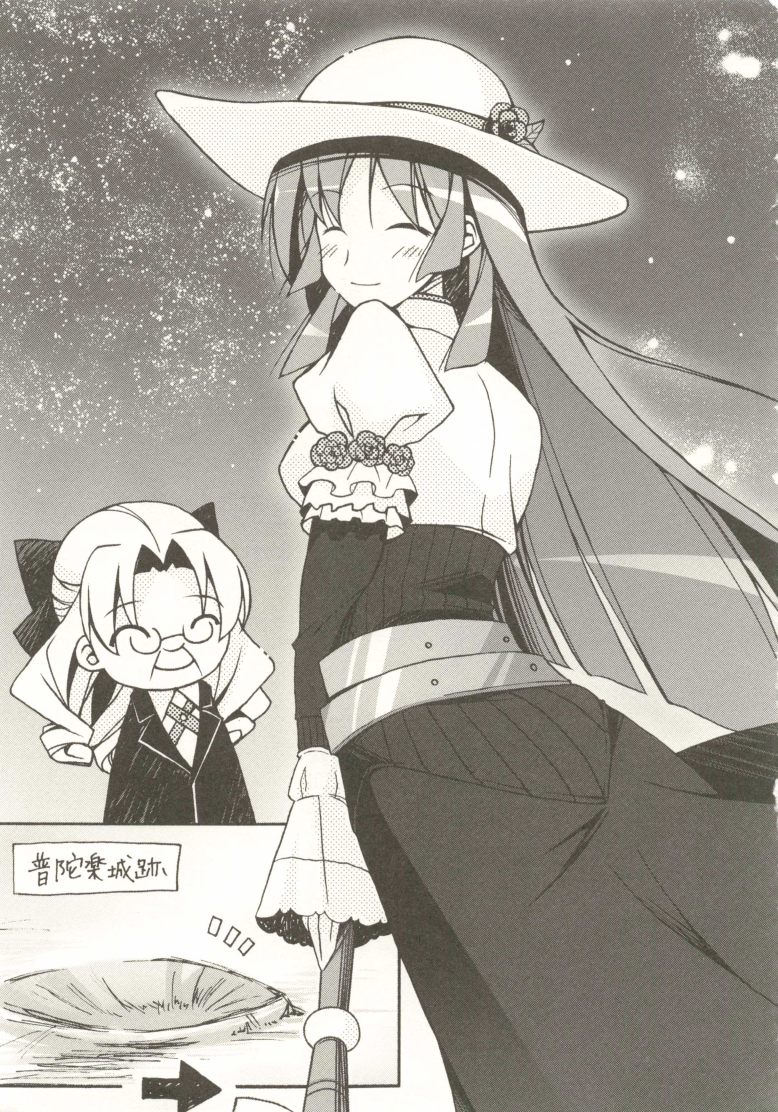
「あ、マジカルアベンジャーだ」
光が言ったその言葉にギョッとして、顔を上げる景明。流れる報道番組からは、事件についての新たな発表がされていた。
どうやら犯人に懸賞金がかけられたらしい。
「あら、この二人が映ってるわよ」
テレビに知り合いの姿が映し出され、驚きの声を上げる村正。しかし、彼女にはその意味がわかっていないらしい。
そこに映っていたのは、指名手配犯として公開された、大鳥香奈枝と永倉さよの写真であった。

◆◆◆

カンカンカンと硬質な音が遠ざかり、全てを暗闇が塗り潰した。
それからしばらくして、暗闇の中に小さな灯りが灯る。照らし出されたのは、妙齢の女性と老婆の顔。
「行ったようでございますな」
「ああ、なんかドキドキしてしまいましたわ」

香奈枝とさよは顔を見合わせ、控え目に笑い合った。
大和から欧州へと向かう一隻の貨物船。その船上に彼女たち二人の姿があった。
「たまには、こういうのもスリルがあって愉しいわ。ばあやもそう思わないかしら？」
「はっきり言ってご遠慮申し上げたいですな。次は、一等客室での優雅な船旅を所望致します」
さよの返答に香奈枝は子供っぽく頬を膨らませた。表情を改めたさよは、主人に問う。
「祖国を後にすること、寂しくはございませんか、お嬢さま」
「ふふ、そんなに心配なさらなくても大丈夫ですわ。もうわたくしも子供ではないのだし、欧州に赴くのだって初めてではないでしょう？」
「そうでございますな。これは失礼を申しました」
さよが見た香奈枝の瞳には、はたしてどのような感情が浮かんでいたのか。彼女は従者然と頭を下げた後は、何も言わなかった。
「この国にわたくしができることはもうない。まあ、心残りがないとは言わないけれど。でも、きっと欧州にもわたくしの復讐心を必要としている民が待っているはずですもの」
こうしてマジカルアベンジャーは、数々の悪名を大和に残し、祖国を旅立つのだった。
新たなる敵と復讐の機会を求めて。

（最終話・了）


普陀楽城跡

あとがき

どうも皆様、初めまして。本作を執筆しました凪小石と申します。
本書を手にとって頂き、誠にありがとうございます。
読者様方にはご存じの方が多いと思われますが、本作はＰＣゲーム『装甲悪鬼村正』の舞台・キャラクターをお借りした短編集となっています。
「スラッシュダーク・アドベンチャー」と銘打たれ、独特の雰囲気を醸し出す原作とは違い、コメディ方面にベクトルを振り切った作品になっております。
原作とはまた違った魅力を感じて頂ければ幸いです。

人生にはままならないことが多分にあり、意に沿わない選択をしなくてはならない状況が多々あります。
原作でも、それぞれのキャラクターが自分の信念に基づき、苦しい選択肢の中から最善を選び取っていく様が印象的でした。
私は基本的にハッピーエンドで終わるのが好きでして、物語に入り込むと、不幸な結末を迎えたキャラクターが、一体どうすればより良い未来を迎えられたのか、などと考えて

しまうことが多くあります。
このキャラクターが、この状況でこういう選択をするのは必然。ならば、もし自分がこの場に居合わせ、物語に影響を与えられたら……どんな言葉をかければ、よりよい方向に進めることができるのか、と。
まあ、そんなことを考えていた割には、本書の登場人物たちも別の意味で酷い目に会っていたりするような……いや、幸せって人それぞれですよ！　ドタバタ楽しく毎日を過ごせて、羨ましい限りじゃないですか！

さて、最後に謝辞を。
監修をして下さったニトロプラスのスタッフの皆様。
イラストレーターの馨。様。ハーヴェスト出版編集部、及び担当編集のTさん。
楽しみながら(好き勝手？)執筆をさせて頂きました。ありがとうございます。
今これをご覧になっている読者様にも、最大級の感謝を。

それでは、また別の機会にお会いできることを祈りつつ、今回はこの辺で。

なごみ文庫をお買い上げいただきありがとうございました。
この本を読んでのご意見ご感想をお待ちしております。

〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町 1-8-3　長谷川ビル１Ｆ
なごみ文庫編集部「装甲悪鬼村正　暴走編」係

ニトロプラス劇場
装甲悪鬼村正　暴走編
2010年7月5日　初版発行

原　作――Nitroplus
著　者――凪小石
発行人――河出岩夫
編　集――高橋宏幸
発行所――有限会社ハーヴェスト出版
〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町 1-8-3
長谷川ビル１Ｆ
TEL. 03-3865-7778
FAX. 03-3865-7779
発　売――株式会社星雲社
〒112-0012　東京都文京区大塚 3-21-10
TEL. 03-3947-1021
FAX. 03-3947-1617
印　刷――中央精版印刷株式会社

©2009-2010 Nitroplus ©Koishi Nagi
2010 Printed in Japan
乱丁・落丁本はおとりかえいたします。
ISBN978-4-434-14539-1

ニトロプラス劇場

装甲悪鬼村正

暴走編

凪小石

原作：Nitroplus

ハーヴェスト出版
640

なごみ文庫新刊情報（８月～）

『CLANNAD　MysteryFile：01（仮）』
『リトルバスターズ！エクスタシー　ＳＳＳ Vol.9』

なごみ文庫既刊一覧（各巻 640 円＋税）

味塩ロケッツ with 企画屋／著
『ANGEL MAGISTER　とらいあんぐる・すくらっち！』
糸井健一／著
『ブラッドチューン　The NOVELIZATION』
『天神乱漫　～夏の夜の悪夢（ゆめ）～』
歌鳥／著
『花と乙女に祝福を　短編集』
小形聖史／著
『聖なるかな　光をもたらすもの編　上・下巻』
児玉新一郎／著
『Flyable Heart　ＳＳＳ』
雑賀匡／著
『リトルバスターズ！　三枝葉留佳の事件簿』
『聖剣のフェアリース　Short Stories』
座敷猫 with 企画屋／著
『輝光翼戦記天空のユミナ外伝 柏木るみねと二次元愛好会』
凪小石／著
『ニトロプラス劇場　装甲悪鬼村正　暴走編』
野山風一郎／著
『ニトロプラス劇場　SMG―凄く真面目な外伝―』
御門智／著
『恋姫†無双外伝　紫電一閃！ 華蝶仮面』（全四冊）
『ひぐらし。 Vol.1 ～ Vol.2』
『ひぐらしのなく頃に　～ほのぼの罪滅し編～』
水崎睦月／著　、
『えたーなる☆ふれんど』
村田治／著
『リトルバスターズ！ エクスタシー　僕らの学園祭戦争』
『ToHeart2　MultipleChoice ～貴明隠し子騒動 !? ～』
『ToHeart2　TwoPieces ～愛佳とささら～』
『ToHeart2　TwoPieces ～このみと環～』

《アンソロジーノベル》
『かおす；へっど』
『くらなど。 Vol.1 ～ Vol.3』
『CLANNAD　ＳＳＳ - opal - , - emerald - , - sapphire -』
『ステラ☆シアター　Quartet memories』
『リトルバスターズ！　ＳＳＳ Vol.1 ～ Vol.4』
『リトルバスターズ！エクスタシー　ＳＳＳ Vol.1 ～ Vol.8』
『りとばす。 Vol.1 ～ Vol.2』
『真剣で私に恋しなさい！　短編集 壱，弐』

なごみ文庫
な-1-01

ニトロプラス劇場
装甲悪鬼村正
暴走編

凪小石
原作：Nitroplus

ハーヴェスト出版
640

9784434145391

1920193006407

ISBN978-4-434-14539-1
C0193 ￥640E

定価（本体 640 円 + 税）

発行／ハーヴェスト出版
発売／星雲社

ニトロプラス十周年記念大作「装甲悪鬼村正」
なごみ文庫にて登場！

ゲーム本編とはどこか違う大和国。鎌倉警察署の非正規警察官・湊斗景明はおおむね平和に暮らしていた。
村正と一条が割烹着で競い合っても、邦氏が恋に悩み色々相談を繰り広げても、香奈枝と茶々丸が景明を取り合っても、劔冑（つるぎ）たちが人一人と壮絶な戦いを繰り広げても、獅子吼が不敵な顔で評定の間に乗り込んでも、謎の高身長ゴスロリ女が街で暴れていても。
それでも大和国は平和だった。

これはマトモな物語ではない。本編を望む者は不要である。